

酪農乳業史研究

9号

(平成26(2014)年9月)

目 次

巻頭言	中瀬信三	1
【シンポジウム】		
第6回シンポジウム：明治期の東京市乳界の礎を作った牛乳屋たち		3
基調講演：和田牧場の明治・大正・昭和	黒川鍾信	5
パネルディスカッション	和仁皓明・黒川鍾信・古谷恒夫・森田邦雄	7
【論文】		
豪商全傳 前田留吉氏傳の公表にあたって		
I 前田留吉氏実傳の出版とその史的背景	足立 達・矢澤好幸	11
II 豪商全傳前田留吉氏傳の特徴	足立 達・矢澤好幸	28
【解説】		
豪商全傳前田留吉氏傳（解説）	足立 達・細野明義	39
豪商全傳前田留吉氏傳（原本）		42
【調査報告】		
野菜地帯における酪農経営の推移と実態の事例	石川秀勇	44
【資料】		
千葉県における酪農発展の経過	石井利男・錦織純雄	50
【エッセイ】		
御料牧場つながり	鈴木慎二郎	61
【会務報告】		
投稿申込書・入会届		63
編集後記		65

日 本 酪 農 乳 業 史 研 究 会

252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部畜産マーケティング研究室内



日本の牛乳は、日本で作る！

牛乳は国産100%



いつものお店にいつも並んでいる、牛乳。

これ、国産100%です。

「ちょっとは輸入してるでしょ？」と思うかもしれませんが、ぜんぶなんです。

日本の酪農家が、日本の牧場で、だいじに世話した牛たちから、
毎日搾って、つくっています。

だから、おいしさに、やさしさに、自信があります。

これからも、安全でおいしい日本の牛乳を、よろしくお願いします！

一般社団法人 **中央酪農会議**

<http://www.dairy.co.jp>

巻 頭 言

日本酪農乳業史研究会

会 長 中 瀬 信 三

平成20年の春に発足した日本酪農乳業史研究会は今年の4月で7年目を迎えました。私も足立達初代会長と柴田章夫会長の跡を承けて三代目の会長を仰せつかってから早2年が経過致しました。

暗中模索をしながらどうやらここまでやってこられたのは、会員の皆様が日本の酪農乳業の来し方行く末を絶えず案じながらこの研究会活動に関心を持って下さる賜物と感謝している次第です。

当研究会発足以来4年間に4回開催したシンポジウムを主とした活動状況については、当研究会の会誌第7号の巻頭の挨拶文に記載した通りであります。その内容としては、「日本における酪農乳業の近代化の軌跡」を共通のテーマとし、それぞれに副題を設けて、酪農乳業が時代の流れと共に如何なる変遷と発展をとげて来たかを振り返って咀嚼し、明日への糧とすることに務めて参りました。

その後の動きとしては、昨平成25年3月に開催した第5回目のシンポジウムでは、4回目までの産業発展の経緯のフォローに主眼をおいた検討の進め方とは趣を変えて、歴史的な意義を持つ特定の事象に焦点を当ててみる事と致しました。そして、先ずは酪農政策を採り上げ、「不足払い法制定当時の酪農乳業情勢」と題して、この制度発足当時の行政の責任者（農水省牛乳乳製品課長）であった佐野宏哉氏に基調講演をお願いし、小林信一氏の司会のもとに西原高一（元中央酪農会議副会長）、伊藤守男（元森永乳業専務取締役）、細野正昭（元明治乳業常務取締役）、小川澄男（現雪印メグミルク常務取締役）、香川莊一（元家畜改良事業団理事長）氏等、当時の業界の情勢や実務に精通した生き証人とも云うべき方々の、実務経験を踏まえたこの制度の種々相を巡っての貴重な意見の開陳をお願いしました。

このシンポジウムの内容を紹介した会誌の第8号では、評議員の山本公明氏（元農水省図書室長）に資料の整理をお願いして、不足払い制度の関係統計資料、関連施策の変遷を示す年表、関係図書資料目録等を一括して、不足払い制度関係資料として掲載し、読者にこの制度を手軽に学べる参考資料としても活用して頂けるように編集致しました。

今回発行してお届けする会誌の第9号に掲載した、昨平成25年10月に開催された第6回目のシンポジウム、「明治期の東京市乳界の礎を作った牛乳屋たち」は、「酪農乳業の黎明期の趨勢」と題した第4回目のシンポジウムの続編とも云えるもので、明治期に始まる東京の市乳業者の栄枯盛衰を、実例をもって検証するとの意図のもとに、東京の市乳業界の名門であった和田牧場一族の一人であり、「東京市乳物語」の著者でもある黒川鍾信氏をお招きして、「和田牧場の明治、大正、昭和」と題する基調講演を頂き、その後和仁皓明氏の司会のもとに、黒川鍾信、古谷恒夫（コーシン乳業社長）、森田邦雄（元厚生労働省乳肉衛生課長）の三氏によって議論を深めて頂いたものです。

その他、この会誌第9号の内容としては、第2回目のシンポジウムで齋藤多喜夫氏（元横浜開港資料館調査研究員）が提起された「前田留吉は実在したか？」と云う問題に関連して、最近当研究会の矢澤常務理事が発掘した「豪商全伝前田留吉氏伝」を紹介すると共に、これを基に、足立名誉会長、細野編集委員及び矢澤氏の三氏が、こもごも、前田留吉氏の横濱での搾乳業者としての活躍ぶりを含め、その生涯を検証する論文と解説をご投稿下さり、当研究会が活発な史実探求の場である事も立証して下さいました。

次号の会誌（第10号）でご報告する、去る6月28日に開催された第7回目のシンポジ

ウムは、今後乳製品の各論的研究も深める手始めとして、標題を「日本におけるチーズ製造の歴史的発展」とし、元雪印乳業八ヶ岳チーズ研究所長の柏英彦氏の基調講演に次いで阿久沢良造氏をコーディネーターとして酪農乳業界を代表する4人のパネリスト（柏氏、石原日本乳業協会常務理事、内橋中央酪農会議事務局長、野澤（株）野澤組食品部長）によって「ナチュラルチーズと日本食文化」と題して、チーズの生産技術、生産者の対応、政策的対応、及び日本と欧州間のチーズ食文化の比較論等貴重且つ興味深い討議を行って頂きました。

このように、今後の当研究会の在り方としては、酪農乳業発展の歴史を、産業史的、技術史的、行政史的、文化史的、国際的等々の各側面から、出来るだけ広く深く探求して行きたいものとの欲張った理想を掲げ、それらを少しでも現実のものとするべく同好の士である会員の皆様と共に歩んで行きたいと念じております。

当研究会はその発足にあたっての設立構想として、温故知新をモットーに「賢者は歴史に学ぶ」精神を堅持し、研究の水準を示す会誌は国際性を備えた学術誌のレベルを目指し、会員も100名は確保したいとの考えが示されております。

会員の皆様のご協力とご努力に依ってその目標に向かって前進しつつありますが、まだまだ前途には、解決し克服すべき問題が多々あると存じます。

シンポジウムはどうやら軌道に乗りつつはありますが、会誌については、多くの方々にご投稿を頂き感謝致しておりますものの、内容的には更に検討し、充実させる余地があると存じております。

会誌の内容は、「シンポジウムの内容紹介」、「論文」、「解説、総説」及び「エッセイ」等で構成されておりますが、その根幹ともいえる「論文」については、第8号迄で8編のご投稿を頂いており、その内3編は足立名誉会長、2編は矢沢常務理事、その他は宮本宅岡山大学教授、平田昌弘帯広大学準教授並びに徐さん始め4人の韓国からの留学生、の諸氏から各1編となっております。足立名誉会長始め格調の高い論文をご投稿下さった方々に心からのお礼を申し上げますとともに、今後とも論文部門のより一層の充実と向上のため、会員の皆様からのご配慮とご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

「解説」についても多数の方々から興味ある話題についてのご投稿を頂き感謝いたしておりますが、今後とも「エッセイ」共々お気軽にご投稿を賜りたく存じております。

国際的な部門についても、これ迄に数編の国際性を備えた論文等のご投稿を頂き感謝致しておりますが、我が国との関係を重視した貿易、貿易交渉、及び国際協力に関する諸問題の掘下げや関連情報等のご投稿を頂ければ更に有益かと存じます。

以上、当研究会の活動状況のご報告と所感の一端を申し上げましたが、今後の当研究会の対応ぶりを考えますと、先ず、歴史研究の体制と陣容を強化するためには、矢張りもう少し多数の大学関係の諸先生や問題意識を持つ学生さんやOB諸氏並びに関連産業も含めた実業界の皆さんの更なるご参加が期待されます。

会員数は100名は確保したいとした設立構想については、現在はまだ80名程度ではありますが、去る第5回目の不足払いをテーマにしたシンポジウムには130人余のご参加を得ております。

当研究会の今後の活動も、時宜を得た研究テーマの選択とその検討気運の醸成並びに研究推進方法の改善に務めれば、日本の酪農乳業のより良き未来に向けて敢然と立ち向かおうとしている多数の関係者の皆様に聊かのお力添えが出来るのではないかと考える次第でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

シンポジウム

第6回シンポジウム：明治期の東京市乳界の礎を作った牛乳屋たち

第6回シンポジウムは、平成25年10月5日(土) 日本大学櫻門会館（東京都千代田区五番町）において80名の参加者を迎え盛会裏に開催することが出来ました。シンポジウムの内容は下記の通りである。

シンポジウムの次第

開会挨拶 中瀬 信三（日本酪農乳業史研究会々長）

第1部 基調講演

・和田牧場の明治・大正・昭和 黒川 鍾信（作家 元明治大学教授）

第2部 パネルディスカッション

パネリスト 黒川 鍾信（作家・元明治大学教授・和田牧場末裔）
古谷 恒夫（コーシン乳業(株)社長・興真舎牧場末裔）
森田 邦雄（全国発酵乳・乳酸菌飲料協会専務理事）
コーディネーター 和仁 皓明（西日本食文化研究会主宰）

閉会挨拶 阿久澤良造（日本酪農乳業史研究会副会長）

第3部 交流会 （櫻ホール）

シンポジウムの概要

第1部の基調講演では黒川鍾信氏より「和田牧場の明治・大正・昭和」と題する講演が行われた。黒川先生は和田牧場の創始者和田半次郎の娘婿2代目該輔の長男の系統で、木暮実千代は叔母にあたる人である。創始者半次郎は徳川幕府の鷹匠として仕え、沼津兵学校で牛乳を学び、前田留吉の指導を受け下谷二長町で牛乳店を開業した。そして2代目該輔は医者の子であったが、牛乳に情熱を燃やし事業拡大を行い東京市乳界において不動のものにした。さらに3代目重夫は低温殺菌牛乳を最初に手掛け先進的に乳業事業を行った栄枯盛衰の70年の秘話を客観的に語られた。



和田牧場の明治・大正・昭和を語る和田牧場の末裔・作家黒川鍾信氏

第2部はパネルディスカッションに移り和仁先生の司会により明治後期における市乳界の動向は失業した武士たちが搾取業を選じたのは文明の香りがしたからと動機付け、①森田氏は衛生概念を他国と比較しながら、衛生規制の歴史観点から食文化に違いが病気発生に深く関り、早くから搾取業者は衛生概念をもっていたと追及。②古谷氏は戦時統制や農地解放の当時の苦しい時代を切

り抜いてきた創業者の貴重な証言を交えながらコーシン（興真舎）牛乳の4代目として107年に及ぶ歴史を紹介した。さらに、③黒川氏は沼津兵学校で徳川幕府に仕えた人々は早くから牧畜（酪農）に目をつけていたと紹介した。これらを踏まえ、和仁氏は、明治政府は薩長の下級武士が作ったのは事実だが、当時の徳川幕府中間層であった人々、即ち官僚によって支えられた事を追及し、明治期の市乳界の礎を作った牛乳屋（搾取業者）たちも、旧旗本の人が多く、彼らの努力と先見性によって今日の酪農乳業界の原型を作ったと結んだ。

毎回シンポジウムの恒例になっている、トモエ乳業(株)により、牛乳に関する貴重なコレクションの展示をして下さり、加えて牛乳及び乳飲料を提供して頂いた。また遠く宮崎の中西牧場より古代乳製品（甘乳蘇）、さらに今回は飛行機で冷凍運搬し特別にアイスクリームを提供



パネルディスカッション
「明治期の市乳界の礎を作った牛乳屋たち」
（左から黒川、古谷、森田、和仁（コーディネーター）各氏）

していただいた。常に研究会を盛り上げ、そしてシンポジウムに華を添えてくださったことに有難く、深く感謝とお礼を申し上げます。

第3部は、櫻ホールで会員同士の深い絆を結ぶ交流会が、多くの参加者を迎え終始和やかなの宴が開催され、乳

文化史論にも折に触れ、盛会裡のうちに終了した。

なお、シンポジウムの貴調講演及びパネルディスカッションについては、演者のお話しの内容について次頁より示しましたが、全て掲載できず一部省略をしたことに対し深くお詫び申し上げます。
(矢澤好幸)



研究会々長挨拶 中瀬信三氏



強国舎(明治34年創業)牛乳店(現在廃業)

3代目草間悦子さん(立っている 左)、4代目寺島節子さん(立っている 右)がシンポジウムに参加していただいた事を事務局長より紹介された。



交流会風景
乳文化について談論風発の一コマ

シンポジウム

基調講演：和田牧場の明治・大正・昭和

黒川 鍾 信

紹介頂きました黒川です。

英文学会では色々発表してきましたが、本日は畑違いの素人が専門家の前でしゃべるわけですから、大変緊張しています。拙著・東京牛乳物語を出版してから、資料の紹介や多くの人との出会いがありました。今年の1月下旬で叔母の「木暮実千代」のことをお話した折りに、和仁先生とお会いして本日お話をさせて頂くことになりました。

大学は教育と研究が主です。55歳の時、論文だけではなく一般書を出版しようと思い立ち、その4冊目が東京牛乳物語で多くの方が読んでくれたようです。

1965年にウィスコンシンに行ったとき、私の友人が人口7000人程の地域で乳牛50頭程飼育している中規模の牧場を案内してくれました。ここには北海道の青年が牧場実習で来ていて宇都宮牧場の2代目の勤さんが彼を励ましに来ていたからでした。その青年が「アメリカにきたから酪農以外も見たい」と言っていました。宇都宮さんは、「酪農だけでよい、酪農の実習にきたから」と言っていました。

私の友人がウィスコンシンで校長をやっていました。日本の校長は年功序列制ですが、アメリカでは一般の先生になるコースと校長を目指すコースが選択制になっていますので、彼は30歳代ですでに校長でした。教育方針は各地域によって行われるので、ここでは酪農学が織り込まれていました。

1987年息子がウィスコンシン州内の全寮制の私立学校に入学しましたので、年1〜2度ほど学校側と家族とが食事をしながら懇談する機会がありました。知事や教育長は日本と異なり選挙でえられますが、教育長は既に日本に視察に来ていて、日本語教育をしたいのでボランティアの先生を探して欲しいということから、私とウィスコンシンとの繋がりが出来ました。ウィスコンシンは酪農地帯で親が早朝から仕事をする姿を見ているので、子供たちは真面目で且つ勤勉であることから「ぐれない」と言われています。こんなことを題材にした本を自費出版しましたが余り売れませんでした。三年後は丑歳でした。牛の絵の年賀状をたくさんもらいました。それがきっかけで今度は「牛」のことを書こうと思い国会図書館に出向き資料を探しましたが少ししかありませんでした。そこで明治4年に東京で牛乳搾取業を始めた先祖の事を

書こうと決めて図書館前でタクシーを拾い、英国大使館の横にある阪川牧場の跡地（松本良順の義伯父が経営）、さらに飯田橋の北辰舎の跡地を見て、叔母（神楽坂）の家に行きました。車中で昔の牛乳屋さんの本を書きたいと運転手さんに言う。「旦那、ぜひ書いて下さい。一冊買います」の言葉に勇気づけられました。

私の住む神奈川県大磯町には、松本良順（後に順）の屋敷跡やお墓があります。良順は牛乳が健康にかかせないと提唱した事で有名です。さらに健康に良い海水浴の海岸を探していました。

そして諸条件が適う地が大磯海岸である事が解りました。東海道線は新設工事中で小田原に別荘を持っていた伊藤博文は、とくに大磯が適地であることを松本良順に勧められ彼は別荘と関係者の施設を作りました。このことから大磯は海水浴場として有名になり駅もできました。

和田牧場の2代目の該輔は眼科医の息子で東大薬学科を中退して和田家に婿入りして牧場を継いだ優秀な人でした。初代半次郎は徳川の鷹匠で徳川慶喜が静岡に移付したときにお供して、それから沼津兵学校で働きました。

今でも資料館があります。（注・沼津市明治史料館（江原素六記念館）・江原素六（1842～1922）は明治維新に際し江戸から沼津に移住した旧幕臣で沼津兵学校の設立に尽くした・卒業生は日本の近代化に貢献した人材を多く輩出）

半次郎は沼津の愛宕山で牧畜の勉強しながら兵学校の事務長として勤務していました。半次郎は牛乳屋を生業にしよう和前田留吉を訪ねていたと思っていましたが、それ以前に第15代将軍慶喜も牛乳を飲んでいて、沼津兵学校で牛乳知識を知っていた事を後から沼津史料館の人から教えて貰いました。また深夜放送で五回にわたり拙著が取り上げられたときは牛乳を配達する人が配達前に聞いてくれました。こんなことから思わぬ時に思わぬ人から資料を頂きました。ここに和田牛乳店が昭和2年に発行した「低温殺菌牛乳」の18頁の貴重な小誌があります。低温殺菌牛乳について外国の事例を引用し、低温殺菌牛乳を製造する施設を紹介し纏めてあります。（注・日本酪農乳業史研究会が資料を保管）

和田家は代々婿取りが続きました。半次郎の娘は美人であり彼女も婿取りで2代目を継ぎます。この人は大変

優秀で事業を拡大して東京に和田牧場の基礎を作りました。美人の娘を産みよい婿を貰えば商家は繁盛につながると言われますが、2代目には3人の女の子が生まれ、その後長男が生まれたのが私の祖父でした。この人は大変な遊び人だったので勘当されてしまい下関の検疫所で働きます。他方長女と結婚した和田瀾平は開成中学から札幌農学校を卒業した優秀な農学士でした。彼は明治39年にアメリカのシアトルへ渡り「グレート・ノーザン鉄道」に乗り換えウィスコンシンで20頭の牛を買い「中乗り」してシアトルまで運び、そこから船で牛たちを日本に連れ帰りました。彼は牡牛を多く買いましたが、それは和牛と交配して品種改良をするためでした。この20頭を「中乗り」して3,500km運ぶのには、水を確保するのが大変でした。次の駅まで半日位かかりますから。私はこのコースを車で走ってみました。デポ（駅）に井戸があるくらいで、水の確保がいかに困難だったかを実感しながら「中乗り」は本当に大変な仕事であったと思いました。詳細について東京牛乳物語の附記に書いてあります。この部分が大変好評でした。

かつてドイツ北部を旅をしたとき酪農家に世話になり、バターやチーズをご馳走になり酪農について色々教えて貰いました。ホルスタイン種牛の産地のホルスタイン州

でした。

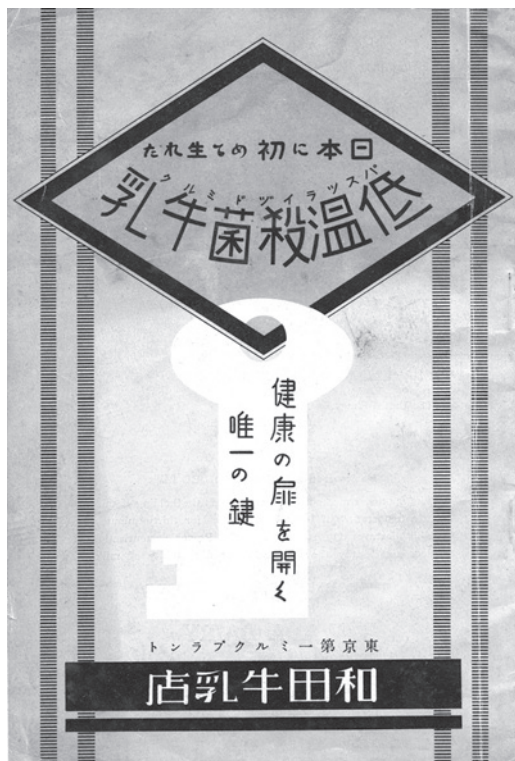
東毛酪農協の若林さんに頼まれ、牛乳配達の仕事をする方たちに講演をしました。この仕事は明治時代から大変苦勞されていることが解ったようです。

この東京牛乳物語を書いて酪農家は毎日朝早く休みなく一生懸命やっていること。また明治期まで飲むことがなかった牛乳を日本人が飲むようになった先駆者の努力をこの本から読み取って下されば大変有難く思っています。パネルディスカッションにも参加しますのでこの辺で終わりにさせていただきます。

プロフィール

黒川 鍾信（くろかわ あつのぶ）

昭和13(1938)年東京生まれ、明治学院大学大学修士課程修了後、カリフォルニア大学ロサンゼルス（UCLA）留学、明治大学情報コミュニケーション学部教授、作家、専門は英詩、主な著書「東京牛乳物語 — 和田牧場の明治・大正・昭和」（新潮社）「旅に出よう 船で」（講談社第10回日本自分史学会優秀賞受賞）「木暮実千代 — 知られざるその素顔」（日本放送協会）「神楽坂ホン書き旅館」第51回日本エッセイスト・クラブ賞受賞など



低温殺菌牛乳の冊子
(和田牛乳店 昭和2年発行)

シンポジウム

パネルディスカッション：明治期の東京市乳界の礎を作った牛乳屋たち

和仁 皓明、黒川 鍾信、古谷 恒夫、森田 邦雄

矢澤：唯今定刻となりましたのでパネルディスカッションを開会いたします。その前に若干事務局より本日のタイトルを作った経緯をお話させていただきます。袋に用意した「第6回シンポジウム資料」をご覧ください。その中に「明治期の牛乳屋（搾取業）の創始者（東京）」という資料があります。先程は和田牧場の話しを詳細にして頂きました。左から前田留吉、喜代松、源太郎です。所謂前田一族ですが明治期の市乳界を牽引した事は皆様ご存知の通りです。今まで、どの書籍をみても生没年月日がわかりませんでした。この度一族の菩提寺を調査したので全て解りました。また留吉の直系三代目が95歳で健在であり娘さんと同居している事もわかりました。近々お会いすることになりましたので貴重な資料が発掘できるものと思います。次は阪川当晴ですが明治初年に開業した老舗です。松本良順が甥に当たりますが彼の薦めで牛乳店を開業した旧旗本です。次が和田牧場の2代目和田該輔です。初代は半次郎ですが写真を見つける事ができませんでした。実は半次郎の奥さんと留吉の奥さんは姉妹です。又該輔の姉は喜代松の奥さんです。さらに該輔の娘婿(広瀬潤平)は興真舎と深い関係があるという事でした。次が興真舎の開祖の古谷精一です。本日お越しの古谷社長の祖父に当たります。明治・大正・昭和の乳業界の役職につき指導者として大変活躍されました。次の方が強国舎の開祖田村貞馬です。先程黒川先生より話しがありましたが、既に明治34年にウィスコンシン大学に留学して牛乳の勉強をされました。その知識を持って帰国後強国舎を創業しました。そして「牛乳問答」という本を書き、牛乳の普及啓蒙を図りながら乳業界のまとめ役として活躍されました。先般4代目とお会いして貴重なお話を伺ってきました。本日は4代目田村宏さんを中心に母方(3代目)の叔母草間悦子さん及び妹(4代目)の寺島節子さんに来ていただきましたので皆さんにご紹介します。(2人共起立して頂き皆さんに紹介した。⇒4p写真掲載)

次の次が新原敏三です。彼の息子は芥川龍之介です。渋沢栄一は仙石原に耕牧舎を作り下総種羊場から須永伝蔵、新原敏三、松村泰次郎を招聘しました。東京での新原の耕牧舎の活躍は既知の通りです。その一人松村泰次郎の末裔である松村喜代一さんが現在でも埼玉の深谷で牛乳販売店を経営され、当時のお話や貴重な資料をいた

だいてきました。次の写真が東京23区最後の牧場といわれた「四谷軒牧場」の2代目佐々倉伝吾です。4代目は本日お越しの長尾先生(元日大獣医学科教授)と同期と言う事でシンポジウムに来ていただこうと思っていましたが、この春死亡され本当に残念でした。近くに弟さんがレストランを経営されているとのことで機会を見て長尾先生と共に調査する予定です。以上のように事務局として明治期の牛乳屋の末裔を探し当時の様子をこれからも調査研究する事にしています。本日もその一環として企画したシンポジウムであります。従って、和田牧場、興真舎、強国舎の末裔のみなさんに来ていただきました。

先程中瀬会長より和仁先生、森田専務、古谷社長、黒川先生など関係者のプロフィールの紹介がありましたので省略して、早速コーディネーターの和仁先生に渡します。宜しくお願いいたします。

和仁：中瀬会長よりご丁寧にご紹介をいただきました和仁であります。平成4年まで雪印乳業(株)の研究所にいました。乳業界の歴史を振り返って調べますと、家族や弟子の方が自伝を書いたものがありますが、客観性に欠くものも多く、その中には色々の事があります。例えば悪い事は書かないと言う事もあります。しかし黒川先生の「東京牛乳物語」は和田一族でありながら客観性に述べられ信頼性がある内容であります。これらの内容は日本の乳業界に絡んでくるものが多くあります。先程もありましたが明治維新から日本の牧畜文化をみると、国家的奨励したときも日本人は生乳を飲む習慣がありませんでした。これは食品衛生行政にもからんできます。詳細は後ほど森田先生から解説してもらいます。

明治維新は文化の大革命でありました。目にみえる物としてハリスやペリー等の外国人を見たのは、長崎は別として、当時の庶民は殆んど始めてでありました。その頃平均身長は10cmほど違って、幕府の役人が袴を着るとアメリカの軍人と比べて20cm位違っていました。これでは到底適うものではありませんでした。これは何が違うかというと、食べ物に基因し味噌汁と沢庵の日本人に対し、彼らは肉と牛乳でした。この差は明治の人も良く知っていました。

廃藩置県に絡んで失職した侍たちは、文明の香りがする斬新の牛乳という新しい仕事にすなおに関与したのであります。以前のシンポジウムは明治前期の話をしま

したので、本日は明治20年以降の後半の話になると思います。事前に打合せをしていますが、パネラーの方の考え方やこう思うという内容を10分位話していただき進めたいと思います。森田先生から産業の発展と食品衛生についてお願いいたします。

森田：乳業の発展に衛生規制がどのように関連してきたかと言う所から話しを進めて行きたいと思います。

一昨年IDFのサミットが南アフリカで開催されました。食品衛生に関する発表を聞いていると、食の文化の違いが病気と深い関係があることがわかりました。これはどういうことかということ、特にヨーロッパにしてもアメリカにしても先程話がいったように牛乳やチーズをつくるとき殺菌をしないことがあるため、腸管出血性大腸菌やリステリア菌による人の健康被害が発生し、牛型結核も結核の3%を占めるとの報告を聞きましたが日本では誰もが考えられないことです。

乳・乳製品に対する食中毒に関し不安を感じる人が日本には殆どいないのではないのでしょうか。

アフリカの話しを聞くとまさに日本の明治時代であるように思えるのです。アンケートを見ると殆んど死んだ牛を食べるというのです。発展途上国の経済力やレベルの問題であるのです。食と安全の問題は文化も絡んできます。日本の明治時代は乳の食文化の歴史が浅いから衛生規制の導入が早く出来たと思います。

日本の文化で刺身を加熱しなさいとは言わない。生で食べるための食中毒の対策がとられるようになったからです。食文化をコントロールする事が如何に難しい事が解ります。明治時代にどのようにコントロールしてきたかということ、その頃の食品衛生行政は、警察が行う警察行政でありました。最初は全国統一でなく牛乳の消費が急激に増えた東京から始まります。

明治6年に東京府知事は「牛乳搾取人心得規則」を交付し、牛の不潔臭穢れないように、そして鑑札を受けなさいといった。明治11年に改正された時には、牛乳に他物を入れない（加水対策）。塵埃を入れない。病気の牛は医者診断を受けなさい。病気の牛から搾った乳は売っていけない。というものでした。明治18年には警視庁が牛乳営業取締規則を公布し牛乳営業の免許制、牛が病気にかかった時の届け制等の規制を行いました。明治24年には牛乳容器の有害性物質の規制、牛乳は分娩後1週間経過しないと販売できない等の規定をしました。これらの衛生規制はドイツを参考にしたものであり、戦後GHGの指導を受けるまで続き、その後はアメリカの規制が基本となり今日にきています。また警察衛生行政、即ちサーベル行政は終戦まで続きました。明治33年には食品の全般が規制されました。特に内務省令の牛乳営業取締規則は、全乳及び脱脂乳の区分、牛乳の比重、脂肪（2.7%）など規定されました。明治43年に脂肪は

3.0%以上に改定され、測定法が従来のマルシャン法から精度の高いゲルベル法が採用されました。

昭和8年に内務省は、牛乳営業取締規制を大幅に改定しました。牛疫に罹った牛や例えばモルヒネなど含有する製剤を服用した牛から搾乳を禁止しました。牛乳など細菌数が2万以上のものは販売できませんでした。そして検査法はブリード法でした。牛乳の殺菌法は低温殺菌法（63～65℃ 30分）、高温殺菌法（95℃ 20分）に定められました。この規制は今日の乳等省令の基礎であり重要な取締り規制になっています。日本の衛生管理は徹底しています。そして牛乳は乳児や弱者の食品という考え方は明治時代からありました。

和仁：明治時代は和田牛乳もそうでありましたが、個人経営から企業的に進めるにあたり殺菌牛乳を作るための設備投資が必要でありました。このため乳業者にとって特に昭和8年の省令改正で大変であったものと思われる。コーシン乳業は明治39年創業ですから、創業者はそれ以前の乳業界も知っていたので大変ご苦労をされていたと思います。大資本に吸収合併されずに独立経営できた、それなりの努力があったものと思いますが。その辺の経緯から……。

古谷：資料の写真に出ている興真舎の創業者の古谷精一は、私の祖父であり、私は社長として4代目になります。どのように発展してきたか、実は興真舎の名前、社章である△型のマークの由来はわかりません。初代は現役を離れ9歳のころ、非常に「囲碁」が好きで、晩年その仲間が3人ほど自宅に来ていました。その内二人は特高で即ち特別高等警察の人でした。先程お話がありましたように当時は牛乳は警察行政でしたから、そんな関係でお付き合いがあったものと思われます。碁会の折、色々戦前の話を聞きましたが、碁に夢中で余り話をしてくれませんでした。戦前の興真舎時代について、身内、親族、元従業員や関係者の方々から、色々過去の話聞いても、中には正反対のこともあり、正直言って当時の様子はよく解っていないのが現状です。

私は父から、会社を引き継ぐにあたって次の3点をきつく言われました。①銀行印と代表者印を区別しなさい ②この印鑑は他人に預けてはならない ③自分の会社のこと本業をしっかりやれ公職などやるものではない。

母の話では、明治39年生処販の一貫体制を作って創業しました。初代は創業時から軌道に乗せるまでよりも、関東大震災から太平洋戦争開戦のころ、即ち大正10年頃から昭和16年頃までの経営が一番大変だったと、初代が話したそうです。その一つは、都内での業界団体の会長職をやらせてもらっていたようですが、本当はやりたくなかったようです。というのは、“乳質を絶対保証できる責任ある牛乳は、牧場の経営、牛乳処理工場の経営配給機関の運営は一貫して同一の経営主体が行なわね

ばならない。”との信念のもと牛乳事業を行っていました。生産団体と販売団体が対立する、販売団体内部も角突き合せてなかなか話がまとまらなかったようです。そのとりまとめに時間が取られる。そして恨まれるなどで苦労しているより自分の会社の事をやれば良いに……と身内や番頭が初代に話をしても、立場上自分勝手に行動するものではないと言われたそうです。当時の酪農乳業界には、品質衛生面で課題が山積しており、牧場とプラントの併設禁止、プラントの改良、牧場の郊外移転等の行政指導が行われました。業界団体の責任者であった初代は衛生行政の流れを他に先じてわかる立場にありましたし、他に範を示す意味でも、プラントの改良新設や都内にあった牧場を千葉習志野に集約し、ここで生産した生乳を都内のプラントに運び、殺菌処理びん詰めし配達しました。昭和の初頭のことでした。これが結果的に戦後会社を再興するのに役立ちました。初代は衛生面に気を使い牧場や工場をよく見に来て、特に牧草に異物が混入していなか注意していたようです。牧場は大事だとよくいっていました。幹部教育も厳しく「新聞を読め」「論語を勉強しろ」と言いながら、社員の躰を行い会社組織を強化しながら成長してきました。父（2代目社長）は学校を卒業するとすぐ支那事変に応召し、第二次大戦では北支を転戦し終戦と成りました。この間約10年、会社は統制会社に事業を移管、プラントも焼失、千葉習志野の牧場はほとんどを国に買い上げられ事業は中断しました。復員した父が農地解放された牧場畑を借り受け牧場とプラントを建設しました。

支那事変の始まった昭和12年から昭和20年の終戦そして昭和25年千葉の習志野牧場の跡地で市乳処理業を再興するまで激動の時期で色々あったと思いますが、現在も八千代事業所として牛乳事業を展開しています。

和仁：乳業界は武士出身者が多かったので中々話が纏まらない。そして明治の創業者は牛や牧草を大事にしたようです。それでは黒川先生3代目の重夫さんについては……

黒川：ここにある資料によると乳業の最初は前田留吉になっていますが研究者によるとそうでないと言う人もいます。横浜に前田橋がありますが、この前田橋を架け替えした時の「渡り初め」には前田喜代松一族が呼ばれています。和田と前田が何故親しいのかわかりませんが、前田の子孫であるという女性にワシントンで会い「私とあなたの家とは親戚」よ、といわれました。彼女はガイドボランティアとしてワシントン空港で案内してくれる83歳の親切で元気なおばあさんでした。彼女は前田喜代松の孫であり、外国人と結婚して、ヘイゼン・ヨシといい、非常に親切してくれました。目白の家を売りアメリカに母親と一緒に来ていました。帰国した時には親しく今でもお付き合いをしています。

榎本武揚の叔父さんは松本良順であります。大磯ではかなり有名ですが、彼は牛乳を奨励しました。反面福澤諭吉は牛肉を推奨しました。慶応を作った時にも、学生に牛肉を食べさせましたが、血抜きをしなかったので臭くて食べられなかったようです。

大磯では松本良順は神様みたいな人です。大磯は東海道の宿場でありましたが大変寂れていました。しかし大磯の海が、公衆衛生上海水浴に優れていると云う松本良順の話から一躍有名になりました。またこの地が別荘に適地ということで、伊藤博文が別荘を作ったので大磯の駅まで造ってくれ大変脚光を浴びました。松本良順の指導で榎本武揚と大鳥圭介は北辰舎を作りましたが約2年位牛乳屋をやっていたものと思われます。

資料の写真に出ているのが私の曾祖父で2代目和田該輔です。彼は養子で父親は上野の眼科医で有名であったようです。地元のはやり歌に「泣き泣き来たのに治療したら笑って帰る」といわれていました。良い目薬があったものと思います。従って該輔は医者の子であり優秀でしたが和田牧場で牛乳事業に携わりました。

大日本牛乳史（書名：大日本牛乳史・著者：十河一三・発行社：牛乳新聞社・発行日：昭和9年7月）という本があります。牛乳史を調べるのによく出来た書籍であると思います。該輔と著者とは非常に親しかったので出版に当り大変援助をしたようです。

当時、牛乳屋に務めた人には非常に苦労した人が多く北里柴三郎もそうですが、その後活躍した人が多くいます。北海道の町村さんも活躍しました。「東京牛乳物語」を出版した時に、当時文部大臣であった町村信孝さんから連絡を頂きました。従兄弟が牧場しているので、この本をみて感激したといわれました。

又、宇都宮仙太郎もそうでした。当時札幌農学校には結構東京からも行っています。今でいう東大進学校である麻布、開成、武蔵、灘校などの卒業生もいます。これらを見ると、乳業に携わった人たちは優秀な人が多いです。今まで牛乳を飲まなかった人たちに健康によいからという飲ませるわけですから、創意工夫をしなければならなかったのです。明治時代はこの仕事に携わる人は本当に優秀であり、今でいうベンチャービジネスであったのでした。

次に牛の「中乗り」があります。私は学生時代に浅間山麓の鬼押出周辺を山歩きしていますと土地の人と親しくなり土地を買えといわれました。現在嬬恋村に別荘を持っているのもこれが所以です。この時に馬の「中乗り」をしていた人に出会いました。嬬恋村は広大な土地でキャベツの産地で有名ですが、昔は馬を利用して開墾をしたのでした。このため、野耕馬を運ぶため山形から貨車と一緒に寝泊して中乗りをしたのでした。牛乳物語を書くときに大変参考になりました。牧夫は貨車の中で

糞や尿まみれでした。水が貴重でした。船は水と牧草はきちんと保管してあった様です。貨車はそうでなかったものと思われます。

そして、中国や韓国から輸入された肉牛は、下関の検疫所で検査のため40日位隔離されました。そこで働く人は、外にでられないのでおかみさんが3食とも弁当を差し入れるほど厳しかったのでした。40日後の検査がOKになれば、東京や大阪に中乗りして運ばれたものと思います。

徳川の人々は牛乳を飲んでいました。牛乳史を調べると徳川の旗本が牛乳屋を開き繁昌しているのを見ると研究熱心で優秀な人々であったものと思われます。今の酪農を見ると、牧草など自分で作る人もいますが外国から輸入する人が多いようです。また牧草を刈るのも今は機械を使いますが、明治の人は手で刈るので大変きつい仕事であったわけです。

この本を書く時に序文を送ってくれと言われました。大学教師が書いた本だから売れないと思っていましたがFAXを送りました。そうすると編集長の辻堂育ちの伊藤さんが、この本は「牛舎の臭いがする」といわれました。「酪農家ですか」と聞くと戦後食糧がないころ、父親が牛を飼っていて牛乳を近所に配っていたので本物の牛乳を飲んでいたという事でした。私は戦後進駐軍が配布した脱脂粉乳を溶かしたものを飲みましたが不味かった記憶があるのですが……。その辺、和仁先生如何ですか。

和仁：この時はアメリカからユニセフ（国連児童基金）の援助物質として脱脂粉乳を学校給食用に送られてきました。この脱粉は製造後3～4年経過したもので大変古く、品質的にはご指摘のように大変不味かったのです。しかし新鮮のものは結構美味しいものでダイエットに飲む人も多いので基本的には大変美味しいものであります。

先ほど黒川先生が沼津兵学校の話が出ましたが、牛乳考（明治5年発刊）以前の話ですので非常に興味を持っています。乳業史から見て貴重であり研究テーマにもなるくらいですので事務局で調べて頂きたい。

何かフロアーからご質問があれば…。

会場：江田島の海軍兵学校と沼津兵学校の違いはどうなっていますか。

黒川：15代将軍が駿河に移付されたとき随行した時の家臣が作ったのが沼津兵学校であります。従って海外に留学した家臣たちはヨーロッパの知識（牛乳知識を含む）をよく知っていました。愛宕山には牧場を作り乳牛を飼育していました。沼津兵学校は徳川幕府の末裔のみ入学が許可されました。明治政府を作った薩長の武士も偉かったのですが、沼津兵学校の卒業生たちが明治政府の実務を担当し即ち官僚を務めて活躍しました。

（事務局・注） 江田島の海軍兵学校（1876～1945）は、大日本帝国海軍の海軍将校の養成を目的とした教育機関である。

沼津兵学校は、（1868～1870…（兵部省に移管））フランスにならった軍隊を目指す目標を掲げ、沼津城内の建物を使い徳川家によって開校された。受校資格は徳川家の家臣が原則であり、校長は西周で、教授陣は海外に留学した徳川の家臣であった。従って前者は明治政府がつくったもので後者は静岡に移府した徳川の家臣がつくったものである。

和仁：牛乳は最初殺菌をしませんでした。牛乳営業取締規則により殺菌が義務つけられると乳業界は様変わりして乳業者の経営に大きく打撃を与えました。反面乳業界は食品衛生概念が生まれ、安心・安全の牛乳をつくれるようになり大変発展をしました。

牛乳はヨーロッパでバターやチーズを作る事が主であり液状について余り殺菌して飲むことはしませんでした。第二次世界大戦ではヨーロッパに参戦した米兵に牛乳（殺菌をしてないもの）を飲む時は注意するようと言われたそうです。アメリカと日本は殺菌した牛乳を早くから飲む習慣がありました。従って牛乳衛生法規は両国とも優れています。また戦後日本の牛乳は高温（UHT等）で殺菌していましたが、あまり加熱臭には抵抗なく受け入れてきました。これは日本に「お餅」や「焼きおにぎり」のように焦げ臭を好む食文化は古くからあったからです。

先ほど黒川先生も話がありましたが、明治政府は薩長の下級武士が作りしたのでマネジメントが出来ませんでした。従って徳川幕府の家臣が政府の官僚を務めました。このように明治期の市乳業の礎を作った牛乳屋たちは徳川幕府の末裔や多くの先人の活躍によって今日の酪農乳業の原型をつくったのです。時間になりましたので。みなさん有難うございました。

注：長時間に及ぶパネルディスカッションは、酪農乳業史に残る貴重な話題提供が沢山ありました。特に衛生法規、衛生統計、牛乳検査法、牛乳の加水、初乳、生乳の取扱法、殺菌法等ありましたが、すべて網羅して掲載することは紙面の都合上出来ませんでした。また話題提供の一部を割愛させていただいた部分もありました。パネラーの方に深くお詫び申し上げます。

（日本酪農乳業史編集委員会）

論文

豪商全傳 前田留吉氏傳の公表にあたって

I 前田留吉氏実傳の出版とその史的背景

足立 達¹⁾、矢澤好幸²⁾

1) 〒981-3204 仙台市泉区寺岡1丁目25-1 エバーグリーンシティ寺岡806

2) 〒252-0334 相模原市南区若松6-5-60

**On the Publication of an another new Biography
of Merchant Prince Tomekichi Maeda in the Field of Dairy Farming
in Japan During from the Closing Days (1860-1867)
of the Tokugawa Regime to the Middle Stages (1868-1887)
of Meiji Period.**

**I A Biography of Tomekichi Maeda written already by Kouhei Kaneda
and
Historical Background of the Publication**

Susumu Adachi¹⁾ and Yosiyuki Yazawa²⁾

1) Ever green city Teraoka No806, Teraoka 1-25-1, Izumiku, Sendai, 〒981-3204, JAPAN

2) Wakamatu 6-5-60, Minamiku, Sagamiharasi, Kanagawaken, 〒252-0334, JAPAN

Abstract

A biography had been compiled from the writings under Tomekichi Maeda's dictation and an actual biography of Mr. Tomekichi Maeda had been published as a part in "the series of biographies on stock farmers of pasturing cattle in Japan, volume 1" by Kouhei Kaneda in 1886. Tomekichi Maeda was born in 1840 and was raised in an atmosphere of freedom with an emphasis on agriculture at Kazusa State near Edo (capital of Japan) through to 1858. In 1861, after he had worked for 2 years as an attendant for a senior councillor of the Tokugawa shogunate in Edo, Maeda he moved to Yokohama. He then worked as an artisan making sweet bean paste and as a salesman of drinking water. Westerners in the foreign settlements at Yokohama had brought new experiences into Maeda's concept of life in future. He was surprised their well-constructed physiques. He had given attention to something nourishing about the diet of foreigners living in the settlements of Yokohama, particularly the emphasis on dairy and beef products. He understood that their eating behavior was a desirable way to improve the poor physique of the Japanese people. Maeda had been employed on a dairy farm as a dairyman for 3 years from August 1861 and founded a milk shop with Japanese cattle in September 1863. In 1867 he was appointed officially as a specialist by High Officer Kousei Yuri of the Accountant to the lecturer on dairying at the Stable in Kijibasi, Tokyo and at the Cattle and Horse Company in Tjukiji, Tokyo, from 1868 to October, 1871. Maeda left this position in November 1871 and started to develop a full-scale new business of dairying in Tokyo with high quality foreign dairy cattle. The cattle were selected in situ by Maeda himself and his nephew, and imported directly from the U.S.A in two lots of 159 and 300 head in 1874 and 1879, respectively. In 1873 when an epidemic affecting cattle disease broke out, he sold immediately all his cattles and was subsequently sent to prison for a few days because he had sold infected cattles. Many owners of dairy farms had come from those attending Maeda's lectures on dairying at the Stable and the Cattle and Horse Company, and no small number of others were directly given his specific guidance on dairy farming. It is for the reason that Tomekichi Maeda has been called an originator of the dairy industry in Japan.

I はじめに

2008年の発足以来の日本酪農乳業史研究会事務局長矢澤好幸から、平成25(2013)年7月21日日付の書簡とともに、東京豊島区立郷土資料館から入手した、手書き豪商全傳 前田留吉氏傳のコピー、および日本乳業技術協会代表理事の細野明義による、この文書解読のコピーとが、足立 達のもとに届いた⁽¹⁾。本文書コピーの表紙の文字は豪商全傳 前田留吉氏傳で既述のとおりであるが、本文の一頁の書き出しに表題として書かれた文字は豪商全傳 前田留吉君傳となっており、「氏」が「君」になっているだけで、文字の書きぶりが酷似していて同一人物によって書かれたとしか考えられない。本資料の公表に当たり本論文に頻出する資料名称を、以下「留吉君伝」との略称に統一して使用することにしたい。

この「留吉君伝」のコピーは4000字×25行換算で4880字、縦書き、片仮名、句読点抜き、筆者には判読困難と難解な漢字の少なくない、明治期の知識人を感じさせるに十分な文章であった。何よりも驚いたのは、牛乳の開祖と認められてきた留吉傳の冒頭に、豪商の文字が踊っていたことであった。「豪商」前田留吉では、日本酪農乳業史研究会で取扱う対象として取上げるのは困難かもしれぬ、と一瞬頭をかすめたのは事実であった。とにかく記載内容を先ず読まねばと思った。

前田留吉に関する資料として、すでに多くの著述に引用されてきたのは、明治19年刊行 菊所學士金田耕平纂述の日本牧牛家實傳 第一巻中の巻頭を飾った前田留吉氏實傳（以下「留吉實伝」と略称）⁽²⁾、および昭和9年刊行 十河一三編集の大日本牛乳史中の第六編 乳業者名鑑のトップにおかれた牛乳の開祖 前田留吉氏傳（以下「留吉氏伝」と略称）⁽³⁾であった。これら二種の前田留吉傳それぞれの行数から割り出した全字数は、金田本のが約6300および十河本のが約3500であり、豪商全傳前田留吉君傳が約5600である。

II 印刷公表済両前田留吉傳の概要

II-1 両者の特徴

これら三冊の中で「留吉實伝」⁽²⁾の記述内容は、最も詳しくかつ読みやすい。収録した人物の事歴は、「概ねその人について詳知しており、その聴き得るに随って」記載した、と凡例において纂述者が述べているように、また「日本牧牛家実傳」の表紙およびその最初の前田留吉氏実傳の記載に先立ち、それぞれ纂述者名の肩書きに、「菊所學士」および「菊所逸士」を使用している。人物から「菊所」、つまり「聴くところ」を書いた、それぞれ學士であり隠者であるという。たしかに「日本牧

牛家實傳」に取り上げられた、幕末に藩士として戊辰戦争を戦った数名の牧牛家に、紙幅のかなりを占めているのが武勇伝となっているのも、「聴くところ」を書いたためなのであろうか。しかし、「明治6年春伝染牛病流行の兆あり氏以為らく、今にして之を売らずんば他日臍を嚙むの悔いあらんと、即ち悉く飼う所の牛を売却す。氏の之を売るや其の中に幾許も無くして流行病に感染する者あり、氏は為に病牛を売らるの廉を以て獄に下さる。次いで獄を出るや自ら以為らく、和牛に在って其の種の精良なる者を撰ぶも、終に洋牛の純良なるに及ぶ能わず」と留吉が思い知らされた司法事件は、「聴くところ」として控え目調である。

他方、「留吉氏伝」⁽³⁾は、金田論文を底本としているらしく、その緒言相当部の2頁弱や前田留吉夫人への言及を削除した残部を、コンパクトに纏め上げてあり、新奇事実の記載はほとんどない。それに相当する箇所は、末尾の「晩年斯業を甥前田喜代松に譲り斯業より引退す。我国今日の牛乳業の發達は實に氏の賜もの」くらいだが、晩年の留吉が喜代松に斯業を譲ったという記載には、注釈が必要である。前田喜代松が留吉の下から独立して神田猿樂町に牛乳店舗を開設したのは明治10年で、留吉の活躍初期にあたり、晩年に喜代松に斯業を譲って引退していないことは明らかだからである。

主として「留吉實伝」によるかれの経歴を表記すると表1ようになる。生年の記録は「留吉實伝」に欠けているので、この欄は「留吉君伝」から引用した。明治35(1902)年に62歳を一期に逝去する一生の内で、47歳までの主要な出来事が本書に取り上げられている。48歳以降、亡くなるまでに残された15年間、とくに50歳

表1 前田留吉氏實伝によるかれの主要履歴

年号（西暦）	履 歴
天保11（1840）年	上總国長柄郡関村出生、性不羈
安政 5（1858）年	上京、老中脇坂中務太夫の中原
万延 1（1860）年	横浜堺屋菓子舗雇員・飲水売り
文久 1（1861）年	蘭人牛乳舗に備われ搾乳術習得
文久 3（1863）年	横浜太田町8丁目に牛乳舗開業
慶應 1（1865）年	店類焼し太田町5丁目に店再開
明治 1（1868）年	御厩を政府が接收、搾乳法教授
明治 2（1869）年	政府牛馬会社に移り搾乳法指導
明治 4（1871）年	牛馬会社辞職芝に開店
明治 6（1873）年	病牛販売の疑で下獄
明治 7（1874）年	米国出張洋牛115頭を購入、新銭座に移転
明治 9-10 （1876-1877）年	牛疫にて57頭死
明治12（1879）年	喜代松らを派米洋牛300頭購入
明治19（1886）年	乳牛共進会幹事長

以降の12年間のかれの活動は不明のままである。そのいくつかについては本論文後編において明らかにするが、今後に残された課題は今なお少なくない。

しかしながら、その一方において、幕末から明治中期に人生の主要期間を過ごした本人に、名誉職なら兎も角として、行動面での成果にはあまり期待できないのではないようにも、筆者には思える。これは現代（2010年）の平均寿命が世界一位の82.9歳に達した日本人には考えにくいことであるかもしれない⁽⁴⁾。日本人の平均寿命の歴史的推移から見ると、平成元（1999）年のそれが81歳であるのに対して、明治33（1900）年は44歳、少し遡った文政3（1820）年は34歳、太平洋戦争後しばらくした昭和25（1950）年は65歳であった。比較の為、英国のそれぞれの数値は51、40、77、69歳である⁽⁵⁾。人生僅か五十年と詠った戦国時代の武将の句は、留吉の時代まできて、なお真実味を失っていなかったであろう。

「留吉實伝」の文章が読みやすいと述べたけれども、全体として乱雑な^{そし}誹りを受けるのは避けられない。五頁に四か所だけにあるルビ振りが、いまでは全く見られないスタイルで該当文字の左側にあり、粗忽人がソ、ツカシイヒト、瓶周がカメノフチ、掃清がヨクファイテイキナ、肥大漢其智不満體がオホオトコソオミニチエガマワリカ子とある。その一方で、同様以上に難解な、十二頁四行のルビのない「盤錯」、十四頁十行の「簀を易ゆ」があるのは、いかにも片手落ちである。おそらく多くの現代人には、それぞれ「複雑な物事で容易に処理できぬ」、「賢人の死」とでも注釈がほしいところであろう。

矢澤によれば、当時の高田村雑司ヶ谷の前田牧場の二代目経営者は留吉の5男前田甲次郎であり^(1b)、昭和20年に廃業した。「留吉實伝」に信女が九男三女を生むとあるのは誤りで、延女六男一女、蓮沼手津が七男と八男つまり二男を産む、あわせて留吉には八男一女があったとするのが正しい。菩提寺住職によると、信女の「のぶ」は信ではなく延であるという。ここではこの住職の説にしたがった。延女に先立たれた晩年の留吉と同居したのは八男前田勇吉（明治27年2月26日生まれ）であると推察される^(1e)。

II-2 浮かび上がる前田留吉像

表1に見られるように、上總の国、現千葉県のご郷を、留吉は安政5（1858）年に18歳で飛び出して上京。老中宅の中元として働き、二年後に横浜に移り、^{あんこ}餡捏ね、飲料水売り、外国人居留地において居留外国人向けの乳業を営んでいたオランダ人ペローの傭夫となり、イギリス人ボーロの下で3年間働くなど、肉体労働で生活費を稼ぎながら、乳汁搾取及び牧畜の法を身に付けた。文久3（1863）年9月にいたり、貯金を元手にして若干頭の和

牛を求め、横浜太田町八丁目に牛乳搾取所を開設した。しかし、慶応元年、横浜港内での火事により類焼する被害を蒙ったため、焼け残った自身の体と数頭の牛で太田町五丁目に搾取所を再建した。

「留吉實伝」には「幼にして奇矯衆兒の中に在りて巍然頭角を見る……長ずるに及んで益々不羈」とあるように、留吉は時勢の変化に鋭く反応した。とくに横浜居留地における外国人との日常的な接触が、由利公正との接触によって増強され、肉体的に貧相な日本人の牛乳による改善に、留吉を駆り立てた。しかし、かれが開設した日本人最初の牛乳搾取所には、日本人の需要はほとんどなく、居留外国人の需要ばかりだった。かれの胸中に鬱屈したものが、溜まるばかりであつたに違いない。

この短かからざる^{しの}ほぼ5年間を耐え凌いでいた頃、東京で活躍していた一人の財政家から、牛乳搾取所業を専門とする技術者求人話が、かれのもとに持ち込まれた。

その財政家の名は三岡八郎（文久2年11月石五郎から八郎、慶應4年秋頃公正と改名、明治3年8月由利と改姓）。明治元年頃、留吉はかれの求めに応じ、幕府から受け継いで竹橋際にあった御厩^{おんまや}に移り、牛乳搾取法を教えることになる。日本牧牛家實傳 第一巻中の「留吉實伝」や「留吉君伝」にも、民部卿由利公正として登場し、以来乳業畑の著書、論文には由利公正の肩書に民部卿がついて回ることになった。由利公正の資料は少なくないが、民部卿由利公正の表現は乳業畑の著書、論文以外に筆者は出くわしたことがない。留吉の人生展開の節目節目に、最も重要な役割を演じた人物の一人として、等閑にしたま^なまにしておけない問題なので、次記の本論文第二報において詳しく論議する。

後に触れるが、日本牧牛家實傳 第一巻に採録された13名の牧牛家たちの中には、幕臣や藩士などが8名、農民出身は5名である。とくに農民中3名には、留吉とかれの2名の甥が含まれる外、後述第二報中の図1に示されるように、留吉から教示を受けた者が少なくないのが注目される。留吉ほど自己の職業に明確な日本への意識



前田留吉 30歳頃(推定) (前田家保存)

をもって臨んだ人物は、他に見出せないようである。崩壊の危機に瀕した幕藩体制下の、大部分の武士の頭脳には、幕府や藩はあっても日本はなかったらしい。かれらにとって、無縁となった後の生活費の確保が当面の最大の目的であり、利潤の高い牛乳搾取業は儲け口の一つと見做されたに違いない。

それにしても、使い捨ての可能性の極めて高かった、横浜外国人居留地における雇用関係に耐えて、外国人居留地内のオランダ人ベロー牧場の牧夫・イギリス人ボーロのもとで、三ヶ年間にわたって牛乳搾取業の傭夫として働いた、留吉の肉体的・精神的ストレスは、並大抵ではなかったであろう。かれに際だった持ち前の体力と気力、それに加えて他人を容れる雅量等とが備わっていたが故に、初めてこのような苦境を乗り切れたに違いない。第二次世界大戦後のしばらくの間、外国へ赴いた日本からの留学生の少なからずが、日本を、そして日本における自己の存在意義を強く感じて、帰国した状況に通底するものを、筆者は留吉に感じる。

日本の国際的認識度を現代と比較したとき、それは比較にならぬほど低かった。当時のオランダ人やイギリス人と日本人傭人との相互認識のギャップは大きく、交流上の壁でもあったろう。しかし、このような壁があったにせよ、金儲けに一山当てるべく外国の山師たちが乗り込んでいた横浜は活気にあふれ、留吉は外国貿易の実態を肌で感じ、また目の当たりにできた。この経験がかれの後半生の事業に生かされることになる。

Ⅲ 近代日本への牛乳飲用文化流入史

Ⅲ-1 牛乳屋頻出の遠因 ―幕末王政復古の一大号令―

前田留吉が故郷上總の国から江戸にでた安政5(1858)年は、慶長8(1603)年2月、天皇による將軍宣下に基づく徳川家康の征夷大將軍就任以来、約260余年間にわたって政権を担ってきた徳川幕府の末期、つまり幕末にあたる。しかし、その終期を何時とするかについては異論がある。年代の古い順から並べると、慶応3年10月14日の大政奉還⁽⁶⁾、同年12月9日の王政復古の一大号令⁽⁷⁾、そして慶応4年2月12日の江戸城の無血接収⁽⁸⁾となる。これらのうち、15代將軍徳川慶喜が武家のトップであるばかりでなく、日本の最高権力者としての征夷大將軍職辞任が勅許され、幕府廃止が宣言されて、大量の無禄武士発生の誘因となったことで、⁽⁹⁾ 王政復古の一大号令は特記される。摂政、関白、征夷大將軍などの従来の職制は廃止、総裁、義定、参与の三職新設のほかに、慶応4年1月には下職として神祇・内国・外国・海陸軍・会計・刑法・制度の7科、2月に科を局とし、総裁局を新設。政治権力組織としての慶喜に依る大政奉還体制が一新さ

れた。新政府の最高職の総裁には有栖川宮熾仁親王^{ありすがわのみやたるひと}が就任した⁽⁷⁾。

なお、大政奉還の14日より1日早い13日付けで討幕の密勅が薩摩藩と14日付けで長州藩にだされた。本文は漢文であるが、その訓読文を下記する。

「詔す。源慶喜、累世の威を籍り、閩族の強を恃み、妄に忠良を賊害し、数王命を棄絶し、遂には先帝の詔を矯めて懼れず、万民を溝壑に擠し顧みず、罪惡の至る所、神州將に傾覆せんとす。朕、今、民の父母たり、この賊にして討たずむば、何を以て、上は先帝の靈に謝し、下は万民の深讐に報いむや。これ、朕の憂憤の在る所、諒闇を顧みざるは、萬已むべからざれば也。汝、宜しく朕の心を体して、賊臣慶喜を殄戮し、以て速やかに回天の偉勲を奏し、而して、生靈を山嶽の安きに措くべし。此れ朕の願なれば、敢へて惑ひ懈ること無かれ」⁽¹⁰⁾。

なお、こ実行密勅には、明治天皇の名前はない。また、現在まず使用されない、上文中の閩族は全族、溝壑は水と谷間、深讐は深い恨み、諒闇は天皇が父母などの喪に服す期間、殄戮は滅ぼすを意味する。いずれも、広辞苑による。念のため。

この密勅の翌日には徳川慶喜の大政奉還が表明されたため、慶喜討伐実行は肩すかしを食った形となり、実行が延期された。長年の政権担当経験不在から、朝廷側には政治実行の体制や能力が欠けており、とくに外交面では無力であった。大政を奉還しても、慶喜には藩に対する軍事指揮権をもつ征夷大將軍の強大な軍勢力と、膨大な天領が残されており、その権力はなお大きかった。

しかし、朝廷側に立つ薩摩・長州藩の軍勢力を前にした征夷大將軍職の返上(辞官)天領削減(納地)を初めとする、既述したような革命的内容の王政復古の一大号令は、慶喜の権力への執心に対する痛烈な一打となった。

Ⅲ-2 辞官・納地による無禄武士と江戸・東京における空地の出現

勝海舟編吹塵録所収天保十三年全国石高内訳によると、天保13(1842)年の徳川幕府の直轄地は420万石に達した⁽¹¹⁾。さらに、山本兼一によれば、徳川宗家から禄を直接えていた、約3万家の旗本の知行地、約300万石と合わせると、ざっと700万石、それに一家に含まれるその家族や家来を加えると、全体で十万人を越えるのは確実とされる⁽¹²⁾。慶応4年(1868年)4月29日、新政府から慶喜に代わって家達が第16代の徳川宗家相続を許可され、その24日後の慶応4年5月24日に家達は、徳川宗家の駿河、三河、遠江の計70万石に新設された静岡藩への移封、静岡県知事就任と駿河府中(現、静岡市)城主となることが命じられた⁽¹³⁾。王政復古の一大号令に続いて、700万石から70万石への知行地の削減は、多数の無禄者をださざるをえない深刻な課題を惹起した⁽¹²⁾。

勝海舟の7月の無祿者数調査では、「徳川旧幕臣 凡そ三万三千人、静岡行 一万五千人、朝臣 五千人、帰農 六百人、大蔵・外務 二百四十人、田安・一橋家従属 五千四百人」とあった。「徳川幕府の軍役規定では、一万石あたり二百人余りだから、およそ70万石の静岡藩では、一万四千人以上の家臣をやしなえる計算となる。従属としてある新しい藩に抱えられる五千四百人より、まだ一万八千分の禄の余裕があるはずだ。」「身の振り方の希望が定まっている上記の人数は、合計ざっと二万六千人。旧幕臣三万三千人からこの人数を差し引いた七千人が、どうするつもりかは定かではない。わかっているのは、徳川家を頼らずに生きていく意思を表明したということだ。」「いちばんの問題は、……静岡行きをのぞむ一万五千人である。彼らに仕事があるわけではない。彼らとその家族の食い扶持を算段しなければならない。」「大挙して移住してきた……無祿移住者」に対し、「……藩庁では家族の人数によって荷物の数を決め、禄高百俵未満だった者には、藩の負担で船賃と食費、……^{はしけ}鯨賃、清水での荷物の陸送費を出し」、無祿者の収入源として牧之原台地などの開墾用地を提供、入植させて、茶などの産地に育て上げていると、山本兼一は記述している⁽¹²⁾。

ともかく、王政復古の号令による旧幕臣の大量失職と大移動によって、「幕府の大名や旗本等の江戸屋敷が殆ど空屋敷となり、これが無条件で明治政府の大官等により没収同様にして使用されたが、一時東京は一種の草原と化した。ここに当時の政府の大官や財界の名士、旧藩主、旗本など、例へば山縣有朋、松方正義、由利公正、渋澤栄一、榎本武揚、細川潤次郎、松尾親善、松平太郎等々の人々が自ら牧場を開き家来や番頭をして乳牛を飼い搾乳をし、この牛乳の販売までやらかしたものである。又當時旗本始め各藩の藩士は家禄をはなれて、……失業者になった。……士族授産という問題が大きな政治問題となったので、……乳牛を飼う牧畜事業もここに大きくクローズアップされた。青森県下では会津藩士広澤安任、千葉県下では和歌山藩士の津田出等が、この時流にそうして牧場を始めたのであった。これは明治四年、五年頃のことである」、とされる⁽¹⁴⁾。そして、この動きは旧御家人の主体を占めた、徒士（かち）、与力、同心などの中・下級武士のみならず、農家や商家出身者におよんだ。

その一方において、既述した朝廷から倒幕の勅命により、慶応4年1月3日から6京都南部の鳥羽・伏見において、御所を守護すべく展開した官軍の薩摩・長州藩連合軍5000名と、^{よしのぶ}慶喜を擁して御所に参内を強行しようとした、会津・桑名藩連合の旧幕軍つまり賊軍15000名との間で、後に戊辰の役と呼ばれる戦闘が開始された。数の上ではるかに勝った賊軍は精強な官軍に敗れた。入京不能となった慶喜は、大阪城に退却する。

慶応4年1月7日には、政府から^{よしのぶ}慶喜追討令が発布されて、同月8日、軍艦開陽丸に乗艦して大阪から脱出、品川沖から12日未明に浜御殿に旧幕僚らとともに上陸、かれは漸く江戸城に戻った。王政復古の号令により征夷大將軍の職を失ったが、なお家臣の武士団のトップであり続けた慶喜は、江戸に戦火のおよぶのを避けるため、慶応4年2月12日、江戸城をでて上野は東叡山寛永寺大慈院に移った。

それでもなお、^{ありすがわのみやたるひと}有栖川宮熾仁親王を大総督とする^{よしのぶ}慶喜追討の東征軍は東海道を進軍中であり、慶応4年3月5日には川崎に達し、江戸が戦火に見舞われる危機が刻々と迫っていた。慶喜の責任を問う官軍の強硬な意見を前にして、ひたすら謹慎の意を表するため、かれは同年4月11日には江戸を離れ、水戸の藩校弘道館に移った。その当日、開城された江戸城西の丸に官軍は入城し、大総督府が江戸城を接収した⁽⁹⁾。

しかし、慶応4年5月15日午前7時頃、江戸上野に集結した賊軍 彰義隊に対する戦闘の火蓋が切られた。高台となった本郷から大砲が打ち込まれ、湯島や寛永寺に火の手が上がったが、前日まで続行された大総督府参謀西郷吉之助と軍事取扱勝海舟の間の和議工作により、江戸全体に戦火はおよぶことなく、夕方には収束した。彰義隊の戦死者数は200ないし400に達した。

慶応4年7月17日、江戸は^{とうけい}東京と改称され、^{よしのぶ}慶喜も水戸から7月23日に駿河に移った。明治2年9月28日、駿河から改称された静岡を離れ東京巣鴨に転居、明治35～43年間貴族院議員として在任した後、隠居し写真、狩猟、謡曲など多趣味な生活を送った。大正2年11月22日に感冒のため逝去。享年77。將軍在位期間はきわめて短かったが、歴代中で最長命であった⁽¹⁵⁾。

以上のようにして進行した辞官納地は、結果的に江戸・東京に多数の用地と無祿武士とを生みだした。政府主導による明治前期の殖産興業政策によって、全国各地、とくに戦火によって焼け野原となるような被害から免れた江戸・東京では、新事業が発展し、用地・人材の需要に応えることになった。

たとえば、明治初年に福井佐佳枝上町に開業した団野確爾の牛乳搾取所⁽¹⁶⁾、明治2年に大蔵省通商司による東京築地（陸奥棚倉藩松平周防守邸跡、現新橋演舞場付近）における搾乳屠牛を目的とした牛馬商社（後に商社は会社と変更）の設立が挙げられ^(17a)、牛乳や牛肉の商いに未来を掛けようとする、野心に溢れた若者が^{いしろう}蟄集することに⁽¹⁷⁾なる。ここで牛乳搾取法を講じたのが前田留吉であった。受講生の中には、留吉を生涯の師として敬仰する者も少なくなかったのではあるまいか？

また牛馬商社とは別に、牧牛馬掛に洋種牛馬および製乳器を購入させている。洋牛は15頭、横浜在住の英国人から購入した^(17a)。当時、すでに洋牛輸入のおこなわ

れていたことは明らかである。

ちなみに、慶応年号は慶応4年9月8日、西暦1868年10月23日の明治天皇即位まで続き、同日にだされた改元の詔書により、同日で慶応4年1月1日に遡り明治元年と定められた。さらに、明治6(1873)年には、この太陰太陽暦に依る日本暦(旧暦と呼ばれる天保暦)はグレゴリオ暦に依る新暦に改暦されて、旧暦の明治5年12月2日の翌日を、新暦の明治6年1月1日と定めて、和暦と西暦の日付が同一となり、今日に至っている⁽¹⁸⁾。本論文においても、明治5年以前の和暦の記載は引用文献にしたがっており、ご留意頂きたい。

Ⅲ-3 近代日本の牛乳屋の基となった外国人居留地の牛乳搾取業者たち

Ⅲ-3-1 下田における駐日アメリカ領事タウンゼンド・ハリス

近代日本における牛乳飲用史は幕末は安政5(1857)年2月3日から始まる。

この牛乳飲用文化が最初に持ち込まれたのは、安政3(1856)年7月21日、伊豆半島の南端にある下田湾に投錨した、アメリカの蒸気船サン・ジャシント号に搭乗の、初代駐日アメリカ総領事、タウンゼンド・ハリス(Townsend Harris 1804-1878)によってである。同日午後1時頃下田奉行所の調役下役齋藤源之丞ほか5名が同号に乗船して来意をハリスに尋問して下船、午後3時頃に再び上級の調役並役合原猪三郎ほか6名が、応接のために船上でハリスと会談し、かれらの翌日からの上陸を認めた。

7月22日、奉行と同号に搭乗のアームストロング提督との面会は同提督病氣により実現しなかったが、提督随員の一人としてのハリスと合原らの会談は継続された。同日午後、ハリスらは許されてアメリカ人四人の眠る玉扇寺傍にある埋葬所を訪問し、玉泉寺を休息所として提供された。

玉泉寺は下田に近接した寒村であるが、「住民の身なりはさっぱりとしていて、態度も丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏に何時も付き物になっている不潔さというものが、少しも見られない。……これらの高地は、山羊のための立派な放牧地となるし、山羊の登攀性から見て、彼らのための居心地のよい場所となるであろう。山羊の乳は栄養に富む食料となるし、チーズもそれからつくられる」、とハリスは日本滞在記に述べている^(19a)。

8月7日玉泉寺のアメリカ領事館に最初の領事旗が翻った。翌8日には江戸から遣わされた役人の森山多吉郎の訪問を受け、飲用乳を希望したハリスと幕府側との遣り取りが行われた。「此方このほど當所勤番の者へ、牛乳の儀申立てられ候趣をもって、奉行へ申聞け候ところ、右牛乳は国民一切食用致さず、殊に牛は土民ども耕耘、

そのほか山野多き土地柄故、運送のため飼ひおき候のみにて、別段蕃殖いたし候儀更にこれなく、稀には児牛生れ候儀これあり候ても、乳汁は全く児牛に与え、児牛をおもに生育いたし候こと故、牛乳を給し候儀一切相成りがたく候間、断りにおよび候」、と森山は応え、さらに山羊の放し飼いについて「山野へ放飼の儀は相成りがたく」、「構内へ差置き候儀位の儀は苦しからまじく、放し飼ひは相成りがたく候」と放し飼いには否定的な見解を示した^(19b)。

渡辺京二によれば、「当時の日本人の感覚からすれば、農耕にせよ運搬にせよ、牛は十分に働いていた。家族全員がそうするように、牛もその一員として労働せねばならぬのに、その上、本来は子牛のものたるべき乳まで収奪しようというのは、いささか没義道にすぎるといふものだった。乳牛という観念は、この国ではまだ成立していなかった」という⁽²⁰⁾。

下田に領事館を構えたハリスは、下田奉行井上信濃守清直および中村出羽守時万との間で、下田と函館港の開港、犯罪者に対する司法権などを定めた下田協約を結ぶ。しかし、アメリカ大統領から託された親書の將軍への手交を果たす江戸行きは、日本側の引き延ばし策のため、なかなか果たせなかった。

漸く翌安政4年10月7日に下田を出発、同14日に江戸到着、大君に大統領の信任状奉呈を果たし、幕府との日米修好通商条約締結に向けて老中堀田備中守正睦、井上信濃守清直、岩瀬肥後守忠震らと交渉を重ねていた^(14c, 16a)。ハリスは日本滞任記中の随所で陛下、エンペラー(將軍)、大日本の尊大な独裁者、日本の国王陛下とかかれた人物とのべ、將軍徳川家定を指すのに使用した。天皇を皇帝と記し、その使用は日米修好通商条約草案の交換に際し、皇帝印と署名天皇入りの日本委員全権委任状がハリスに提示されたに留まる。ところが、安政5年1月14日、嘔吐、全身の痛みを訴えたハリスが瀕死の重態に陥り、同21日には蒸気船に乗せられて、翌朝、下田に帰り回復を図ったが、「めっきり恢復」し「スープをいくらか飲む」までに同月29日までかかっている。下田から江戸へ向けて出港したのは同年3月3日であった^(16b)。

下田においてハリスが、スープを飲める程度まで回復しつつあった安政5年2月3日、玉泉寺住職村上文機著の玉泉寺今昔物語に引用された名主与平治の日記の抜粋に、下記の文言が見られる⁽²²⁾。

「安政五年二月三日 (前略) 今夕方異人御掛り様より被仰候は、牛の乳少々異人所望に付近村へも尋ね度様御申付被成候に付下役人二人白浜へ遣し候。同月四日次に昨晚白浜村へ注文致し置候牛の乳、五六勺程白浜村より送り来り候に付玉泉寺へ差上候。同月五日 (前略) 尚又玉泉寺異人掛り様より牛の乳是より日々二合斗りづ、も調度由被仰候似付白浜村へ願に遣し候、但し庄八

出役。 同月六日北風晴天夕方 今朝白浜村へ忠右衛門出役、牛の乳少々持参玉泉寺へ差上候、猶又次々も注文可致候様被仰候に付、久四郎中村より蓮台寺へ行申候。」

搾乳牛はもちろん和牛であり、飲用乳は当時の西欧人の通常の飲乳状態として、生乳だった可能性がきわめて高い。日本における最初の生乳流通が行われた事例と認められよう。牛乳搾取・飲用を禁じた安政三年の下田奉行の見解は、日米修好通商条約締結の重要用務を帯びたハリスの病状を前にして、無力化したのが窺える。すでにインドの叛乱を制圧したイギリスや、中国を降伏させたフランス・イギリス連合軍、つづいてロシアの艦隊が日本への来襲情報に、危機を覚えた時の大老井伊直弼は、開国やむなしとして勅許を待つことなく、安政5年6月19日に江戸湾に浮かぶアメリカ軍艦上で、ハリスの奔走した日米修好通商条約調印の運びとなった^(19c)。

日米修好通商条約第三條には「下田箱館港の外、次にいふ所の場所を、左の期限より開くべし。神奈川 午三月より凡そ十五ヶ月の後より 西洋紀元千八百五十九年七月四日。

長崎 同断 同断。

新潟 同断、凡二十ヶ月の後より 千八百六十年一月一日。

兵庫 同断、凡五十六ヶ月の後より 千八百六十三年一月一日。

神奈川港を開く後六ヶ月にして、下田港は鎖すべし」となっている^(19d)

また、前記の村上著書に引用された「お吉」に関する覚え書きには、「一金七兩也 右は玉泉寺滞在之官吏方へ部屋召使さち給与之内書面通り御下金被下置候旨私共へ御渡被下慥に受取申候以上 巳六月六日 下田町市兵衛後家さわ 町方御会所様」「老母きわ並さちは差向渡世も無御座上方筋廻船上下当港滞船之船頭共衣類其他洗濯等いたし今日営み居り候折柄に付相当の給金手当にも相成候はゞ老母並にさち往々身分取繕方にも可相成心宛にて身寄親類の者共不承知をも不顧^{わづ}御受奉申上官吏方へ罷出候処さち儀はその頃腫物出来居譏かに三夜にて宅養生申付其後腫物全快にも相成候に其段御届奉申上候処其節官吏病氣之趣を以て暫らく差控え申旨被仰渡候……安政四年七月十日 右 市兵衛後家さわ、宗五郎 御用所御係り 御役人中様 前書の通り御願申上度此段申出候に付奥印仕差上候 以上 名主 半兵衛」とある⁽²²⁾。

大日本牛乳史の中で白井紅白が、山本有三著女人哀詞（著者注：ハリスはハルリスとして登場）と十一谷義三郎著唐人お吉（著者注：ハリスはコン四郎として登場）の中でハリスはお吉から牛乳を飲ませられたと述べ、この説は現在までも影響を与えてきた^(17b)。お吉が下田坂下町斎藤市兵衛の二女で芸妓だった実在の人物であり、ハリスに溺愛されたらしい。かれの帰国後、世間から白

眼視され、酔狂となり、物乞いに落魄。明治23年に稲生沢川で入水自殺を遂げている⁽²³⁾。しかし、お吉の玉泉寺への奉公時期とハリスの重病罹患後のスープ飲用可能時期とのあいだには約八か月の時間のずれがあり、本説構成の基礎は否定できる。

日米修好通商条約締結後、ハリスは初代駐日公使に就任。安政6年6月8日、下田総領事館を閉鎖し、江戸元麻布善福寺内の公使館に移った。移転以降もハリスの体調は優れず、文久2年に帰国する。滞日期間は約6年近くにおよんだ。南北戦争初期のアメリカに帰国後は公職に付くことはなく、約2年間フロリダで保養したりした期間はあるが、主としてニューヨーク市四番街263の質素な下宿屋で謙虚な晩年を過ごし^(19e)、16年後に肺充血のため逝去、生涯独身であった⁽²³⁾。享年74。ニューヨークのグリーンウッド墓地に葬られた。一方、1878(明治11)年 下田上陸以来、ほぼその全期間を通じて、ハリスの通訳を勤め上げたヘンリー・ヒュースケンは、万延元年12月5日午後8時頃、芝、赤羽のプロシャの接遇所からの帰途、有馬邸の向かい川岸、古川端付近の路上で暗殺された。享年28、麻布光林寺に葬られた⁽¹⁹⁾。襲撃者は過激な攘夷論者薩摩藩士、伊牟田尚平・樋渡八兵衛らともいわれる⁽²⁴⁾。

Ⅲ-3-2 突出した横浜開港と外国人居留地における牛乳搾取業者の展開

日米修好通商条約締結によって開港された、箱館、新潟、神奈川、兵庫、長崎のうち、新潟、長崎、箱館の諸港は世界貿易上、すでに意義をもたなくなっていた。京都、大阪、神戸を控えた兵庫港を抑えて、江戸をバックに控えた神奈川港は突出していた^{もっと}。尤も、従来からの神奈川港は遠浅であり、大型船の寄港に不向きなため、その横にある深い海を擁した浜、文字通りの横浜港を神奈川の一部と、幕府は指していた。神奈川港は「人口密度の高い西部の産業地帯から輸送されてくるすべての産物が、この金河^{かながわ}には集まってきていたのである。こうした物品は、常在五万人に満たぬこの地で陸揚げされ、牛馬やいたって原始的な二輪荷車（大八車か？）で、」江戸へ運ばれた。さらに西部、西南部諸藩大名の参勤交代制によって大人数の一行が宿泊、通過するため、十六世紀末までは人の住まなかった荒涼とした沿岸のこの地は、大発展を遂げていた。そこへ渡来中国人・西欧人の増加が加わって、現地住民との間に血の制裁を見る摩擦が絶えなくなってきた⁽²⁵⁾。

安政6（1858）年6月2日の横浜開港時には、幕府によって、岸辺に近接した運上役所（税関）と作事場を堺にして、現在の山下町と山元町に当たる外国人居留地と日本人居留地が指定され、約40年間存続した⁽²⁶⁾。開港以前の横浜は、暗い杉木立に囲まれた弁天神社を中心^{へきそん}にちっぽけな漁村のある、いわば僻村にすぎなかった。し

かし、開港後の発展は凄まじかった。両居留地で経済的主役を演じたとされる中国人は、体質的に乳糖不耐のため、牛乳飲用の主役でありえなかった。数の上では劣勢ながら、本誌でも斎藤多喜夫⁽²⁷⁾や筆者の一人⁽²⁸⁾がすでに述べたように、急速に増加した欧米人を相手にした欧米人による牛乳搾取業者の出現に、時間はかからなかった。和仁皓明によって紹介された⁽²⁹⁾、横浜で流通していた1866(慶応2)年4月6日刊の、Japan Times Daily Advertiserの紙面を飾った、一瓶25セントの最高品質純粋牛乳の広告は象徴的である。

Ⅳ 明治初期の酪農史

Ⅳ-1 概要

「留吉實伝」に記述された新政府の牧への対応を、農

務局が明治元年から16年までの主要農事を纂訂した大日本農史下巻⁽³⁰⁾から拾い上げると、明治における牛との関連の予想される牧への関連資料は、表2のようになる。

明治8年に岩手県の牧場の牛へのオオカミの被害対策に、オオカミ殺害への報奨金がだされた。しかし、その殺害方法への具体的方法まで言及されていない。

Ⅳ-2 開拓期における牧場牛へのオオカミの被害と「おいぬ様の碑」

オオカミの牧における牛馬への被害は享保11(1726)年以来文久2(1862)年頃までの房州嶺岡牧においても記録されている^(31a)。春に生まれた仔馬や犢^{こうし}が狙われた。明治10(1877)年以降、ニホンオオカミより肩高70～80cmと、ニホンオオカミの55cmよりはるかに高い大型のエゾオオカミによる、牧場でのウマへの被害に悩ま

表2 明治初期における牧に対する政府の対応経過

年 月 日	対 応 内 容
1年 1月14日	安房国嶺岡ノ牧士等稟請セル牛酪製造最高ヲ聽ス（会計官牧場掛用留）
2年 1月14日	是ヨリ先キ会計官ノ管スル諸牧ノ存廃ヲ租税司附属員大武藤助ニ諮問ス 藤助開墾ト牧畜トラ比較シ牧畜ノ利ナルヲ答フ是ニ至テ牧牛ノ業ヲ安育及ヒ其売買取締ヲ掌トリシ人ナリ
2年11月20日	是ヨリ先キ通商司ハ屠牛所ヲ築地牛馬商社内ニ建設シ屠肉売肉ノ実況ヲ試ム既ニシテ需用多キヲ加ヘ極メテ官私ノ便益トナルヲ知ル是ニ至テ更ニ屠牛ノ數ヲ増シ大ニ衆庶ノ食用ヲ給足センコトヲ企図ス（築地商社建白留）
2年12月27日	通商司ノ管スル牧牛掛ニ於テ洋種ノ牛豚及ヒ製乳器械等ヲ横浜在留英国人ヨリ購買ス（築地商社建白留） 本文買収スル所ハ牛15頭豚24頭其ノ他器械牛舎ナリ
3年 2月 3日	安房国嶺岡ノ牧士等製酪事業ノ損益ヲ計査シ民部省ニ開申ス（建白御覽済留）
3年12月	是月大蔵省ニ於テ通商司ノ所轄スル築地牛馬会社ノ事業ヲ旧嶺岡牧士吉野郡造ニ委託スルヲ以テ保証金冥加金等の徴収方ヲ定ム（建白御覽済留）
4年 8月 9日	通商司ノ管スル築地牛馬会社ノ乳牛ヲ民部省ニ属ス（太政類典）
4年11月29日	青森縣ヨリ旧斗南縣廣澤安任等ノ開牧規則ヲ勸農寮ニ進達ス
4年12月 9日	勸農寮ヨリ安房国嶺岡牧士ヲ廃シ更ニ総括2員牧守5員補馬役等19員ヲ置ク（大蔵省沿革史）
5年 4月24日	是月築地牛馬会社ノ乳牛及ヒ其ノ家屋等ヲ併セテ之ヲ水町久兵衛ニ売与スルヲ以テ吉野郡造ノ管理ヲ解ク（勸農寮牧畜課廻議御入用筋回議綴込第25号）」
5年 5月29日	嶺岡牧ノ内東上牧東下牧ヲ水町久兵衛ニ貸与ス（勸農寮牧畜課廻議簿）
5年10月	是月大蔵省ニ於テ試験場ヲ内藤新宿ニ設ク（明治職官沿革表勸農局沿革録）是ヨリ先キ勸農寮ニ於テ東京近傍雉子橋外幸橋本所等十餘所ノ試験地アリテ洋種動植物ノ適否ヲ驗ム然ルニ試験地ノ四方ニ散在スルハ不便ナルヲ以テ之ヲ一處ニ収集センカ為メ内藤頼直ノ邸ヲ購収シテ此ノ場ヲ設ク其ノ坪数凡ソ九萬五千六百坪餘ナリト云フ
5年	近藤芳樹著ス所ノ牛乳考、屠畜考合本を印行ス牛乳考ハ本邦ニ於テ牛乳ヲ飲用ニ供セシ起源典例を明カニシ兼テ滋養ノ効ヲ示ス、屠畜考ハ古ヘ
8年12月20日	開拓使ニ於テ狼、熊ガ耕地ヲ暴ラシ神馬ヲ害スルヲ以テ鳥獸獵規則第二条ニ拠リ防禦ノ方法をヲ設ケ之ヲ函館支庁管下ニ令ス
8年	岩手県ニ狼多ク牧畜ヲ害スルヲ憂ヒ牝狼捕殺一頭ニ八圓、牡狼ニ七圓、兎狼ニ二圓ヲ下与シ之ヲ本縣ニ運搬スルニ一頭ニ付人夫二人ト定メ之ガ賃金ヲ給ス
9年 1月29日	近年牛疫大ニ行ハレ農業ヲ妨ケ牧畜ノ開進を害スル等其ノ惨毒甚シキヲ以テ内務省ニ於テ官償撲殺法ヲ設ケ其ノ伝染ヲ防ク因テ疫牛処分条例ヲ仮定シ且ツ牛病新書及ヒ牛疫容体書ヲ頒布ス
10年12月8日	嶺岡種畜場ノ事業ヲ民業ニ移ス是ヨリ先該場接統ノ村民協同シテ一社ヲ結ビ該場ノ牛馬ヲ基本トナシ更ニ資金ヲ募集シテ其ノ良種蕃殖ヲ謀ラント請フ是ニ至テ該場ヲ貸与シ野馬三百五十七頭牛八十六頭ヲ売与

されていた北海道では、米国人の開拓使教師エドウィン・ダンの献策を容れて、硝酸ストリキニーネを馬肉などに混和して駆除に乗りだし、明治22(1889)年に絶滅したとされる。その剥製2体は北海道大学付属博物館にある^(32a)。

毒物の外に落とし穴も利用されたが、オオカミ駆除に決定的な力を発揮したのは鉄砲であった。対人武器として厳重に登録・管理が行われたが、猟師の鉄砲と、家犬からの疫病ジステンバー感染とによって日本のオオカミは急速に絶滅に向かった。安永6(1777)年西牧において、年間オオカミ29頭、イノシシ18頭、シカ24頭を鉄砲で倒している^(31b)。安房酪農百年史⁽³³⁾に、安房地方におけるオオカミによる牛馬の被害の記載が見当たらないのも、被害がほとんど成畜にはおよばず、家畜としての本来の用途に載らない前の、幼畜に限られていたためであろうと理解できる。

明治38(1905)年1月23日に奈良県^{わしかくち}驚家口で、3人の猟師から購入した若い牡の一死体をえたのが、最後のニホンオオカミの生息情報とされてきた。地元の二人の猟師から動物採集家のマルコム・プレイフェア・アンダーソン(スタンオード大卒、動物学専攻、1904～1907年の2年8ヶ月間日本に在留、1919年オークランドの造船所で事故死、39歳、米国人)と同行の通訳金井清(当時第一高等学校3年生、後に長野県諏訪市長)、猟師の石黒平次郎一行が、上記の年月日は正確に言えばこの死体を8円50銭で購入した日と訂正される。宿泊先の芳月楼(今は衣料店になっている)の近くで実施した標本作成時の死体の腐敗状況から、金井は23日より数日以前の捕獲と推定していた。この個体の頭骨と毛皮は英国ロンドン自然史博物館に現存する^(32b)。

日本国内ではその剥製が全世界で4体のうち3体が国立科学博物館(1870年頃福島産牡)、東京大学農学部(1881年岩手県産牝)、和歌山県立自然博物館(1904年近畿大台山系産牝?)に、全身骨格標本は国立科学博物館、熊本市立熊本博物館(1976～1977年八代郡京丈山洞穴産、推定生存期14世紀中葉～17世紀初期)に、2例の毛皮が埼玉県秩父宮三峯山博物館に収蔵されているにすぎない⁽³⁴⁾。

宮城県下にはかつての軍馬育成地として知られた地域が少なくないが、その一つに挙げられる鬼首地区にオイヌ様の碑が残されているという^{かみはら}。上原字中川原、寒湯、原、川東(吹上高原)、田野一本松、田野中野、久瀬の八ヶ所にあり、さがせば他にもあるかもしれず、おいの様という所もある、上原の碑は林道のわきの2～3人でかかえるほどの太い松の木の根元に高さ6.70cmの平石で立ち、紀年銘は摩耗して読みとれないが、三峯山と刻まれている。オイヌ様がオオカミと即断はできないが、オオカミのようなイヌ科の獣による子馬の被害を少なくするように祈った当時の牧民の気持ちの表徴であったのであ

ろう⁽³⁵⁾。

県北加美町東北方、陸羽東線の西古川駅から西約2.2kmの加美郡加美町上狼塚西宅地に慈恩院というお寺がある。上記の平岩の著書では、そのフルネームが大狗山慈恩院とあり、応永16(1409)年の開基、「大狗」は「おいぬ」とも読め、狼の多かった頃の年代を知ることができる」とある。この住所に示された狼塚の地名は、A4版2頁にわたるくらいの大きさの宮城県地図にも見いだされることが多いようである。Googleマップには上狼塚と下狼塚とが分記されている。

東北本線瀬峰駅から東方へ約4kmの地点、登米市南方町、登米市立西郷小学校の東隣に、Googleマップに検索を掛けるとでてくる狼^{おいぬのかけ}欠があり、「田圃であるが、所々に丘陵がある。欠は崖の意……付近に角の欠という地名もあり、狼の獲物であった鹿も多かったと思われる」とある。さらに、瀬峰駅東方約30km近くの登米市東和町米川、二股川支流西岸に昭和30年まであった狼^{おいぬがわら}河原の地名は地図上から消えてしまっている。

気仙沼線の小金沢駅から北西方へ約4kmに検索を掛けた拡大Googleマップ上に本吉町狼の巣が現れるが、平岩本に記述された狼の倉は「長の森山の南の緩傾斜地の(狼の巣)より、さらに1.5km沢を北へ登ったところに」あるはずの記述がなかった。

「後三年の役(1086～1088)で、義家が奥州に赴く際、土民の為に多く出沒して、刈った狼を埋めたとされる、狼^{おいぬさか}坂が仙台市現東北大学医学部校内にあったという。医学部と付属病院の間に、南北に通っていた、旧街道の北の方にある小さな坂」で、現在は医学部の構内になっている⁽³²⁾。

また、仙台市泉区北中山三丁目9の北中山小学校向かいの、東北自動車道寄りの実沢字戸平(元は同字早坂下東方の戸平山にあった)の一角に、宅地造成時に道端にあった石碑と共に、「天保12歳四月朔日三峯山」、左側面に「願主■太郎」(1文字不祥)と刻まれた、高さ70cm幅42cmの自然石の狼石(おいぬいし)(三峰山碑)と呼ばれる碑がある。前述の鬼首地区のオイヌ様の碑と同様に、オオカミが霊山、雲鳥山、白岩山、妙法岳の三峯山の神の使いとして、火難・盗難除けの信仰対象とされたことを示唆する。強力なブルドーザーによって宅地用に開発され、旧状の詳細はよくわからないが、当時、根白石から仙台に通ずる唯一の交易路で、中山道と称された。毎日狼除けの為に数頭のグループをなして、総計百頭以上の駄馬が、狼などの野生動物や追い剥ぎの出沒する、曲折の多い急坂を尾根伝いに往来した⁽³⁶⁾。

仙台北下町へ薪売りに険しい中山道を通っていた途中の、がつき坂で骨をのどにひっかけて苦しんでいる狼に出会い、その骨を除いて放してやった実沢^{うまかた}の馬方(馬に荷を運ばせる人)がいた。ところが仙台から帰宅したそ

の夜、庭先で大きな音を聞いたので、出て見ると一頭の猪^{いのしし}が置いてあった。それからこの馬方が城下町帰りの際には、狼が途中まで送ってくれるようになった。その後、おにぎりを2つ用意して別れるころに狼に一つ食べさせてやった。馬子が亡くなったときには、戸平山から悲しい狼の遠吠えが聞こえた。狼石はこの馬方の子孫が建て、毎年旧4月1日に赤飯のおにぎりを、「狼どん、おぼだてにきした」(お産見舞いにきました)と呼んで沢谷に落としたというのが、この狼石^{まつ}に纏わる伝承である⁽³⁶⁾。馬方の名は永沢庄之助、その子孫が2003年現在、5月の日曜日にあずき御飯と御神酒を供え供養をされておられる。戸平山の地名は開発によって現在の地図から消えてしまったが、北中山小学校の北方、約三百メートル一帯が姿を変えた旧存在場所である⁽³⁷⁾。

農民の仕事が食用植物栽培に限られていた時代には、これらを食い荒らすシカ、イノシシなどの駆除に有用な動物として、そして草地を食用に必須とするウマやウシなどの家畜を食害する有害動物としての認識に変遷があったにしても、オイヌ様の表現や、下記の現行Googleマップ上に数例に認められるような、宮城県にとくに多く残る狼の文字の入った地名には、オオカミへの特別な感情流入を感じざるをえない。

そして、以上の宮城県の場所を含め、東北地方の狼文字の表示地域は「殆どが200m以下の低い山地で、勾配のゆるやかな針葉樹あるいは広葉樹の密生している森林地帯だということは注目される」と、平岩が指摘している^(32c)。これらの地域が牛馬用牧に転用されやすく、牛馬へのオオカミによる被害拡大への潜在的要因となりえたのであろう。信仰の対象としてまで崇められたオオカミが、新興産業である畜産業の拡大に伴ってその阻害要因となり、劇的な絶滅に追い込まれた。日本で最大の陸棲哺乳類で、人畜への被害の歴史をもつツキノワグマ⁽³⁸⁾やエゾヒグマ⁽³⁹⁾が、今日なお日本の自然環境下において残存するのと、対蹠的である。

なお、ニホンオオカミの生残が時々報ぜられるが^(たとえば40)、それでもなお否定的な専門家の見解を覆すに至っていない。再現不能という弱点の克服が、今後の展開に必須と思考する。

IV-3 嶺岡牧場と御厩^{おんまや}

幕府崩壊後、従来まで江戸城雉子橋^{きじ}際の野馬方役所が管理していた嶺岡牧場は、新政府が開設した東京民政裁判所の所管となるが、明治10年頃まで所管替えが、下記のようにめぐるましく進行した。

明治元年7月東京民政裁判所は廃止、同牧場は民部省通商司所管となり、明治2年7月大蔵省通商司牧牛馬掛に。そして明治3年大蔵省勧業局に所管替えとなったが、同年11月に勧業司は廃止、新設の勸農寮所管となった。

明治2年の調査によると、馬387頭牛122頭計502頭であり、馬の頭数減がかなり進んでいたのに対して、牛の頭数増が認められるように、主畜構成に地殻変動が進み始めていた^(33a)。

明治5年10月9日に勸農寮廃止により、嶺岡牧場は大蔵省租税寮勸農課(ついで勸業課と称す)に所管替えしたが、勸農寮廃止前からの事案が同月同日以降、同月を以て表2のように告示された。雉子橋^{きじ}がかつての幕府の野馬方役所であるのはいうまでもないし、内藤新宿試験場がほぼ現在の新宿御苑にあたる。

既述した日本牧牛家實傳 第一巻中の前田留吉氏實傳の十頁に「明治二年雉子橋御厩^{おんまや}廃せられ更に築地に牛馬会社なる者を置かる」との記述は、引用源が示されていないので、「明治二年雉子橋御厩^{おんまや}廃せられ」の文言には説得力に欠ける。ちなみに御厩、御用屋敷の総称に野馬方役所が使用された。野馬方役所や御厩^{おんまや}御用屋敷の名称が、明治初期時代に数年間使用されたことは、事実であったろう。

明治7年には内務省が新設されたので勸農寮は内務省所属となり、牧場も内務省所管となった。明治10年には勸農寮が勸農局となったので、嶺岡牧場は勸農局所管に替った。

明治11年に至って嶺岡牧の経営は民間の手に移る。嶺岡牧舎(明治11~17年)、嶺岡畜産株式会社(明治22~44年)が社名である。この間の空白期間の5年間は農商務省農務局の所管となり、明治22年に牛馬・施設等の払い下げと、牧場全域の貸し付けを受けて嶺岡畜産株式会社が発足した。この新会社設立の頃になると、千葉県安房郡の環境に馬よりも牛の方が生育に適しているとの認識が浸透し、さらに新会社最後の社長石田浦吉が強い乳牛飼育拡大論者であったことに支えられて、初めは短角、ついでホルスタインの導入・育成が進行した。その結果、馬放牧と自然繁殖は衰退し、明治43年には馬生産に終止符が打たれ、西牧の30町歩を残して、嶺岡牧の大部分は売却されてしまった。

明治44年6月に西牧30町歩は千葉県に寄贈され、千葉県種畜場嶺岡分場となり、大正2年に千葉県種畜場^(33b)、昭和2年に千葉県嶺岡種畜場、昭和38年に嶺岡乳牛試験場と改称され、そして、平成13年に千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所となった⁽⁴¹⁾。少なからぬ現地資料に基づき、嶺岡牧を一書にまとめられた青木更吉^{こうきち}によれば、丸山町愛宕山南斜面に出現した千葉県酪農のさと牧場には、嶺岡牧の面影がなお残っているという。さらに畜産総合研究センターと嶺岡乳牛研究所が創設され、日本酪農発祥の地への想いが籠められている^(31b)。

しかしながら、房総半島南端に近い丸山町嶺岡から江戸城まで、陸路約1300キロメートルもあり、この間の輸送中の牛乳の鮮度保持の苦労は察するに余がある。當

時の条件下で最速の馬が利用されたのはベストであったに違いない。馬に積んでゆき、あるいは西に山越えて勝山港から海路をとるとなると、運送途中での乳酸発酵や時には雑菌増殖による乳質劣化も避け難く、運送所要時間の長さから生乳のままの輸送は不可能であった。

古文書の白牛御用留によると、文化2(1805)年4月、山田村の一例をあげると、母仔牛を嶺岡から出発して、関(富津市)、貞元(君津市)、姉ヶ崎(市原市)、検見川(千葉市)、新宿(葛飾区)泊まりを経て雉子橋に至る、5泊6日の経路がとられた。7月に嶺岡までの帰路に7泊8日を要した例もあり、牛1匹の輸送に人足4人(帰途は2~3人)を必要とした^(31c)。

これでは牛乳が保たない。嶺岡の牧子らは、泌乳期にある牝牛を仔牛付けで江戸お御厩まで送るとか、嶺岡牧で白牛から搾乳した牛乳に砂糖を添加、加熱濃縮して、細菌の増殖を抑制できるまで浸透圧を高めた白牛酪の半製品の形に加工して送付する手段を開発して、この難題を乗り越えている。下記のように、本来の牛酪にはなかった、世界酪農史上、最初の加糖牛酪の誕生は、このようにして行われた。

IV-4 幕末と明治初期の酪農を彩った白牛酪

IV-4-1 白牛の飼養法

新政府発足早々の頃に、嶺岡牧士吉野五郎兵衛が東京から嶺岡の同僚池田久兵衛他4名へ宛てた書簡中で、「白牛5組で日産二度搾りで6升」と記されていた。組とは母仔二頭で一組としており、分娩牛には必ず仔牛をつけていたので、この仔牛の飲用分を差し引くと、産乳量は多くても3升以上をこえることはなかったと推定できる。「乳の出が悪くなったら、餌として、小麦を製粉する際に生じる小麦の皮、つまり「ふすま」を与えるとよい。一百匁の白牛酪を五両で販売していたが、柔らかに内箱に詰めたものはカビが非常に生えて商品価値を低下させるので、しっかりと硬くして発送するようにと要望された。それでも売れ行きは良くなく、役所に在庫品が沢山ある等々」と述べてある^(33c)。

IV-4-2 白牛酪と牛乳の販売

江戸の白牛酪販売所は雉子橋近くの御厩であった。江戸での白牛酪販売は御厩の他に、数寄屋橋御門前の由居村利兵衛ほか4軒でもおこなわれ、さらに、京都・大阪、下総小金宿の次郎右衛門など10軒が販売に指定された。その価格は一匁400文、寛政9年の売捌き代金残高が250両に達したという^(31d)。大阪や京都まで販売ルートが延びていたのは驚きである。

本邦初の牛乳販売も文久2(1862)年に御厩で行なわれた。現埼玉県北部の行田市一帯にあった忍藩藩主松平下総守忠国が老中の許可により、二人の従者連れの侍が、三方に載せて運ぶ毎日2合の牛乳を飲用したという。上

納価格は一合当たり金一分であった^(17c)。特例ともいえる非常な高額であるが、明治6年頃の乳牛一頭の価格が150~400円位と他の物価と比較して「驚くべき」高価であり^(17e)、牛乳は一合が一朱、明治10年頃には4銭位、明治17、8年には3銭1厘1毛に下落している^(17f)。

東京下谷の和田半次郎の明治17自1月至7月の六か月間のアメリカ産牝牡牛各3頭の搾取高は23石7斗2升4合、売捌高は19石7斗7升、収入高は614円94銭2厘、平均一合は3銭1厘1毛、常費は315円50銭、臨時費は59円50銭、庸人給料は91円、計466円、差し引き益金は148円99銭7厘となり。相当な高利益を上げていた^(17f)。

IV-4-3 牛酪の調製法

これまでの引用には牛酪の説明がなく、本体もよくわからないかもしれない。出典の年代の古さから順に、その製法を列記して理解に資したい。

明治4(1871)、5(1872)年頃の「牛酪は青銅製一斗位の鍋に牛乳を入れ、之を七輪に掛け、火は悠長に謂るトロ火になし、長柄の杓子で煮詰まるまで攪拌して、形が付く位濃縮になったら下して冷却し之を団子状に丸めて、マッチ箱位の長目の真鍮金框に手で押込み、上を小刀で切り取って平面とし、之に牛酪と云ふ判型を押して、日光に曝して乾固する。此れは初めに黴が出来易いから毎日乾すときに黴を白布で拭き取る、遂ひには黴が出ない様になると、非常に光沢を出し美観を呈して蠟の様な半透明なものとなる。半透明になれば日光に曝すことを止める。この種の牛酪は明治16、7年頃まで作られておった様である。牛酪の外に牛乳製品として命じ5、6年頃からコナミルクと云うものが作られた。此れは當時の牛乳屋が諸々で作った。牛酪を粉末にしたものである。然し此等の謂る牛乳製品は明治16、7年頃何時となく自然に市場から姿を消した^(17g)」、とある大日本牛乳史の記述を、まず取り上げよう。

一般的には、530~550年頃の中国は山東省の北魏において、賈思勰によって作成された齊民要術中の第57章 酪、乾酪、漉酪、馬酪醇、酥の作り方が⁽⁴²⁾、牛酪調製の原典と考えられているようだが、酥が生乳からでも可とする以外は、すべてが乳酸菌の増殖による乳酸発酵乳を素材として調製されている。乳酸発酵過程を必要としない大日本牛乳史の牛酪調製法と、この記述とはかなり違っている。江戸雉子橋野馬方役所、つまり御厩における販売品白牛酪の供給基地である、嶺岡牧で行なわれる必須工程の砂糖添加が、この文章には見当たらない。明治18年の農業雑誌218号に掲載の牛酪調製も、「新鮮の牛乳を銅鍋に盛り之を文火にかけ 凡そ二時間程攪拌しつつ徐々に煮て 其漸く煉乳の如くなりつるを度とし 火上より取下して之を冷し 盆に入れて乾し 其充分乾燥するを待ちて篩に掛け壺詰とすべし是れ最も簡便なる方法にして 余の実施したところなり」とあり⁽⁴³⁾、

やはり牛酪に砂糖添加工程の記述はない。

ところが、大正10年に上野で開催された、第1回勸業博覧会に神奈川県と岐阜県からそれぞれ出品された牛酪と粉乳の製造説明には、「乳汁を緩火にて煮ること大約2時間其凝固するを俟ちて酪型に詰めて其形を作り風乾の所に貯う」、「乳汁を沸煎し攪拌すること大約40分爛熟して濃漿液の如くなりたるとき白砂糖を投じ（その割合1升につき15匁）頻りに攪拌して鍋底に焦げつかざらしめ漸次に大気を減じ乾固するに及び焙爐の上に移し湿気全く去るを認めて研摩する」とある⁽⁴³⁾。

これは粉乳の説明であっても牛酪ではないのではないかと、読者はお気づきであろう。ところが、当時白牛酪を上記の方法で調製した粉ミルクつまり粉乳として、「白牛酪 ○ 粉ミルク 官許白牛酪」（○は印鑑）と表示した、白牛酪の「当時製品に貼用されしレッテル」が、昭和初期の日本牛史に掲載されているので、間違いではない⁽⁴⁴⁾。また市井の出来事を編年体で記録して人気のあった、嘉永3(1850)年に出版された武江年表 巻之七の、寛政8年丙辰の欄の最初に「正月、白牛酪売払の事を命じ給ふ（享保中、房州みねおか嶺岡に白牛を放養せしめて、白牛酪製法を命ぜらる。其頃僅に三頭なりしが、此時代に至り七十余頭にいたる。依て数斛の乾酪を製せしめて、普く世人を救ひ給ふ。御恩沢ありがたき事にこそ。寛政壬子五月、桃井源寅白牛酪考一卷を撰し、梓に行へり）」（送り仮名は原文通り、括弧内原文は小文字）とある⁽⁴⁵⁾。

ただし、白牛酪考の著者が桃井源寅とあるのは誤りで、白牛酪考の原著では著者が桃井寅となっており、桃井寅が正しい。本書の同じ寛政8(1796)年欄に取り上げられた他の記事が、「芝泉岳寺、釈迦八相曼荼羅開帳、義士の遺物を見せしむ」を含む10件であり、少なくとも江戸の庶民、とりわけ読書人に知られた最初の乳製品が、白牛酪であったのは筆者に強く深い印象を与えた。

一方、大正12年の大日本畜牛改良同盟会会報No.236に、嶺岡牧士触頭格を曾祖父にもつ永井要一郎元嶺岡畜産（株）社長が、その本体を示唆する下記の文章を残した。「白牛の乳から白牛酪というものをつくったが、これは白牛の乳を鍋に入れて砂糖を混ぜ、火にかけて丹念に掻きまぜながら石鹼位の堅さになるまで煮つめたもので亀甲形にしてあった。そして非常に貴重なものとして病人などはそれを削って、お茶で飲んだりなどした。――白牛酪を作るのは唐銅の鍋に限っていた」^(33a)。加糖固形牛乳という乳製品は、従来から伝統的な資料として重用されてきた中国由来の本草綱目や齊民要術に見られない、その意味での新乳製品である。

折から横浜港から米国でゲイル・ボーデンによって開発された加糖煉乳（コンデンスド・ミルク）が急速に輸入量を増やしており、乳製品の保存性向上に砂糖添

加の有効性に漸く注目が集まりつつあった。このような状況を背景にして白牛酪の保存性向上に砂糖が応用された可能性は十分に想定できる。

V 明治初期における飲用生乳の生産

V-1 東京における牛乳搾取者たち

自ら信じた経綸実行の初期に、日本酪農振興を掲げて前田留吉と接触し、前田は由利公正の所説に共鳴し、かれに諮りつつ東京の乳業拡大の先頭に立った。

明治19年発行の日本牧牛家實傳第一巻に収録された牧牛家の総数は11名を数えるが、過半数の7名が旧藩士に属しており、残りの4名中、3名が農家出身、1名が畜産業と醸造業出身者である。これら牧牛家の中で多数を占めた旧藩士らは、既述した廃藩置県によって藩録を失った膨大な浪人群からの転職者であった（表3）。

「日本牧牛家實傳」中ではないが、明治5年にオーストリアでの牧畜経験者アンドリュ・マキノら二人のイギリス人を雇って、下北半島の不毛の地斗南藩上北郡百國村（現三沢氏谷地頭）に約3000ヘクタールの日本最初となる洋式牧場を開設した小参事廣澤安任もその一人であった⁽⁴⁶⁾。その後の廣澤牧場は長く存続し、昭和60年に解散している⁽⁴⁷⁾。

前田留吉以外の牧牛家の略歴を表3に要約した。猪股要助、杉田秀之助、神子治郎、村岡典安以外の7名は、築地牛馬会社で受講したか、直接前田に就いて技術を習得している。前田の影響の大きさがよくわかる。前田には乳業界参入を目指す人を指導するに足る確固とした技術力と、人を容れる大きな包容力が備わっていたためであろう。

東京で最も早い開業は表2の吉野文蔵だが、明治3、4年頃には辻村義久（下谷）、阪川當晴（麹町）、森川幸次郎（木挽丁）、水牧場（築地）が開店した。種牡牛をもたなかった阪川は泌乳期が終わりに近づくと、半蔵門で牛車を待ち構えて、種付けを交渉し、力が抜けると信じた牛方を説き伏せて、一回五十銭の種付け料を支払っていたという^(17c)。

V-2 前田牧場と北辰社

もともと神田猿樂町には、明治初期に創設された北辰社があった。しかし、その創設時期は確定できていない。戊辰戦争の最終戦となった北海道は五稜郭に立てこもった幕府軍の総裁榎本武揚（元海軍副総裁）、副総裁松本太郎（元陸軍奉行並）、陸軍奉行大鳥圭介（元歩兵奉行）の共同経営で、野口某が北辰社の支配人だったとされるが、その実態もよく分かっていない。

榎本には留学先オランダでの見聞があり、日本におけ

表3 「日本牧牛家實傳」第一巻に採録された前田家以外の牧牛家像

姓 名	生年	出身地と前歴	牛乳搾取所創設への道
辻村 義久	1832	幕臣 彰義隊、五稜郭で降伏	牛馬会社4年9月19日自宅開業
野口 義孝	1845	日向佐土原藩士、戊辰戦争従軍	牛馬会社
杉田秀之助	1848	会津藩士、会津城攻防戦に参加	牛馬会社に入れず榎本系牛乳舗
小川 松介	1825	美濃国各務郡農家、職を転々とす	牛馬会社
村岡 典安	1849	山家藩士、蘭式兵法で江山藩指導	神田川酒井左衛門牛乳搾取所
團野 精	1853	福井藩士で木挽町に牛乳搾取業の父から受売店を銀座に開設、後前田の牧丁を半年後牛込で開業	仲間組合規則制定 明治8年東京府下牛乳搾取営業
神子 治郎	1844	上總国、牛馬業、醤油醸造等に従事	26歳横浜居留地ジーマース牛乳搾取所、中澤源蔵の下で技術習得、明治6年開店。東京に移転
猪股 要助	1852	越後国頸城郡農家、18歳で上京、4家に仕え5番目県令川瀬秀治の執事となり、牧牛業の重要性を説かれ同氏厩を借り養牛1を飼う	明治5年駒場野旧御用邸跡地に牛乳搾取所を創設、明治7年下総小金原に繁殖牧場開設
宮部 久	1844	水戸藩士、正義党党员、郡廳元締天塩国会計掛を経て、上京、石油会社員	明治8年千葉県唯一の牛乳搾取所保生舎を創設、明治11年上京を前に前田留吉に譲渡、第百銀行支配人、茨城県丹下原に乳牛繁殖牧場を開設、水戸藩旧士族の授産に資す
阪川 當晴	1832	幕臣並小普請、留吉櫻川町店で業務習得	明治4年赤坂の自宅で和洋牛各1頭で牛乳搾取所開店

る牛乳搾取業創設の先駆となりうる見識は充分に備えていたと思われる。しかし、かれに搾乳を中核にした乳牛管理技術の知識が備わっていたか？となると、これは愚問でしかない。明治の最初期、この需要に応えられる牛乳技術者、牛乳牧士とでもいうべきか、このような職人は稀であったから。榎本らに有能な牛乳牧士の不在が、アキレス腱になったと推察される。

いずれにせよ、戊辰戦争の最終段階の戦場となった北海道は五稜郭において、これから始まろうとする戦闘によって失われるのを恐れた、フランスの法学者ジョセフ・ルイス・エルザー・オルトラン（J.L.E. Ortolan）著万国海律全書とともに、蝦夷征討軍陸海軍総参謀黒田清隆に、榎本が降伏打診の文書を送ったのが機縁となり、5月17日にかれらは新政府軍の軍門に降った。

明治2年正月、士官以上の入札選挙によって選出された共和制仮政府の組織とメンバーは次のようであった。総裁：榎本武揚（下谷御徒町生まれの幕臣、33歳、明治41年没）⁽⁴⁸⁾、副総裁：松平太郎（三河国加茂郡松平郷の松平家出身の幕臣、30歳、明治42年没）⁽⁴⁹⁾、海軍奉行：荒井郁之助（湯島天神下上手代町生まれの幕臣、33歳、明治42年没）⁽⁵⁰⁾、陸軍奉行：大鳥圭介（播磨国赤松村生まれの幕臣、36歳、明治44年没）⁽⁵¹⁾、箱館奉行：永井玄蕃（三河奥殿藩藩主のもとで生まれた旗本、53歳、明治24年没）⁽⁵²⁾、開拓奉行：澤太郎左衛門（江戸生まれの幕臣、35歳、明治31年没）⁽⁵³⁾、陸軍奉行並：土方歳三（武蔵国玉郡石田の農家生まれの幕臣、35歳）。箱館戦争の最終日、同年5月11日、彼らのうち土方のみが、激戦の展開された箱館一本木関門において馬上で指揮中、腹部に銃弾を浴びて戦死した。「鏝とりて月見るごとにおもふ哉あす

はかばねの上^てに照かと」が辞世の句とされる。かれの遺体は小芝長之助らによって引き取られたが、埋葬地は特定されていない⁽⁵⁴⁾。

主だった捕虜は明治2年東京に送られて現和田倉門近傍にあった兵部省札門所附属監獄に投獄された。死刑にすべしとの政府内の意見が強かったが、かれらの優れた才幹を惜しんだ黒田はこれを抑え、明治5年1月初旬に特赦により出獄、新政府の開拓使関連の仕事に登用されることになる。

江戸下谷御徒町^{とう}に天保七（1836）年生まれ^{つぎ}の榎本は、幕府直轄の大学昌平黌^{とう}ついで長崎海軍伝習所に入学、築地海軍操練所教授となる。文久二（1862）年から慶應三（1867）年まで海軍伝習のためオランダに留学する。長期間にわたるオランダ滞在が、その国土に展開される日本と異なった牧畜や酪農に印象をもたせたかと思われる。

額面通りにこれらの日時を受け取れば、北辰社の創設は出獄以降となって当然であろう。

日本最北端の城五稜郭に拠って官軍に立ち向った幕府軍の総裁榎本は、従来から幕軍内にその出処進退に対する批判的な一派を抱えておりながら、軍外にあって同じ立場を崩さなかった福沢諭吉から助命嘆願をださせる程の人物でもあった。明治5年1月6日に出獄、親類預け約三か月後3月6日に正式赦免。一方、かつての五稜郭攻撃の総司令官から長官不在の北海道開拓使長官代理に代わっていた黒田清隆は、北海道開拓への榎本の活躍を期待していた。ほぼ二か月後の3月8日には、開拓使四等出仕として北海道釧山検査巡回を命じられ、翌明治7年1月に駐露特命全権公使を発令され海軍中将となり、同年6月にサンクトペテルブルクに着任している。明治

11年、鉄道のなかったシベリア経由の帰国まで、榎本は駐露公使として大任を全うした。

ちなみに、後にシベリア横断の経験をまとめたシベリア日記は世界的に有名になった。帰国後外務省二等出仕となり、やがて駐清特命全権公使に任じられ李鴻章と天津条約を調印に尽力している。薩長藩閥主流の政界にあっていずれの藩閥外にありながら、数多くの重責を果たし、晩年には子爵に叙され、逋信、文部、外務、農商務大臣を歴任した⁽⁴⁸⁾、^(55a)。

他方、大島圭介と松本太郎とはそれぞれ1月8日、1月12日出獄後はともに開拓使関連に出仕するが、やがて別個の道を辿り、最終的にそれぞれ駐清国特命全権公使、枢密顧問官、男爵⁽²⁸⁾と、ロシアや中国での商業に失敗による流浪の生活、弟と共に榎本の保護を受ける⁽⁵⁶⁾という数奇な人生を送った。

このように見てくると、殖産興業の旗印のもと、政府の政策資金の支出にかれらが与っていた可能性も含めて、駐露公使在任中の明治6年という時期に、北辰社の経営への関与がどの程度可能であったのか？ 疑問も残る。しかし、安部公房が示唆したように、兵部省札門所附属監獄に投獄されたのは、政府軍に反旗を翻した幕軍の筋金入りの将兵だったことを考えると、幕軍の幹部だった榎本らより短い刑期でこれら幹部牢に同居していた数名の歩兵頭並の中からの出牢者を通じて同志への連絡が可能だったらしい^(55b)ので、榎本らの出獄以前の北辰社開設が不可能とは云いきれない。その後、北辰社は榎本邸跡地 飯田町三丁目九番地に牧場を移設した。

ところが、赤間倭子の小説新撰組副長助勤齊藤一によれば、「明治元年9月24日降伏、会津塩川、高田藩に預けられ、明治3年5月半ばに本州最北の斗南藩に移住となったが、明治4年2月、上京する元会津藩主松平容保の共の一人に加えられて、東京にでた」、「神田今川小路に住んでいる藤田五郎……は、……北海道で恭順した榎本武揚が、今は許されて明治4年から千代田区飯田町三丁目に北辰社という牛乳店を開いているので、時々そこへ手伝いに行っているといって淋しそうに笑った。ブリキの缶に、しぼりたてのものを殺菌して詰めた牛の乳は、上流階級と横浜辺りの外国人からの注文がほとんどで、結構何とかやっているようであった。」という⁽⁵⁷⁾、北辰社の明治4年存在説が述べられている。

なお、資料源はわからないが、明治文化全集の一巻に、「牛乳搾取所北辰社の始」の見出しには、牛乳搾取所北辰社が、麹町区飯田町三丁目九番地にあり。明治四年に、榎本武明の創むる所にて、同十三年、前田喜代松代わりて社主となる、とある⁽⁵⁸⁾。飯田町三丁目九番地はおおむね千代田区九段北1丁目13～14辺りで、日本乳業技術協会などの入居する現在の乳業会館以南、当時は田安稲荷、現在の築土神社周辺一帯にほぼ相当しそうである⁽⁵⁹⁾。

ちなみに、藤田五郎は新撰組三番隊を率いた組内有数の剣客で、剣術師範頭、副長助勤(組長)を勤めた齊藤一^{はじめ}である。かれは江戸、京都、甲州、会津と転戦したが、ごく最近、菊地明の新撰組組長齊藤一によれば、「明治元年9月22日に遂に降伏。塩川村に送られ、翌年1月5日から高田藩城下寺町(新潟県上越市寺町)の東本願寺総会所に収容された。明治3年に斗南藩五戸村中ノ沢に送られ、明治7年6月10日まで、この寒冷不毛の僻地に留まり、上京する明治9年5月41日には東京都北区滝の川寿徳寺に新撰組慰霊碑建立に加わった」ことが明らかにされている⁽⁶⁰⁾。菊地はこの中で、藤田家に伝わる文書藤田家の歴史に「明治4年後、東京に出て、父山口ゆうすけの許にあり、各藩の不平分子とともに放浪生活をなせり」との記述を残している。こうなると、明治5年3月作成の壬申戸籍に藤田五郎について「明治七年六月十日挙家東京へ五ヶ年の間寄留」⁽⁶⁰⁾とあるのと矛盾する。藤田の届出日と実際の転入日とのずれを含め、どこかに食い違いがあるのかもしれない。ちなみに、松平容保の明治4年2月の上京年月は、歴史的事実として確認されている。

その後、「明治10年2月20日警視局警部補に任官。同年5月18日西南戦争に半隊長として従軍、豊後高床山(現大分県竹田市北方法師山辺り)の戦闘において銃創を負い、同年10月28日に帰京した。明治21年に警部、24年4月本郷警察署勤務を最後に退職した。その後、東京高等師範学校附属東京教育博物館(現文京区湯島一丁目湯島聖堂構内)看守、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)庶務係件会計係を勤め、44年に68歳で退職している。胃潰瘍を患い、大正4年9月28日、本郷区真砂町30番地の借家において、71歳で床の間に移り座位のまま死去した」⁽⁶⁰⁾。なお、この本の表紙カバー(警視庁勤務時)、本文23頁(同前) および巻末(高齢時)に、不死身といわれたその精悍な相貌を偲ばせる写真が掲載されている。

また、牛乳に加熱殺菌が壇装で行われ始めたのは、明治32年とされているので、赤間が記述したような明治初期に、かれの勤めていた牛乳屋において、牛乳の加熱殺菌が実施されていたとは、一般論として考えにくいことを付記しておこう。

牛乳搾取業の展開を追うように、明治33年4月になると、牛乳営業取締規則が内務省令第15号として発布されたが、牛乳加熱殺菌に関する記述はない⁽⁶¹⁾。牛乳加熱を取締の対象としていない以上、牛乳の加熱殺菌商品の流通を妨げるものではないが、齊藤一の働いていた牛乳屋で加熱殺菌乳を調製していたとするのは、やはり無理であろう。

しかしながら、大正15年5月17～18日に内務省で開催された牛乳屠畜技術官会議において、制定以来25余

年間にわたって、実情に沿わない点も少なくなかった牛乳営業取締規則の改正が、ようやく協議された。ここでの論議の要旨の中で、「牛乳は生乳が原則であるが、殺菌する場合には加熱冷却用設備と監督方法を厳重に規定する」との記述があるのは、上述の観点からとくに注目される。生乳流通が主体ながら、当時すでに加熱殺菌乳が流通しつつあったと見ることができるだろう。しかし、これらの検討課題の改正は、昭和8年10月31日の内務省令第37号による「牛乳営業取締規則（改正）」まで待たねばならなかった。この改正規則において、63～65℃において30分間の低温殺菌加熱、または95℃以上において20分間以上の高温殺菌加熱によるべしと明記された⁽⁶²⁾。

閑話休題、留吉^{おい}の甥に当たる前田喜代松が北辰社を譲り受けたのは明治14(あるいは13)年であった。その後同社の牛乳舗のみが九段四丁目十三番地に移転している。

従来搾乳と牛乳販売は同じ土地に設置された牛乳搾取所で行われ、一般的に牛乳搾取所の名称で通用してきた。北辰社が乳牛を飼養し搾乳する場の牧場と、搾乳後の牛乳販売に適切な場として牛乳舗の名称とを分けて登場させたのは、牛乳舗なる業種名流通の皮切り役を果たしたようである。猪俣要介が牧場を麴町区富士見町4丁目9番地に移し、明治11年から14年にかけて四谷住永町、高輪南町、本郷真砂町、牛込簗笥町に、それぞれ第2、第一、第3、第4支舗を出店したのも、その一例である⁽⁶³⁾。

北辰社の創業運営は喜代松が行ったが、実務は松本太郎が当たったといわれている。その後喜代松の息子鉄太郎、孫の幸造と経営が引き継がれた。しかし、合名会社北辰社代表前田幸造は明治15年に明治乳業(株)に譲渡し、北辰社ミルクプラントとして東京合同市乳株式会社の系列化になった⁽⁶⁴⁾。その後特別牧場を含め世田谷区給田に移転し松本喜代治及び松本増雄が処理事業を行ったが、戦争中統制会社に合同して戦後廃止した。なお、給田の特別工場跡地は明治牛乳(株)烏山工場、東京工場と名称を変えて昭和60年に閉鎖している⁽⁶⁵⁾。

現在目白通りに面して立つ北辰社牧場跡なる石柱周辺にあったこの牧場は、明治33年内務省15号牛乳営業取締規則により郊外に移転を余儀なくされた。よって、前田留吉の五男で二代目社長となっていた、前田甲次郎は雑司ヶ谷に広大な土地を求め、北辰社前田牧場として移転した⁽⁶⁶⁾。

引用文献

(1) 矢澤好幸 (2013) :

a ; 私信、7月21日 (同封：豪商全傳 前田留吉氏傳 (自原稿、牧場見取図付き)、細野明義解説 豪商全傳前田留吉氏傳 (平成25年7月19日)

b ; 私信、8月15日 (同封：ミルク色の残像、牛乳搾取所設置願や牛乳搾取所牛舎増設願等の写真、由利公正傳等)

c ; 私信、8月29日 (同封：東京乳牛共進会報告、牛乳倶楽部設立認可願)

d ; 私信、9月24日 (留吉の系列店の組織情報)

e ; 私信、11月10日 (留吉写真、系図等)

(2) 金田耕平纂述 (1886) : 日本牧牛家實傳 第一巻、pp1-16、丸屋善七

(3) 牛乳新聞社編集、編集発行人 十河一三 (1934) : 乳業者名鑑、大日本牛乳史 付録、pp1-4、牛乳新聞社、東京

(4) 世界各国の平均寿命 (2010年) : <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1620.html>

(5) 図録 平均寿命の歴史的推移 (日本と主要諸国) <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1615.html>

(6) 大政奉還 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/大政奉還>

(7) 王政復古 (日本) wikipedia (2014) : http://ja.wikipedia.org/wiki/王政復古_日本

(8) 江戸開城 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/江戸開城>

(9) 江戸幕府 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/江戸幕府>

(10) 討幕の密勅 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/討幕の密勅>

(11) 天領 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/天領>

(12) 山本兼一 (2013) : 命も入らず名もいらず 下 明治篇、pp228-229、集英社文庫、(株) 集英社、東京

(13) 徳川家達 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/徳川家達>

(14) 小松純之助、一瀬幸三編纂 (1960) : 日本乳業史、pp5-6、日本乳製品協会、東京

(15) 徳川慶喜 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/徳川慶喜>

(16) 三上一夫、船澤茂樹 編 (2001)、由利公正のすべて、pp182-183、新人物往来社)

(17) 白井紅白 牛乳新聞社編集 (1934) : 大日本牛乳史、a ; pp135-136、b ; pp114-128、c ; pp220-223、d ; pp224-227、e ; pp229-231、f ; pp246-247、e ; pp222-223、牛乳新聞社、東京 (著者注：大日本牛乳史の扉には牛乳新聞社編集 大日本牛乳史 附乳業者名鑑 乳業者名簿 東京 牛乳新聞社蔵版とあり、奥付には牛乳新聞社編集、編集発行人 十河一三とあるが、本文中 pp3-218の著者はp218の最終部に括弧付きで、以上 白井紅白記とある。した

- がって、p219第四編以下p485までが牛乳新聞社編集となる。ここでは、著作権上から著作者名を重視すべきと考えた表現にしたがった。なお、前記本文以外に付録として乳業者名鑑pp1-189、全国乳業者名簿pp1-192が収録されている。後者に朝鮮、満洲、樺太が再録されおり貴重である。)
- (18) 明治 wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/明治/%E6%98%8E%E6%B2%BB>
- (19) 坂田精一訳 The Complete Journal of Townsend Harris, edited by M.E.Cosenza (1930) : ハリス日本滞在記 中巻 (1979)、
a : pp12-17、b : pp55-57、下巻 (1962)、c : pp204-206、d : 附録 日米修好通商条約議定書 (和文) pp218-219、e : pp208-209、岩波文庫、岩波書店、
- (20) 渡辺京二 (2014) : 逝きし世の面影、pp501-502、平凡ライブラリー 552、平凡
- (21) 青木枝朗 訳 (2003) : ヒュースケン 日本日記、
a : 274-287、b : pp178-227、岩波文庫、岩波書店
- (22) 野村泰三 (1969) : 日本乳製品小史、pp88-95、有隣堂出版、横浜
- (23) カール・クロウ著、田坂長次郎訳 (1994) : ハリス伝 日本の扉を開いた男、pp258-259、東洋文庫61、平凡社、東京
- (24) ヘンリー・ヒュースケン wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/ヘンリー・ヒュースケン>
- (25) メーチニコフ著 渡辺雅司訳 (1987) : 回想の明治維新 ―ロシア人革命家の手記―、pp89-96、岩波文庫、岩波書店
- (26) 横浜開港資料館編 (1998) : 図説 横浜外国人居留地、pp18、有隣堂、横浜
- (27) 斎藤多喜夫 (2010) : 日本近代乳業事始め ―前田留吉の牧場は存在したか?、酪農乳業史研究、No.4、pp1-4、日本酪農乳業史研究会、東京
- (28) 足立 達 (2013) : 幕末から揭示初期の横浜における生乳飲用とアイスクリーム摂取の日本人への伝播 ―日本において最初の公定乳脂肪率容量式測定法となったマルシャン法採用の史的背景II―、酪農乳業史研究、No.7、pp20-27、日本酪農乳業史研究会
- (29) 和仁皓明 (2011) : 醍醐随想 ～乳を食べる文化への誘い～ 第十七回 日本酪農の夜明け (五)、Nyugyo Journal, pp24-27, Vol.49, No.8、(株)乳業ジャーナル、東京
- (30) 農商務省纂訂 (1901) : 大日本農史 下巻、p13、pp30-31、博文堂、東京
- (31) 青木更吉 (2005) : 嶺岡牧を歩く、
a : pp186-195、b : pp8-17、c : pp206-208、d : pp212-215、e : pp209-210、崙書房出版、千葉県流山市
- (32) 平岩米吉 (2012) : 狼 ―その生態と歴史―、
a:pp238-241、b:pp243-247、c:pp161-171、築地書館株式会社、東京
- (33) 金木精一 (1961) : 安房酪農百年史、
a : pp37-38、b : pp41-61、c : pp38-40、安房郡畜産農業協同組合、館山市
- (34) ニホンオオカミ フリー百科事典『ウィキペディア (wikipedia)』(2014/01/25 08 : 02 UTC版)。ニホンオオカミ - wikipedia: <http://ja.wikipedia.org/wiki/ニホンオオカミ>から引用。
- (35) 郷右近忠男 (1997) : 聞き書き 秘境・鬼首物語、pp36-39、421、創英出版株式会社、仙台
- (36) 仙台市泉区役所まちづくり推進課 (2014) : 泉区泉史跡巡り中山道・狼石、<http://www.city.sendai.jp/izumi/c/siseki.html>
- (37) 「いずみのふるさと」総集編 編集委員会 (2003) : 「いずみのふるさと」 ―総集編―、pp16-20、新しい杜の都づくり泉区協議会、仙台
- (38) ツキノワグマ - wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%84%E3%82%AD%E3%83%8E%E3%83%AF%E3%82%B0%E3%83%9E>
- (39) 日本における食害事故～ヒグマ編 - Seesaa wiki (ウィキ) (2014) : <http://seesaa.wiki.jp/book-wiki/d/%A1%DA%BF%CD%B6%F4%A4%A4%A1%DB%C6%...>
- (40) 斐太猪之介 (1970) : オオカミ追跡18年 ―ニホンオオカミはまだ生きている―、pp38-155、実業之日本社、東京
- (41) 畜産総合研究センター・千葉県 <http://www.pref.chiba.lg.jp/lab-chikusan/>
- (42) 賈思勰著、田中静一、小島麗逸、太田泰弘編訳 (1997) : 現存する最古の料理書「齊民要術」、第57章 酪、乾酪、漉酪、馬酪酵、酥の作りかた (鵜田文三郎、田中静一)、pp47-56、雄山閣出版、東京
- (43) 足立 達 (1980) : 牛乳 生乳から乳製品まで、
a : pp211-215、株式会社 柴田書店、東京
- (44) 窪田五郎 (1940) : 日本牛史、pp137-140、子安農園出版部、横浜市
- (45) 今井金吾 校訂 (2003)、斎藤月岑 原著 (1850) : 定本 武江年表 中、pp140-142、ちくま学芸文庫、筑摩書房、東京
- (46) 矢澤好幸 (2008) : 明治初期における洋式牧場の発展の考察、酪農乳業史研究、No.1、pp26-27
- (47) 中瀬信三 (2012) : 明治期における大型牧場の盛衰とその役割、酪農乳業史研究、No.6、pp14-20

- (48) 榎本武揚 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/榎本武揚>
- (49) 松平太郎 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/松平太郎>
- (50) 荒井郁之助 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/荒井郁之助>
- (51) 大鳥圭介 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/大鳥圭介>
- (52) 永井玄蕃 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/永井玄蕃>
- (53) 澤太郎左衛門 - wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/澤太郎左衛門>
- (54) 土方歳三 - wikipedia (2014) : <http://ja.wikipedia.org/wiki/土方歳三>
- (55) 安倍公房 (2008) : 榎本武揚、改版 中公文庫 743、a : pp70-252、b : pp7-69、中央公論社
- (56) 童門冬二 (1997) : 小説 榎本武揚 二君に仕えた奇跡の人材、榎本武揚年譜、pp403-404、詳伝社、東京
- (57) 赤間倭子 (2002) : 新撰組副長助勤 斉藤 一、pp243-269、学研M文庫、(株)学習研究社
- (58) 明治文化研究会 編集代表者 木村 毅 (1969) : 牛乳の始 (8) 牛乳店北辰社の始、明治文化全集、別巻 明治事物起源、pp1321-1323、日本評論社
- (59) 人文社編集部 (2003) : 古地図ライブラリー 別冊 切絵図・現代図で歩く もち歩き 江戸東京散歩、pp24-27、(株)人文社、東京
- (60) 菊地 明 (2011) : 新撰組 組長・斉藤 一、pp217-244、(株)PHP研究所
- (61) 山本俊一 (1980) : 日本食品衛生史 (明治編)、pp96-112、中央法規出版(株)
- (62) 山本俊一 (1981) : 日本食品衛生史 (大正・昭和前期編)、pp132-136、中央法規出版(株)
- (63) 金田耕平 (1886) : 猪俣要介氏實傳、pp4-6、日本牧牛家實傳、丸屋善七、東京
- (64) 明治乳業株式会社 (1969) : 明治乳業50年史、pp138-140
- (65) 東京飲用牛乳協会 (1991) : 白い雫、pp202-205
- (66) 豊島区立郷土資料館 (1990) : '90・特別点図録 ミルク色の残像 東京の牧場展、pp15-33

論文

豪商全傳 前田留吉氏傳の公表にあたって

Ⅱ 豪商全傳前田留吉氏傳の特徴

足立 達¹⁾、矢澤好幸²⁾

1) 〒981-3204 仙台市泉区寺岡1丁目25-1 エバーグリーンシティ寺岡806

2) 〒252-0334 相模原市南区若松6-5-60

On the Publication of an another new Biography of Merchant Prince Tomekichi Maeda in the Field of Dairy Farming in Japan During from the Closing Days (1860-1867) of the Tokugawa Regime to the Middle Stages (1868-1887) of Meiji Period.

Ⅱ Distinguishing Features of the Manuscript for Biographical Writing on Great Dairy Merchant Tomekiti Maeda

Susumu Adachi¹⁾ and Yosiyuki Yazawa²⁾

1) Ever green city Teraoka No806, Teraoka 1-25-1, Izumiku, Sendai, 〒981-3204, JAPAN

2) Wakamatu 6-5-60, Minamiku, Sagamiharasi, Kanagawaken, 〒252-0334, JAPAN

Abstract

An another biography, entitled “Great Dairy Merchant Tomekichi Maeda” was handed down to Mrs. Atsuko Itoh who is the fourth-generation descendant of Tomekichi. The authors, who have received a copy of this biography and other relevant documents from Mrs. Itoh, were interested in the straightforwardness of the text covering the whole of his life, different from those works published as a series. The biography is still in a manuscript state and the authorship and documentation date are unclear. The manuscript is 27.7 centimetres long and 20.7 centimetres broad with seven leafs of paper bound in Japanese style. Maeda's personal record in this biography was suspended in the latter part of autumn in 1888. As compared with the previous manuscripts that records had covered until in 1885, Other events that occurred between 1885~1888 have been incorporated into the Maeda's record. Although Maeda had a long life for 1840~1902, records of his life since 1890 have not been clear. In this paper, some new information is provided, especially an account of his circumstances in the latter part of his life.

I はじめに

日本牧牛家実傳中の前田留吉氏實傳（以下「留吉實伝」と略称）の結びの部には、豪商全傳 前田留吉氏（君）傳（以下「留吉君伝」と略称する）にない、「留吉實伝」発行時点までの留吉の人生の総括が、下記のように称揚されている。

「一小農の家に生れ僅に身を以て郷を出で幾多艱辛を嘗め其甚だしきは外人の奴隸となり身を牛糞の中に投し

て終に今日あるを致す今日に至って其産は商人の家を興す者と雖も遠く及ぶ莫く其威名は実に牛乳搾取中興の始祖たり今や我国牛乳の需用日に盛にして肉食の議亦大に興る是実に氏の賜に非ずして何ぞや乳肉の人身健康に至大の関係あるは茲に之を云ふを要せず若し其初に當て氏が幾多の艱辛を嘗めなかりせば孰んぞ今日の如く容易に其供給を需むるを得んや氏の如きは実に吾人が健康の母にして其恩澤は永く吾人の子孫に傳へて滅せざる者と云ふ可し」⁽¹⁾。

なお、前報で触れたので、繰り返しになるが、表紙に記述された豪商全傳 前田留吉氏傳の表題と、原文の第一頁の本文の記述に先んじて、行を改めた豪商全傳 前田留吉君傳の記述がある。両者は似ているが、一ヶ所、(氏)が(君)となり、違っている。表題を替えようという意味ではなく、以下の記述に長々と引用源の表題全文を記載する面倒を避けたかった。いずれを採るべきか悩んだが、十河一三編の大日本牛乳史付録乳業者名鑑には牛乳の開祖 前田留吉氏傳とある。「留吉氏伝」の公表は昭和9年と、記述年が不明ながらも、はるかに「留吉君伝」より後発であるのは疑う余地はない。しかしながら「留吉君伝」の公表はこれからである。先取権から論ずれば「留吉君伝」に理が有るかもしれないが、現実的な略称としての「氏伝」との重複を避けるため、ここではあえて表紙上の表題由来ではない「君伝」の採用を諒とされたい。

ところが、「留吉君伝」では、「留吉實伝」の末尾に見られるような結びの称賛文はない。明治19年における留吉の功労賞受賞と、府下一の鉱泉大浴場開設。明治20年における自分自身にとり、二回目となる渡米による乳用種牛百余頭の買付と売却。広大な牛舎建設。そして、明治21年における関西の牧畜事業視察等が述べられている。これらは原文14頁中2頁を占めるにすぎないが、この時点までの経過年数からすれば、全年数に対する記述スペースの割合は高い。

平成25年7月19日に矢澤好幸が最初に入手した資料の豪商全傳前田留吉氏(君)傳手書原稿(牧場見取図付き)および平成25年7月19日付けの細野明義解説 豪商全傳前田留吉氏(君)傳の記述は^(2a)、明治21年夏で中断しており、前半強の部分に、日本乳業史の重要資料の一つとされてきた「留吉實伝」⁽¹⁾と同文句が少なくない。なお、前田留吉君傳として表紙を含めぬ原稿一頁目の冒頭から始まる本書に、同一人物の青壮年期を対象とした他の記述と大差を期待するのは、かなり困難な課題なのかもしれないが、留吉亡き後に書かれた十河一三による、大日本牛乳史付録の乳業者名鑑中の市乳の開祖前田留吉氏傳^(3a)とて、同工異曲である。

しかしながら、本書^(2a)が評価できるのは、その後半弱の部分を中心とした記載にあるように思われる。また、留吉にとって他の面においても、マイナスととられかねない、たとえば二回にわたる入獄、田中鶴吉がもってきた小笠原・嫁島の牧場化とか天日製塩事業のような言葉巧みな話に乗せられたような経験も取上げる等、第三者的立場に近い記述がみられる。その一方では、亡き妻への強い思い入れ等の記述がおこなわれている。また、末尾に付録のように、前田牧場の在来部と増築部の実測値入りの地図が次頁下のように示されており、その存在位置と発展の様子が推定できるのも、「留吉實伝」に見ら

れぬところである。このように「留吉實伝」等の従来の知見とは異なった視点から、留吉の実像に迫る貴重な資料として、「留吉君伝」を後世に伝えるため公表すべきと判断した。豪商全傳留吉君傳の表紙は原典のコピーであり、コピーされた原版の陰跡を示す細い黒線から、原典の大きさはA4版より少し小さかったのがわかるであろう。

既述のように、矢澤が入手した上述の資料等には、豪商全傳 前田留吉君傳の本文とはほぼA4版全面を占める独立の豪商全傳 前田留吉氏傳と原著者によって書かれた手書の表紙に加えて、近代日本乳業史に詳しい細野明義による、B4版の豪商全傳 前田留吉君傳で始まる本文と、原典と同様な豪商全傳 前田留吉氏傳の表題、そして、この下に平成25年7月19日、解説 細野と記した表紙が同封されていた。原典は縦書き平仮名遣いに変換され、難解な漢字と用語への注釈付きを施された、見事な現代文の「留吉君伝」に变身していた。学識豊かな細野の解説を得て、公表を前に大きな壁のように立ちはだかっていた、難仕事が見事に解決されており、一読して上述のような内容の新奇性から、原典執筆後ほぼ126年の年を経て、漸く本誌発表への期待が胸中に閃き、そして膨らんだ。

別記の校注豪商全傳 前田留吉氏傳のほとんどは、この細野の原稿に依拠しており、足立達は概ね細野原稿に漏れていた、いくつかの難解漢字などについての説明に廻った。

すでにおことわりしたように、本論文では本文の記述上豪商全傳 前田留吉君傳の頻出する煩雑さを避けるため、敢えて「留吉君伝」の略記を使用した。校注原稿の表紙と第一頁頭書の誌名が、原本のそれぞれ豪商全傳 前田留吉氏傳と豪商全傳 前田留吉君傳として、原点を尊重したのはいうまでもない。

Ⅱ 前田留吉の系譜

豪商全傳 前田留吉君傳の公表に当たり、主題になっている留吉自身の没年墓所が不詳では、記載内容理解に深く関係してくるばかりでなく、飲用牛乳の元祖とされる人物に申し訳ないと考えていた足立は、かねてからの念願を果たす好機到来と判断した。

幸いにも「留吉君伝」の後半三分の二付近にあった、留吉の妻女の菩提寺名が目にとまった。インターネット地図上の亮朝院を手掛かりに、電話をかけたところ、電話口に出られた住職が、お手元の檀家資料を丁寧に調べてくださり、妻女のお墓の存在を肯定されたばかりでなく、法名と生時の姓名、さらに留吉の墓所の存在、法名、没年まで教示いただいた。お蔭で留吉に関するそれぞれが、亮朝院、法性院直道日還信士、明治35(1902)年10

月20日、享年62であることを初めて知ることができた。さらに、「留吉君伝」に登場する妻女の個人名は信女ではなく、延女であることを教えられたのもこの時であった。突然の電話にもかかわらず、懇切に対応していただけたご親切が忘れられない。これらの事実を直ちに電話で矢澤へ連絡した。

その後まもなくして、同寺を訪問した矢澤は、住職のお許しを得て、留吉らの墓所の写真など貴重な情報入手できた。そしてさらに豊島区立郷土資料館まで足を延して、同館に保存された文書から、留吉直系の前田栄一が寄贈された留吉関連の重要資料、たとえば警視総監宛てに提出した北豊島郡高田村大字雑司ヶ谷38番地前田甲次郎の牛乳搾取所設置願や牛乳搾取所牛舎増設願等について、郷土資料館の許可をえて、写真撮影やコピーがとれた^(2b)。この拙論記述の基となる資料の多くは、矢澤によってもたらされたものである。これらのコピーや写真入手の幸運がなければ、これらの原著を世に問うことは勿論不可能であっただろう。

話を「留吉君伝」^(2a)に移す。平成22年10月19日日付の足立宛私信の中で、矢澤は東京都豊島区立郷土資料館に保存された、手書きの本書確認の由を述べていた⁽⁴⁾。その平成25年の初夏、同館の特別な配慮によって矢澤が撮らせていただいたコピーが、偶然の奇遇というべきか足立の手元に届いて、明治初期における乳業の知られざる歴史の一端を、公表できるまでに事態は展開した。

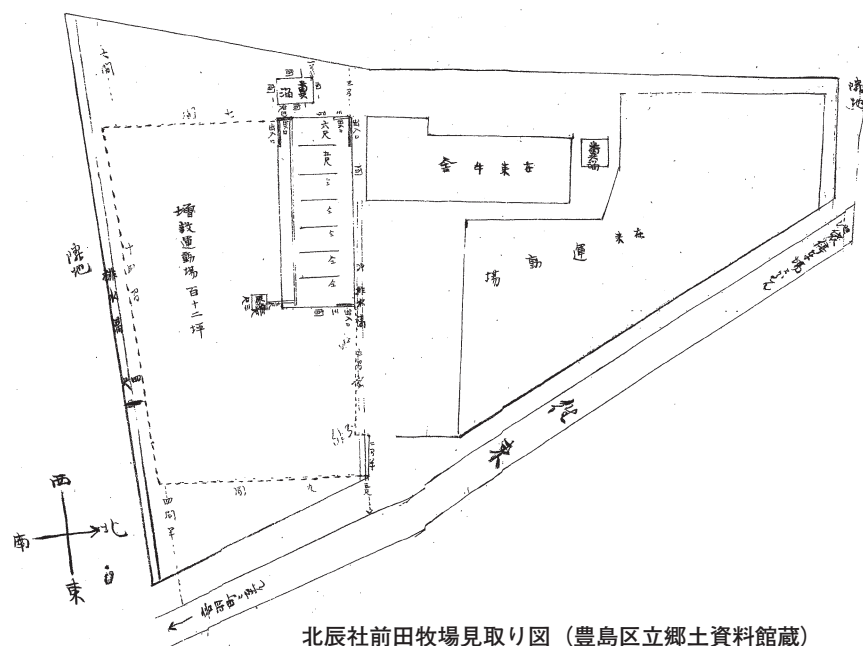
矢澤によれば、前田留吉の生・没年はそれぞれ天保11(1840)年3月9日・明治35(1902)年5月20日であり、牛乳搾取所設置願を提出した、明治15年3月5日生まれの息子前田甲次郎(没年：昭和26年)が、高田村雑司ヶ谷において前田牧場を経営し、明治42年8月3日に警視総監宛に提出した牛乳搾取所牛舎増設願は今も残ってい

る^(2b)。ちなみに、鬼子母神と思われる近景を右手にいた、雑司ヶ谷におけるこの北辰社牧場の残像は、豊島区立郷土資料館が作成した、90・特別展図録 ミルク色の残像 ―東京の牧場展―に再録されていることを付記する⁽⁵⁾。

甲次郎亡き後の雑司ヶ谷の北辰社牧場は、長男の栄一が引き継ぎ、昭和19～20年に廃業となった^(2c)。その後まもなく、栄一から前田栄一家の営業関係資料が、豊島区立郷土資料館へ寄贈され、当時に作成された前田栄一家寄贈文書仮目録に、No.27 豪商全傳 前田留吉氏傳が作成年月日 不明、差出人(作成者) 不明(手書き)、数量 1、形態 綴9丁、備考 縦27.7×横20.7センチメートルと記載されている^(2c)。極めて貴重な資料であるにもかかわらず作者、作成年月日は不明のままである。しかし、この著作の最終部は留吉の明治21年秋の奥州地方漫遊で止まっており、さらに明治22年以降の留吉の生き様が書き継がれるのを、予感させたまま中断していて、著作としての結びを欠いたままである。その理由はよく分からないが、未完のままに終わったと断ぜざるをえない。散見される本文中への追加書き込み、一字および文一部へのそれぞれ抹消および棒引き、棒引き部横への修正文記入などにも、その可能性の印が感じられる。

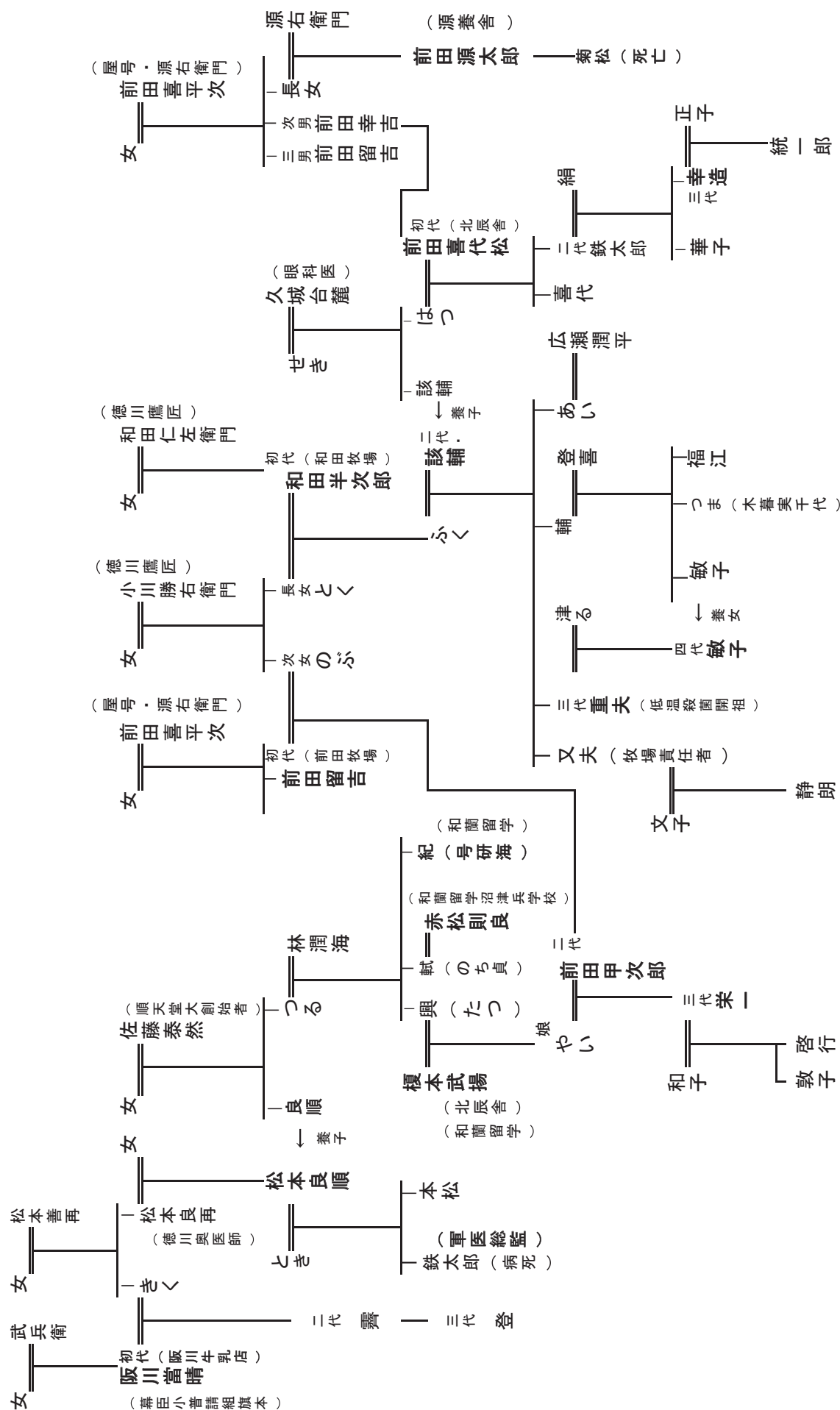
しかしながら、今回 この未完に終わった作品を本誌上に上げようとするのは、その歴史的意義にあるからである。纂述者金田耕平の記述した牧牛家の事歴は「概ね親しく 其の人に就て……其聴き得るに随い之を記載せるもの」となっているのに対して、「豪商全傳 前田留吉氏傳」の方は印刷されておらず、筆者不詳の手書きのままの状態の前田留吉家に保存されてきた。一方、日本牧牛家実傳 第一巻には、一流どころの牛乳舗の経営者13名の中に、当時の前田留吉を中心に、親族の前田源太郎と前田喜代松の2名も名を連ねている。

したがって、これら3名の方々は勿論、近親者の幾人かが「留吉君伝」を知らなかったとは考えにくい。筆者は不明であるけれども、この原稿に加えられた推敲箇所を字細に点検すると、原稿の主執筆者の文字の態様と、質的に異なる文字による推敲箇所が数か所に見られ、すくなくとも主筆以外に1～2名の身内の関係者が、推敲に加わっていたと推察される。幸いにも留吉の六男前田鎮五郎の文字が残っており、造詣の深い細野明義が筆跡鑑定をしたが、残



北辰社前田牧場見取り図 (豊島区立郷土資料館蔵)

図1 前田留吉に始まる牛乳搾取所経営者等の系譜



念ながら「留吉君伝」の執筆者のいずれとも一致しなかった。これらの原稿作成に連なった方々は、程度の差はあれ「留吉君伝」の内容をよく認知しており、検証機能を果たしていたと推察される。この事実は「留吉君伝」の内容の信憑性を高めることに寄与するにせよ、低める方向には働かなかったであろう。

東京における牛乳舗の開設に、留吉の人柄が大きく貢献したであろうことは前報に記述したとおりであるが、親族内においてもかれのカリスマ性[？]は発揮され、一族からも有力牛乳舗が数代にわたって継続するという、絆のネットワーク形成にも貢献したと思われる。複雑感を拭えないが、前田家から提供していただいた資料^(2d)を基にして纏めた系譜を図1(矢澤好幸原図)に示したので、これを参照にしながら理解を深めていただきたい。留吉を中心とした系統図であるため、彼の出自が二箇所挿入されているのを了とされたい。

ちなみに、留吉の出自等を含む経歴は前報の表1に示したので、重複しない事項は、本稿で適所に分散して触れるように努めた。この報文Ⅰ、Ⅱ中に当時を偲ぶ縁^{よすが}として挿入した写真は、すべて留吉から前田牧場三代目に当たる前田栄一の長女伊藤敦子のご好意により入手でき、転載許可をえたものである。前田栄一は留吉の五男で同牧場二代目の経営者となった前田甲次郎の長男である。ちなみに、留吉30歳代の写真は東京芝区西の久保神谷町の谷田部写真館撮影、ガラスのコップは前田牧場記念時に製作頒布されたもので、いずれも前田栄一所蔵。豪商全傳 前田留吉君氏傳表紙ならびに本文の写真の原本は、豊島区立郷土資料館所蔵となっている。

留吉の父親は前田喜平次(屋号は源右衛門)で、三男六女の子供があり、その三男留吉が日本初の牛乳舗を創設した。留吉の成功を目の当たりにした喜平次の子供らの中から、長女のぶの二男前田源太郎、二男幸吉の二男前田喜代松および三男留吉の五男前田甲次郎の三人が、留吉の後を追って牛乳舗を開設することになる。

一方、留吉の五男前田甲次郎(明治15年生まれ)は、留吉の創設した前田牧場を継ぎ、妻となった榎本武揚の



前田家に保存されている前田牧場ガラス

息女やいととの間に一男二女を残した。そして、それまで牧場をもちこたえてきた甲次郎は、昭和20年の米空軍による東京大空襲の影響によるためであろうか、留吉以来の前田牧場を廃業した。主として飼料不足と、徴兵によるための青壮年男子労働力払底により、乳幼児に必須だった乳牛が、維持困難となり、乳幼児への増加する需要に応えられず、急速に数を減らしていった。甲次郎の前田牧場廃業は、その意味で戦時下の日本における、暗い象徴的な出来事となった。かれの長男前田栄一(大正7年生まれ)の妻との間に一男一女が生まれ、栄一はこの長女伊藤敦子と同居している。矢澤に留吉の貴重な資料を教示してくださったのが、この伊藤敦子である。他方、留吉の八男前田勇吉は晩年の留吉と同居している。

Ⅲ 前田源太郎

まず、「日本牧牛家実傳」第一巻の前田源太郎氏實傳では、その出生地は留吉と同じく上總国(現千葉県)長柄郡関村である。かれの父は小高家の二男から前田喜平次の養子として入った前田源右衛門、母は留吉の長姉であって、留吉の甥^{おい}にあたる。二人の間に三男一女が生まれ、この二男が源太郎である。嘉永元(1848)年に生まれた。横浜太田町8丁目に留吉が開設した牛乳搾取所において、搾乳技術^{おんまわ}を習得している。それ以降、築地牛馬会社(初め商社)、芝櫻川町と、留吉と行を共にすることが多く、芝櫻川町店では牛乳搾取・牛肉と牛乳販売を営んでいた。この記述は一部に主張された前田の横浜不在説^{(6)、(7)}を否定する一つの証となろう。

さらに付け加えれば、「留吉君伝」の著者は不明であるが、留吉の五男甲次郎に牧場が伝えられ、留吉在世の時期に近縁の複数の人物が著述に関わったことは確かなので、有りもしない事実を書き加えることは不可能である。その意味からも「留吉君伝」に留吉の数年間の横浜在住の記事の信憑性は疑えない。

また、日本牧牛家實傳中の「留吉實伝」に記述を欠くが、その後の明治3年には、留吉の命により源太郎は奥州岩泉地方に赴き、乳用和牛57頭を買い求めている。明治6年に独立、神田美土代町に乳牛7頭、牝犢4頭で牛乳搾取・販売業を開設した。しかし、明治7年牛疫の流行によって、乳牛4頭を残してその大半を失い、さらに翌年の明治8年3月には、神田橋外からの出火によって家を全焼する悲運に会う。官に請うて神田橋外の空地にを借り、事業を再開した。それも束の間、二か月も経たぬうちに退去を迫られ、猿樂町^{さるがくちよう}の従弟 喜代松宅に転がり込む。しかし、それでもかれはこの事業への熱き思いを止めなかった。明治17年神田錦町に支店を開設するまでに発展し、明治19年12月 住居と乳舗を新富町2丁目に移転した⁽⁸⁾。大正9(1920)年に逝去、享年71歳で

あった。子供に恵まれなかったので、養子を迎えたが、最初の養子菊松は日露戦争で戦病死、ついで養子喜次も19歳で夭折した^(2b)。このため乳牛60頭及び施設等を中村牧場（後の森永製菓(株)に合併）に譲渡している。源太郎の牛乳舗はかれ一代で絶えた。

Ⅳ 前田喜代松

同じく留吉^{おひ}の甥に当たる前田喜代松についてはより詳しい記載が残されている。まず、相対的により詳しい若年期の喜代松を取り上げよう。喜代松は留吉と同郷の父前田幸吉と、留吉の姉とめとの間の次男として、嘉永6(1853)年に同郷で生まれた。幼くして留吉の幼児に似て豪胆不羈、両親の手に負えなかった。13歳の時、父を失い極貧の苦しみを味わった。この間、幕臣旗本用人の若村助六に就いて5年間農事を学んだ。ちなみに、旗本用人とは、幕府三役の家老、年寄、に次ぐ役職で事務会計を担当。家老がいない場合には家来の取締に当たり、300石以上の家から選ばれておかれた重職をこなした。

8歳で上京して、叔父の留吉を頼って訪ねると、故郷をでるのが早すぎると一度は上京を留吉に反対されたが、二度目に漸く許されて、芝櫻川町の留吉宅に住み込んだ。初めの3年間は「夙に起き半夜に寐て」、牛肉運搬の仕事を続けた。この行動を留吉は高く評価して、渡米に際して留守中の営業や家務一切を委ねた。喜代松は叔父の好意に報いるべく、猛烈に働き、第四代東京府知事由利公正に将来を嘱望されたほどであった。そして、留吉の帰国時に齎す百数十頭の牛の処分を委嘱され、築地に牧牛舎を設けて収容し事務を巧みに取り仕切った。府下にこれほどの多頭飼育例はなく、かれの乏しい飼養経験から、その成功を憂慮する人が一部にいたが、誤りを犯すことはなく、事務処理に長けたことを証明した⁽⁹⁾。

やがて喜代松の誠実な勤勉さを評価した由利公正らが、留吉と相談の上、結成された日本牧牛会社傘下の牛乳試験場と称した、二か所の牛乳搾取業所の支配人に就任する。ところが明治8年に会社は閉鎖となり、数頭の洋牛で神田猿楽町に牛乳店を開設、独立した。明治10年の日本最後の内乱、西南戦争による政府財政の危機を招き、牛乳業者に興亡が相次いだ。喜代松も明治10年 神田猿楽町に牛乳舗を出店独立したが、リンドルベスト流行によった7頭の洋牛中3頭を失い、大打撃を受けた。それにもめげず、乳牛を更に買い足して、以前に勝る復興を遂げる。ちなみに、猿楽町店開設についての記述は、「留吉君伝」にはない。

明治11年、独立後に開業した牛乳舗を、ドイツ人ヘルムに5千円で売却して負債を完済し、米国に渡った。滞米中 一回目には数十頭、二回目には180頭の洋牛を購入、東京へ送致して帰国している。牛込区に住み、製塩業を手掛けたが、失敗。明治21年に又もやカナダ、

米国、南米に旅して、種牛を購入。帰国後、在米中に知り合った田中鶴吉と組んで、洲崎八右衛門海岸に設けた十万余坪の塩田で製塩業を始めたが挫折。榎本武揚が、降伏・謹慎後、許されて雑司ヶ谷に元函館政権陸軍奉行大鳥圭介ら仲間を糾合して造った北辰社牧場(旧：高田町大字高田字鶉1455、現：雑司ヶ谷3丁目6、7番)を購入した。明治24年には大分県下玖磨郡に200頭の種牛を放牧している。明治21年には、カナダ、米国、南米に渡って種牛を購入、帰朝後に加糖煉乳製造に注力し、十数年後に雑司ヶ谷の牧場を開設した。飯田町本社の牛乳業と共に、隆盛を極めという⁽¹⁰⁾。

乳牛共進会で幹事の一員に選挙されたばかりでなく、喜代松は審査委員をも兼務した。麹町12丁目の八百屋梅澤の2女と結婚、2男1女を設けたが病死し、鹿児島県伊地知の息女と再婚している⁽⁹⁾。黒川鍾信によれば、明治13年10月和田牧場二代目の久城該輔の次姉久城はつが喜代松の妻になり、久城該輔は久城家から離れ、喜代松の紹介により和田牧場初代和田半次郎・とく夫妻の息女ふくと結婚し、和田牛乳の二代目を継ぐ、この二人の間に生まれた二男重夫が三代目で牛乳の低温殺菌を日本で初めて採用している⁽¹¹⁾。

また、矢澤のごく最近の調査によれば、和田とくの妹、のぶ(延)は前田留吉の妻となり、この留吉夫妻の五男甲次郎の妻やいが榎本武揚の息女であることは前述したが、この武揚の妻たつの母つるは、順天堂を営んだ佐倉藩藩医佐藤泰然の息女である。つるには泰然を介して義兄弟の松本良順がいた。良順は後に蘭方を専門とした幕医松本良甫^{りょうほう}の養子となって、松本姓を名乗ることになったからである。養子先の良順の養父松本良甫の姉か妹かが、明治4年に東京で先陣を切って赤坂の自宅に牛乳搾取所を開設した阪川當晴^{まさはる}の妻になったとされる^(2d)。

一方、「日本牧牛家実傳」第一巻の故阪川當晴氏實傳によれば、「妻きくは養家阪川宗太郎氏の養女にして實は幕臣大岡由之介の女なり」とあり、松本姓ではない。ところが、持病の肺患が重くなり業務に奔走できなくなった當晴に「親戚松本順氏を始めとし……数名の国手に診を乞い」とあり、良順(晩年の明治4年に順と改名)が阪川當晴と親戚関係にあったことが示唆されている⁽¹²⁾。良順が時の歌舞伎の名優澤村田之助を、美妓の集まった吉原の席に呼び出して、牛乳を飲ませたところ、田之助が美味しいといったのが、彼女らの口から多方面に伝わり、花柳界の大評判になった話は^(3b)、良順の牛乳への思い入れの深さを示して余りある。

昭和9年の十河一三による大日本牛乳史の第六編 乳業者名鑑の北辰社の初代 故前田喜代吉氏は^(3b)、日本牧牛家実傳 第一巻中の前田喜代松氏実傳⁽⁹⁾のほぼ縮刷版である。新奇記述には最後部の「(明治)18年佛國から分離器を購入しバターを製造した。これが本邦に於いて

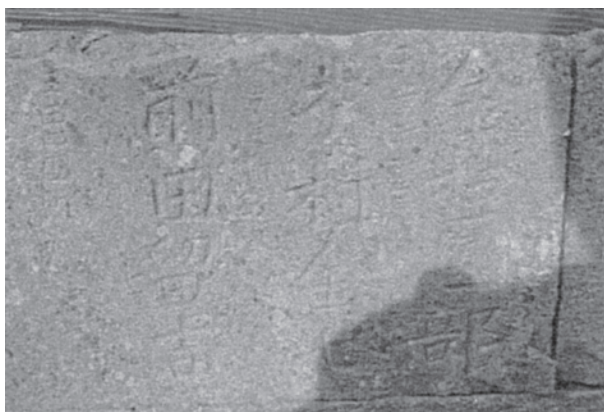
バターを製造した嚙矢^{こうし}である」とある⁽¹³⁾。

また、留吉の影響により牛乳搾取業を志した喜代松は、明治4年年 18歳の時、横浜海岸98番地の米国人チップマンから指導を受け、身に着けた堪能な語学力で内外の牧畜書を読み、明治5年には麻布滝土町の阿部邸において、洋牛3頭、和牛12頭で牧場経営を始めた。その後、由利公正らが開設した牧牛舎の支配人に就任、麻布三光町、京橋木挽町において牛乳搾取業を営み、明治19年には酪農の先駆書酪農提要の出版元も務めた。明治21年には再び海外に赴き、ホルスタインを導入、明治24年は大分県に牧場を開設、千葉県下安房郡の農家へ乳牛貸与をおこなったとの主張もあったといわれている⁽¹⁴⁾。大正2(1913)年に60歳で没した^(2b)。

V 「豪商全傳 前田留吉氏傳」公表の意義

横浜においてヨーロッパ人から搾乳技術を習得し、横浜で牛乳搾取所を開店した留吉の経験は、上京後政府の牛馬会社におけるかれの講習を通じて、幕府解体によって失職した武士たちの一部に伝えられた。かれらの中から牛乳搾取業者が輩出した明治前期の状況は、留吉が横浜で身に付けた牛乳搾取術、さらに突き詰めれば、横浜のヨーロッパ人の需要に応じて開設された、欧米人経営の牧場で働く牧夫らがもっていた、牛乳搾取術に由来することになる。

「留吉實伝」とほぼ同様に「留吉君伝」にも、オランダ人ペローの経営する牧場の牧夫イギリス人ペローから、留吉が搾乳術を習得したと記載されているが、これら兩人の横浜における存在証明がない。これに対してほぼ同時期に在留し、在住証明ができ、牧場経営をおこなった時期をもつ、国籍オランダ、英文登録名スネル兄弟を留吉の搾乳術習得の師とする説があり、両説のいずれを採るか決着がついていない⁽¹⁵⁾。最近、足立はペロー、ボーロからヘンリー、エドワード・スネルへの改名の可能性も考慮する必要もあろうかと考えている。いずれ



故郷白子神社赤壁の石の土台に「金拾圓部」前田留吉とある。同時に喜代松、源太郎も同額寄附している。（林氏提供）

にせよ、「留吉君伝」公表の意義の一つは、この留吉の横浜在留説の確かさを改めてなぞりなおしたことにある。

それに加えて指摘できるのは、平成20年来唱えられている、幕末の横浜における前田留吉牧場の存在の真偽を不明とする主張^{(6)、(7)}への、反証を提示したことであろう。すでに前田留吉氏實傳 第一巻の中で、前田源太郎が横浜において搾乳所を開店中の留吉に頼り、搾乳術を修業したとの記述⁽⁸⁾がおこなわれたが、その二年後の豪商全傳 前田留吉君傳では、留吉が横浜外国人居留地における搾乳業者の下での三年間の修業後、文久3年9月に太田町で牛乳搾取所を開設し、慶応元年に由利公正の要請に応じて上京するまで、牛乳搾取業を営んでいたとなっている。

また、「留吉君伝」中に酪農なる文字の使用を矢澤が指摘し、その箇所は三か所に見いだされた。大日本牛乳史の付録、乳業者名鑑の前田留吉氏傳中にも酪農の文字は見いだされない。酪農を表題に使用した著書の、日本での初登場は明治15年発行の翻訳書農業捷徑（発行所：中近堂）^{(16a)、(17)}の中で、訳者関澄蔵がdairyに対して「酪農トハ搾乳乳汁ノ取扱、酪脂、乾酪ノ製法等ヲ司ルモノナリ」とし、ついで明治19年刊行の著書酪農提要（著者：知識四郎、発行所：北辰社）であった^{(16a)、(17)、(18)}。太平洋戦争前に刊行された大日本牛乳史付録の前田留吉氏傳中にも酪農の文字はない。「留吉君伝」の時流に敏感だった執筆者が偲ばれる。

矢澤によれば、当時のこの発行所北辰社の社主は前田喜代松であった⁽¹⁴⁾。技術者としてばかりでなく、経営面においてもきわめて優れていた、留吉を始祖にして形成された前田一族の絆が、明治初期における東京乳業界発展の中核となったのは否めない。卓越した経綸感覚を備えていた当代無比の人物由利公正が、酪農立国^{つまつ}を指向して、後述するように自ら関わった生乳業展開に躍いたのも、優秀な牛乳搾取技術者の不在に拠るところが大きかったのではない。

なお、留吉が幹事長に就任し、表彰を受けた東京牛乳共進会の報告には、当時の府下牛乳搾取営業車の飼養乳牛頭数はおおむね1000頭、一カ年間に搾取した乳量はほとんど6000石に達し、そのいちじるしい伸びが記載されている⁽¹⁹⁾。明治21年5月23日には、健全が乳牛飼養と善良牛乳の会員への頒売を業とする牛乳倶楽部の設立願いを、留吉が8名の発起人の一人として名を連ね、京橋区長 林厚徳名をもって、東京府知事当に提出した⁽²⁰⁾ことを附記する。本倶楽部設立大意には、衛生的な牛乳生産を目指す趣旨が述べられており、日本牛乳生産上画期的な意義をもつ。その趣旨の要点は、市街から離れた広潤地に養牛場をおき、乳牛は米国から購入し、府下四か所に設置下した配達所へ朝夕毎馬車で急送し、配達所から迅速に配達する、配達牛乳容器の口栓上を封

減せよ。養牛場では獣医により疾病対策、化学者による乳汁検査して、需要に供すとなっている。牛乳搾取所と販売用の牛乳舗の分離は一挙に進んだと見られる。

しかし、まだ牛乳加熱殺菌はおこなわれておらず、依然として生乳の戸別配達・販売が継続されていた。そのような状況にもかかわらず国産の技術・器械の向上があり、これを利用した砂糖添加、低温加熱殺菌・濃縮工程を繰り返したコンデンスミルクが、残乳処理の一環として調製され、生乳の供給と共に、これを盛大にすべく、生乳の生産増が計画されている。当時の日本の牛乳処理技術に潜んだ矛盾というか、陥穽というべきか、それは暫時見逃されたままに経過した。母乳に代わる哺乳のほとんどを輸入コンデンスミルクに頼っており、その輸入量は増加の一途を辿っていた。その危惧感の表れであろう。

加熱殺菌牛乳の市場出現は、米国で調査してきた医師でヒト天然痘ワクチンの製造販売をおこなっていた角倉賀道による、明治32年における西巢鴨町巢鴨 愛光舎からの滅菌牛乳販売まで待たねばならなかった。

「都内唯一の都電の鬼子母神停留所から王子行に乗車して、大塚駅の一つ手前の向原停留所から新庚申塚停留所まで、大塚駅を挟んで南北の地域が、かつて「牛屋横町」とまで呼ばれた、中仙道にそった往時の北豊島郡西巢鴨町である。中でも西巢鴨町巢鴨の「愛光舎」は明治32年、2.6ヘクタールの敷地に円形サイロを有する二八棟の牛舎を持つ近代的牧場で、現在の西巢鴨中学の周辺一帯が牧場であった。ここの舎主・角倉賀道は医師であり、人の病気の天然痘のワクチンである牛痘の製造・販売をしていて、牧場経営と予防接種の普及に努めた人でもあった。」という⁽²¹⁾。壘装滅菌牛乳発売は従来の柄杓^{ひしゃく}等による生乳販売業に革命的影響をおよぼし、壘装滅菌乳への転換が急速に進行した。なお、低温殺菌牛乳の販売が昭和2年5月に和田重夫の率いる東京第一ミルクプラントから始まったのは前述の通りである⁽¹¹⁾。処理牛乳量の著しい増加により、第二次世界大戦後まもなくして、日本には連続式殺菌機が登場してくる。牛乳加熱殺菌技術の変遷に関する最新の解説には菊池幸治の総説がある⁽²²⁾。

また、牛乳搾取業の開始時点に関して、下岡蓮杖^{れんじょう}(1823～1914)を逸することはできない。横浜開港時の横浜には、居留地居住の外国人の需要に応える牛乳搾取業者が存在した⁽²³⁾。蓮杖もその一人であった。文政6(1823)年伊豆国下田中原町(現静岡県下田市二丁目)生まれで、留吉より一歳遅い。幼時から絵を好み13歳で江戸にでた。21歳で幕府御用絵師だった狩野堇川^{きんせん}に就いて絵を学ぶも、オランダから齎された銀板写真を見て心を奪われ、未知の写真技術の習得に転向した。この目的実現のため、米国人と接触しやすいと考えて、浦賀奉行所の足輕にな

る。やがて下田玉泉寺に設置された米国領事館に雇われ、横浜開港時の初代駐日米国弁意公使タウンゼンド・ハリスの通訳ヘンリー・ヒュースケンから、撮影形式を習うと共に、ハリスが飲む牛乳の入手法に関する技術を身に付けた。ついで横浜に移った蓮杖は英国のプロ写真師ジョン・ウィルソンから写真機材を譲り受け、18年間におよぶ苦勞と努力の結果、ついに写真美術を習得し、文久元(1861)年38歳の時、横浜市中区尾毛町に日本人最初の写真館を開店し、やがて成功を収め商業写真の開祖といわれることになる⁽²⁴⁾。

蓮杖が玉泉寺においてハリスが周囲の農家から牛乳を集めさせて飲用した事実を、「板張にして外国人がみても清潔だといわれる程掃除が行届いていた」「牛舎」で、「500ドルの金を工面して牛を飼い、ヒュースケンから教えを受けた搾乳方法により1斗5合位搾乳し3升位販売したようである」と矢澤は記述している^(16b)。蓮杖の牛乳販売店は太田町5丁目角、牧場は戸部谷戸にあった⁽²⁴⁾。「明治5年いまの西区赤門町に乳牛飼育場を、中区太田町5丁目付近に牛乳販売所をつくった」との記載もある⁽²⁵⁾。牧場の場所が両者で異なっており、移転の可能性も否定できない。留吉の牛乳舗開店は文久3年であり、蓮杖のそれは留吉より3年早い文久元年である。蓮杖が牛乳搾取業の祖と称されず、留吉ほどの乳業界への貢献を残していないのは、その活動期の短さのためであろう。

以上のように、本書豪商全傳 前田留吉氏傳は、日本牛乳の先駆者 前田留吉氏傳として、現在のところ最も充実し、時系列の観点からも新しい情報の盛られた前田留吉傳として歴史に残るであろう。

Ⅵ 由利公正の乳業への関わり

「留吉実伝」と「留吉君伝」とにおいて、前田留吉の生涯の師ともいえるべき一人の人物が、ほぼ同じ文脈の中に三回も登場する。民部郷由利公正と由利公の名前がそれである。前田留吉の先駆的牛乳屋人生への幻の仕掛人ともいえるべき、民部郷由利公正について略述しよう。

かれは福井藩御近習番の百石取りの三岡義知の長男として、文政12(1892)年に福井城下毛矢町で生まれた。石五郎と命名された。悪化した藩財政の立直しに尽力し、財政家として知られた。文久2年に八郎、明治元年に公正と改名し、明治3年には由利と改姓した。ちなみに、公正は「キミマサ」「コウセイ」とよばれるが、足立尚計の福井市立郷土歴史博物館研究紀要(5)によれば、「コウセイ」が正しいという⁽²⁶⁾。

ここではまず、かれの肩書きとして従来から酪・乳業界関係資料上に使用されてきた、民部郷の基となった民部省を取り上げる。徳川幕府の大政奉還により、嶺岡牧

場にいた数十頭の白牛の今後が、問題として浮上していた。丁度この頃に、幕府から明治政府に移管された嶺岡牧の将来に関して、八郎は基本的な論議に決定的な役割を演じた。幕府時代の牧には役人用、運搬用、農耕用の馬が主体で牛は少なく、余分は一般に払い下げられてきた。

「明治初年に於ける本郡(安房郡)畜牛の總ては、農役運搬用のものであったが、明治二十年頃より乳肉の需用により、少数の乳牛が飼育されるに至り、爾後年々交通の便開けるに及び、又新式農具の普及により、農役運搬用の畜牛は漸次其の必要は失われ、反対に乳肉の需要は増加し、農役用牛は殆ど少数となり、乳用牛が之に反して非常なる増加をなしたのである。而して本郡畜産業の中心はこの乳用牛にあるのである。」とあるように、明治初期の数少ない牛も農役用であった。

安房牧への乳牛の登場は、明治十年代の半ば以降である。明治14年竹澤彌太郎が米国産短角種牡牛1頭を飼養種付けに使用し、山野井與惣右衛門らが短角牝牛を、明治22年嶺岡畜産株式会社がホルスタイン種及短角種を、さらに翌明治23年の竹澤が短角種を輸入したことによって乳牛飼育が始まった。最初の畜牛統計となった明治44年のデータによれば、乳牛頭数は587頭、畜牛總は14500頭であり、大部分が農役牛であった。乳牛頭数は大正5および8年に、それぞれ4251および7262頭へと急増した^(27a)。この急増にはヨーロッパ大戦勃発のため、乳製品輸入が途絶による、国内の牛乳需要の拡大が関係しており、戦後の大正11年に4341頭に逆戻りし、漸増。大正15年に5293頭、昭和3年に5425頭となった。

明治18年北條町の秋山正が、自家飼養の分娩後の牛から搾乳した牛乳を販売したのが、本郡の市乳販売の最初であり、明治36年に東京における牛疫流行による市乳不足の際には、一日2ないし3斗の牛乳を館山港から汽船による輸送を三ヶ月間にわたり実施した。東京への送乳は以後しばらく中絶したが、大正9年5月から安房畜産株式会社が一日約2ないし5、6石を限度として、ついで同年6月3日から東京菓子株式会社練乳部(後の明治製菓株式会社)が客車便鉄道による東京への牛乳輸送を開始、同月6日から発動機船による輸送を挟んで、同年9年16日からは市乳専用貨車に変わった。市乳に回した後の残乳は練乳製造に向けられた^(27b)。

幕政時代のこの牧の所轄体制の最前線は、現場牧の管理責任者の牧士^{もくし}にあり、かれらの所轄牛種への時代の影響は無視できない。牧士の所轄組織は時代により変わり、寛政5年と慶應2年の組織を、牧士から上の職名を將軍まで遡ると、それぞれが野馬方、御小納戸頭取(野馬掛)、若年寄と野馬方、騎兵奉行、陸軍奉行、陸軍総裁であった⁽²⁸⁾。「留吉君伝」に「徳川氏其政權を奉還し明治の御代となるに及んで民部省……の吏員未だ酪農の何たるを

悟らざるものあり。彼の白牛なるものは実用を致すに足らざれば之を屠殺するに如かずと論ずるものあり。民部郷由利公正君独り其の議を廢し、更に数千円を投じて数十頭の良牛を増加して盛に搾乳を試み、世用に促さざると雖も搾乳術精しからざるを以て其の目的を達する能はず。由利公大に焦慮せらる。偶々横浜に前田留吉あり。夙に酪農法に熟達せりと報ずるものあり。乃ち神奈川県に照会して留吉召さる。即ち氏がひと度火災に会ふて更に太田町五丁目に搾取所を開きし当時なり」とあるのが、その箇所である。これでは民部郷由利公正の時代に民部省があったと取られるのは当然である。しかし、残念ながらそれは違う⁽²⁹⁾。ここでは別の角度からの見解を加えた考証を述べておきたい。

現代の日本人になじまない民部省は延長5(927)年に奏進された、当時の日本の政治体制だった律令体制の最終段階を示したとされる「延喜式」の卷二十二・二十三に初めて表われる⁽³⁰⁾。国の戸籍・計帳・班田収授法という行政の基本事項を主管する官庁「民部省」で、主計・主税の部門から構成され、近代まで存続した。民部省の長官が民部郷^{たみのつかさ}だった。

民部卿^{みんぶきやう}は、古代から近代までの日本にあった官職で、民政をつかさどる民部省の長官である。ちなみに、政府所有物を収納する大蔵省も当時から存在していた。ところが律令制に変わって登場した長期の摂関制が倒れ、明治政府下の官制に大改正により、民部官は改組され、明治2(1869)年7月8日に民部省が設置された。初代民部郷はすでに現在の國務大臣相当の議定職に就いていた松平慶永^{よしなが}(前福井藩主)、任期は明治2年7(8)月8(11)日～明治2年8月24日(括弧内数値はそれぞれ大蔵大臣就任月日)、二代が伊達宗城^{むねなり}(前宇和島藩主)、同じく明治2(1869)年9月12日～明治3年(1870)年7月10日、三代が最後の民部郷大木喬任^{たかとう}(佐賀藩藩士)、同じく明治3(1870)年7月10日～明治4(1871)年7月27日、大木の後の大蔵大臣大久保利通^{としみち}は、同じく明治4(1871)年6月27日)～明治6(1873)年10月12日、在任中の明治4(1871)年7月27日に民部省が大蔵省に合併されて廃止となっている⁽³¹⁾。ところが、二代目までは大蔵省兼務の民部大蔵省と称され、民部郷が大蔵郷を兼ねた期間が介在しており、民部郷のみの期間は^{たかとう}大蔵大臣就任以前の一ヶ月ばかりの松平慶永と、一年弱の大木喬任との約一年一ヶ月間にすぎない。民部郷に由利公正の名がないのは勿論だけれども、由利の元上司であった福井藩主松平慶永が一月ほど民部郷を勤めていた。すでに由利は慶永と同じ頃、徴士参事に任じられており、福井藩の藩財政立直しへの貢献により令名の高かったかれは、慶應3年12月23日に御用金穀取扱取締を命じられていた。

もともと徳川幕府には課税組織がなかった。旗本らへの給付石数を含めて約800石(内自前は約400石)の領地

を収入源としていた。大政奉還から幕府領地が外れていたため、慶應3年10月、大政奉還によって統治権を任された政府には、自前領地からの課税権で政権を維持できるほどの金が入らず、従前からの御料金3万石に頼るに過ぎなかった。「なにしろ朝廷側は日々職員に給する弁当代にもこと欠く有様であった」というから、国庫の惨状は酷かった⁽³²⁾。

折からの日本開国への世界の列強からの強大な圧力を前にして、疲弊した幕府に代わりうる対抗勢力の結集による、新政府樹立に動いていた土佐藩脱藩の志士坂本龍馬が、慶應3年11月2日、宿泊中の福井市照手1丁目の^{たばこや}で、改名した由利八郎と会談した。幕政の最後を迎え、崩壊後の政権を見据えようとして行われた会談は、朝8時から夜半の12時におよんだ。その前日の11月1日、龍馬には藩主春嶽^{しゅんがく}に会って、八郎の新政府出仕を要請するほどの周到さを見せた⁽³³⁾。新政府の金倉に金がほとんど残っていない。^{きっせん}喫緊の大問題をかかえていた龍馬に、天下の財政通由利に会わねばならぬ理由が、充分にあったといわねばならない。八郎は世界における日本の政治的状况を、龍馬は破綻状況下における国家財政の改革について、それぞれ思いを深くしたに違いない。別れた龍馬は、13日後の11月15日午後9時過ぎ、宿泊に使っていた京都三条下がるの、醤油商近江屋二階で、暗殺されてしまった。享年34歳であった。龍馬自らが官僚幹部要員として推挙していた、由利の新政府への船出を見ることは、遂に叶わなかったのである。

八郎が太政官札といわれた紙幣の発行や地租改正などの施策によって、瀕死の政府財政の近代化に道筋をつけ、民部省の発足より二ヶ月ほど前の、明治2(1869)年5月15日に参与職を辞している。民部卿由利公正が歴史的にありえないのは、上記の諸事実から明らかである。徴士参与の徴士は、とりわけ学徳に優れて召し出された人物の呼称であり、かれに相応しかつたといえる。その後、官を辞し故郷福井に帰っていた由利公正は、廃藩置県後の大人事異動時に民部卿^{ぼってき}拔擢の対象になったらしいが⁽³⁴⁾、政敵大久保利通の反対で実現せず、東京府知事として中央に復帰している。ほぼ一年間銀座の不燃化や道路拡幅等に、かれは業績を残した。

退官後の明治6年に京橋区本挽丁の自邸に数十頭の洋牛を飼い、前田留吉、^{だんのたくじ}團野卓爾、今村坦、山崎平助を迎えて搾取所を開設したが、経営に失敗。その後、明治9～14年の借用契約のもとで、東京板橋の旧金沢藩邸跡地9万余坪に洋牛数十頭を今村坦の管理する牧場等を経営するとともに、主要農産物の耕鋤による生産費調査を実施した⁽³⁵⁾。

また、大日本牛乳史に「同氏は明治9年米国に乳牛を求めるために牛の分る人を探した結果、横浜で馬喰^{ばくろう}を業とせられた前田留吉を招いて、之に人を附けて米国に乳

牛の購入に洋行せしめた。前田留吉氏が買って来た牛は88頭で民間で多数輸入したのは此の時が初めてである。」との記述がある^(3c)が、記述の根拠となる出典が不明である。この明治9年の前田留吉渡米の記述は、かれの自伝「留吉實伝」、「留吉氏伝」、「留吉君伝」に見当たらず、牛疫大流行の年に洋牛輸入の必要性があったのかを考慮すると、信憑性に問題が残るように思われる。逆に大日本牛乳史の第四編市乳の起源には、上記3種の留吉自伝に記載の、由利の賛助をえて実行された、明治7年5月に横浜を出航して米国の有名牧場を見学し、優れた洋牛115頭を携えて帰国した留吉の記事がない。これには大日本牛乳史の本編の著者、十河一三に原因がありそうである。

明治18年に勲二等旭日重光章、同20年に華族、子爵となり、同23年貴族院議員に当選、同27年有隣生命保険株式会社社長に就任、同34年正三位、同39年勲一等、同42年4月28日に逝去。当時としては異例の長寿とされる享年81であった。従二位、旭日大綬章を授与された。品川の海晏寺^{かいあん}に眠っている⁽³⁶⁾。

資料探索のご配慮をいただいた高田馬場亮朝院住職成原要潤氏、前田留吉の四代目の子孫伊藤敦子氏、豊島区立郷土資料館の方々に深い謝意を表したい。文中の氏名敬称は省略させていただいた。

引用文献

- (1) 金田耕平(1886): 前田留吉氏實傳、pp15-16、日本牧牛家實傳、丸屋善七、東京
- (2) 矢澤好幸(2013):
 - a; 私信、7月21日(同封: 豪商全傳 前田留吉氏傳(自筆原稿、牧場見取図付き)、細野明義解説 豪商全傳前田留吉氏傳(平成25年7月19日)
 - b; 私信、8月15日(同封: ミルク色の残像、牛乳搾取所設置願や牛乳搾取所牛舎増設願等の写真、由利公正傳等)
 - c; 私信、8月29日(同封: 東京乳牛共進会報告、牛乳俱樂部設立認可願)
 - d; 私信、9月24日、12月7日(留吉らの系列店の組織情報)
- (3) 牛乳新聞社編集、編集発行人 十河一三(1934):
 - a; 乳業者名鑑、大日本牛乳史 付録、pp1-4
 - b; 大日本牛乳史、pp231-234、c; p228、牛乳新聞社
- (4) 矢澤好幸(2010): 私信、10月19日(東京都豊島区立郷土資料館にて、展示された手書きの豪商全傳前田留吉氏傳を印象深く見たと記述)
- (5) 豊島区立郷土資料館 編集(1990): '90/特別展

- 図録 ミルク色の残像 ―東京の牧場展― (1990. 8.16～10.14)、pp18-19、
- (6) 斎藤多喜夫 (2008)：日本近代乳業史の端緒」をめぐって、酪農乳業史研究、No.1、pp24-25
- (7) 斎藤多喜夫 (2010)：日本近代乳業事始め ― 前田留吉の牧場は存在したか？、酪農乳業史研究、No.4、pp1-4
- (8) 金田耕平編集 (1886)：前田源太郎氏實傳、日本牧牛家實傳 第一巻、pp1-6、(注意：全編にわたる通し頁ではない)、丸屋善七
- (9) 金田耕平編集 (1886)：前田喜代松氏實傳、日本牧牛家實傳 第一巻、pp1-14、(注意：全編にわたる通し頁ではない)、丸屋善七
- (10) 北辰社々主前田喜代松君傳 (1911)：牧畜雑誌、307号、pp55-57
- (11) 黒川鍾信(1998)：東京牛乳物語 和田牧場の明治・大正・昭和、pp96-97、pp107-110、pp190-198、新潮社
- (12) 金田耕平 (1886)：故坂川當晴氏實傳、pp4-5、日本牧牛家實傳、丸屋善七、東京
- (13) 牛乳新聞社編集、編集発行人十河一三 (1934)：北辰社の初代 故前田喜代松氏、乳業者名鑑、大日本牛乳史 付録、pp10-11、牛乳新聞社
- (14) 矢澤好幸 (2009)：乳とヒトとの歴史、デイリージャパン、10月号 (第54-第12号)、pp99
- (15) 足立 達 (2013)：幕末から明治初期の横浜における生乳飲用とアイスクリーム摂取の日本人への伝播、酪農乳業史研究、No.7、pp20-27
- (16) 矢澤好幸 (1988)：乳の道標、a；pp52-57、b；pp84-88、株式会社酪農事情社、東京
- (17) 細野明義 (2010)：牛乳・乳製品の栄養に関する啓発の歩み、酪農乳業史研究、No.4、pp5-12
- (18) 矢澤好幸 (2010)：日本の酪農乳業史文献目録 (抄) (明治編) (畜産・飼料・牛病・牛・山羊・乳製品)、酪農乳業史研究、No.3、pp35-39
- (19) 木村久米丸編集兼発行人 (1886)：東京乳牛共進會報告、東京乳牛共進會蔵 版、pp1-2 (緒言)、丸屋善七
- (20) 小野寺大三郎 外7名 (1983)：牛乳俱樂部設立認可願、東京市史稿、市街編、第74号、pp305-309
- (21) 植松文雅 (2003)：牛の物語 (8)、やぶのやぶにらみ 第35話、動物ジャーナル43、動物虐待防止会、http://www.ne.jp/asahi/gpca/tokyo/Mook/Article/41_Yabu.html
- (22) 菊池幸治 (2013)：原料乳の殺菌方法の変遷と特徴、日本酪農科学会 創立60周年記念誌、pp38-49、日本酪農科学会
- (23) 横浜開港資料館 (1998)：横浜外国人居留地、pp52-53、株式会社有隣堂、東京
- (24) ―商業写真の開祖 下田にあり― 下岡蓮杖 (1823～1914)： <http://www.ropeway.co.jp/renjou/renjou.html>、(2013)
- (25) 吉田 豊、雪印乳業株式会社広報室編 (1988)：牛乳と日本人、pp78-84、新宿書房
- (26) 三上一夫 (2001)：由利公正 その人物論、三上一夫、船澤茂樹 編：由利公正のすべて、pp9-29、新人物往来社
- (27) 秋山六三郎 編 (1928)：安房郡畜産史、a；pp5-18、b；pp82-97、安房郡畜牛畜産組合
- (28) 沼津市明治史料館 (1991)：愛鷹牧 江戸幕府の牧、pp10-11、沼津市明治史料館、沼津市西熊堂
- (29) 足立 達 (2012)：日本において最初の公定乳脂肪率容量式測定法となったマルシャン法採用の史的背景 (1)、漢和薬種問屋からの理化学ガラス商分化と牛乳飲用事始め、酪農乳業史研究、No.6、pp21-30
- (30) 虎尾俊哉 (1969)：延喜式、pp144-167、吉川弘文館、東京
- (31) 日本の大蔵大臣・財務大臣一覧：<http://ja.wikipedia.org/wiki/日本の大蔵大臣・財務大臣一覧>
- (32) 尾崎 護 (2001)：由利公正と維新財政、三上一夫、船澤茂樹 編：由利公正のすべて、pp123-143、新人物往来社、東京
- (33) 木村幸比古 (2001)：由利公正と坂本竜馬、三上一夫、船澤茂樹 編：由利公正のすべて、pp107-116、新人物往来社
- (34) 尾崎 護 (1995)：経綸のとき 小説・三岡八郎、pp492-493、東洋経済、東京
- (35) 三上一夫 (2001)：由利公正と明治前期殖産策、三上一夫、船澤茂樹 編：由利公正のすべて、pp180-189、新人物往来社
- (36) 足立尚計 (2001)：由利公正年譜、pp228-232、三上一夫、船澤茂樹 編、由利公正のすべて、pp180-189、新人物往来社

解説

豪商全傳 前田留吉氏傳 (解説)

解説 足立 達¹⁾、細野 明義²⁾

1) 東北大学名誉教授、2) 日本乳業技術協会代表理事

豪商全傳

前田留吉君傳

前田留吉氏ハ上總国長柄郡関村ノ農源右衛門ノ三男ナリ天保十一年子年三月其ノ郷ニ生ル幼ニシテ奇偉常ニ群童ヲ指揮シテ戦陣ノ遊戲ヲ為ス嘗テ文学ヲ事トセス長スルニ及ンテ豪磊不羈父母其ノ制御シ難キヲ察シ之ヲ追放シテ再ヒ家ニ歸ルヲ許サス之レヨリ友人ニ寄リテ傭夫ヲ業トス年十八偶々感スル所アリ奮然郷ヲ辞シテ江戸ニ来リ老中脇坂中務太夫ノ邸ニ入り中間トナル之ニ仕フル基年去テ横濱ニ赴キ堺屋富右衛門ノ為ニ傭ル初メ氏ノ横濱ニ至ルヤ身ニ執ル可キキノ業ナク又タ身ヲ托ス可キノ友ナシ乃チ雇人請宿ニ就キ宿主ニ告テ曰ク余ハ農家ニ成長シ幼ヨリ一ニ筋骨ヲ勞セシヲ以テ商盛ノ之ノ地ニ来リテハ常ニ自ラ膂力^{りよく}(¹⁾ノ餘アルヲ覺フ希望ハ予ヲシテ使役最モ嚴酷ナル家ニ雇ハルルヲ得セシメヨト既ニシテ宿主氏ニ言ッテ曰ク当港ニ菓子舗アリ我家ニ就テ人傭ハントスルコト久矣⁽²⁾予其ノ使役ノ甚ダシキヲ知ルカ故ニ身体強壯ノ者ヲ撰テ同家ニ到ラシムコト数次ナリト雖モ皆ナ其ノ勞役ノ酷キニ堪エス勿々⁽³⁾辞シ去テ能ク期日ヲ全フル者アルナシ此家ニ意ナキヤ否ヤト氏欣然トシテ其ノ家ニ雇ハル即チ菓子舗堺屋ナリ堺屋ノ主人氏ノ筋骨ヒトニ優レタルヲ見豫^{あらかじ}メ一日ノ量ヲ定メテ餉ヲ捏ラシム氏夙ニ起キテ業ヲ執リ常ニ正午ニ至レバ全ク其ノ定量ヲ捏シ了ル定量既ニ了ルヤ輒チ暇ヲ乞フテ清水ヲ汲ミ之ヲ横濱吉原ノ遊郭ニ售^う(⁴⁾ル吉原ノ遊郭ハ元来清水ニ乏シキヲ以テ飲料水ハ總テ水屋ノ供給ヲ須タサルヘカラス氏自ラ慮ッテ普通ノ水屋ヨリ更ニ大型ノ水槽ヲ造リテ満々之ニ盛ル家々其ノ廉ヲ賞シ争フテ之ヲ買フ偶々一樓婦ノ水ヲ呼フアリ即チ擔ヲ卸シ其ノ指揮ヲ受ケテ之ヲ其ノ厨ニ運び備フル所ノ水瓶ニ移サントス忽チ過チテ瓶外ニ迸流^{りゅう}セシム一娼婦之ヲ見テ嘲ッテ曰ク何等ノ粗忽人ゾ瓶周ヲ掃除シテ去レ嗚呼肥大漢其智不滿體トハ汝ノ謂乎ト氏之ヲ聞テ慨然タリ

當時我國ノ外交漸ク開ケ洋人ノ寄留スルモノ益々多シ氏潜ニ其ノ骨格長大ニシテ筋肉逞シク容貌勇壯ニシテ有為ノ氣象ニ富メルヲ見テ以為ク我國ノ氣候如斯ニシテ尚其ノ人ノ矮小^{わいしょう}羸弱^{りやくじやく}(⁵⁾彼ニ及ハサル遠キモノハ孰ゾ肉食ト穀食ノ差之ニ然ラシムルニ非ラザラルヤ苟モ今世ニ生

マレテ身ヲ立テ家ヲ興サント欲スルモノハ我国人ヲシテ肉食セシムルノ方ヲ図ルヨリ宜シキハナシ予今ヨリ肉牛肥養ノ方及牛乳搾取ノ術ヲ窮メンモノト深ク決心スト虽モ、我ガ邦人ノ能ク酪農法ヲ解スルモノナク特ニ漂泊ノ身ヲ以テ之ヲ如何トモスヘカラス当時居留地ニ蘭人ベロー氏ナル者アリ英人ボーロ氏ヲ傭フテ搾乳ヲ業トス是ニ於テ乎百方紹介ヲ求メテ遂ニベロー氏ノ傭夫トナリボーロ氏ニ就ク肥養及搾乳ノ術ヲ修ム是レ實ニ文久元年八月ニシテ時ニ年二十歳ナリ居ルコト三年稍々其ノ術ニ達シタルヲ以テ曩ニ千辛万苦ノ間ニ蓄積シタル少許ノ資金ヲ以テ和牛若干頭ヲ求メ同所太田町八丁目ニ牛乳搾取所ヲ開^{けだ}シ我國人ノ牛乳搾取ヲ營業セシハ實ニ氏ヲ以テ嚆矢トス時ニ文久三癸亥九月ナリ然ルニ本邦人ノ人文未タ進マス牛乳ヲ飲用スルモノ至テ少ク其ノ搾取スル所ノモノハ概ネ居留外国人ノ需用ニ供スルヲ以テ外人ノ為メニ壟斷^{ろうだん}(⁶⁾セラルルコト多ク氏ノ商店久シク隆盛ナル能ハス慶應元乙丑ノ年十月港内偶々火ヲ失シ氏ノ搾乳所モ亦類焼ス氏纔ニ養フ處ノ乳牛數頭ヲ以テ太田町五丁目ニ立退キ此所ニ復タ搾乳所ヲ設ケリ之ノ際羣瓢屢々⁽⁷⁾定シト虽モ敢テ阻喪スルコトナシ一日歎シテ曰ク人ノ身ヲ立テ業ヲ起サントスル其ノ困難ナル如斯予ニシテ之ヲ忍ハスレハ誰カ復タ之ノ国益ヲ起スモノアランヤ之ノ困難アルハ益々力ヲ盡ササルベカラサル所以ナリト当時徳川將軍大政ヲ奉還スルノ議アリ人心汲々^{きゅうききゅう}流離顛沛^{てんぱい}(⁸⁾ノ士人又少ナカラス偶々幕臣鷹匠小川勝右衛門ノ二女信女横濱ニ徘徊ス氏ニ逢テ其ノ凡人ニアラサルヲ察シ敢テ掃除ノ勞ヲ取ランコトヲ乞フ氏又欣然トシテ曰ク国乱レレハ良臣ヲ思ヒ家究セハ良妻ヲ思フハ時ノ古今ヲ問ハサルナリ汝今予カ為メニ掃除ノ勞ヲ取ラントス誠ニ糟粕ノ妻ト云フヘシ即チ婚儀ヲ挙リ一日屋根破レテ雨ノ座上ニ降ルアリ夫婦共ニ雨戸ヲ擗ケテ僅ニ之ヲ防ク一日出ラントスルニ衣裳ノ着クヘキモノナシ婦人其ノ着衣ヲ脱シテ僅カニ之ニ給ス氏尚泰然タリ

是ヨリ先幕府ノ命ニヨリ白牛數十頭ヲ房州峯岡ノ牧場ニ養ヒ之ヲ雉子橋ノ御厩ニ曳キ来リテ搾乳ノ用ニ供シ又白牛酪ヲ製ス徳川氏其政權ヲ奉還シ明治ノ御代トナルニ及ヒテ民政部ニ属セラル當時ノ吏員未タ酪農ノ何タルヲ悟ラサルモノアリ彼ノ白牛ナルモノハ実用ニ致シテ足サレハ之ヲ屠殺スルニ如カスト論スルモノアリ民政部由利

公正君⁽⁹⁾獨り其ノ議排シ更ニ數千円ヲ投シテ數十頭ノ良牛ヲ増加シテ盛ニ搾乳ヲ議シ世用ヲ促ササルト虽モ搾乳ノ術精シカラザルヲ以テ其ノ目的ヲ達スル能ハス由利公大ニ焦慮セラル偶々横濱ニ前田留吉アリ夙ニ酪農ノ法ニ熟達セリト報スルモノアリ乃チ神奈川縣ニ照會シテ留吉ヲ召サル即チ氏カータバ火災ニ會フテ更ニ太田町五丁目ニ搾乳所ヲ開キシ當時ナリ氏召ヲ聞テ以為ク政府ニシテ既ニ意ヲ牧畜事業ニ注カルアルハ實ニ余カ素志ヲ達スヘキ時機ノ至レルナリ之ノ機失フヘカラスト即チ召ニ應シテ東京ニ來リ雉子橋^{きじ}御厩^{おんまや}に在リテ專ラ搾乳ノ術ヲ教授ス明治二年雉子橋御厩廢セラレ更ニ築地ニ牛馬会社ナルモノヲ置カル氏命ヲ受ケ又此ニ移リ猶ホ其ノ事ヲ管理ス而メ我國ノ人文漸ク進ミ乳肉ノ需用將ニ大ニ隆盛ナラントス即チ牛馬会社ヲ辭シテ自ラ牛乳店ヲ芝西ノ久保櫻川町ニ開ク時ニ明治四年十一月ナリ氏以為ク乳汁ノ純良ナルヲ得ント欲セバ豫メ牛種ヲ撰擇セサルヘカラスト今ヤ日進ノ御代ナリ豈牧畜家ノミ因循スヘケンヤト即チ元來養フ處ノ乳牛ハ悉ク売却シテ將ニ良種牛ヲ米國ヨリ購入セントスルヤ偶々牛疫流行シ曩キニ氏カ賣ル處ノ乳牛モ又本病ニ罹リシヲ以テ急チ氏ハ病獸賣販ノ嫌疑ヲ被リ繫獄ノ不幸ニ逢^{ほうぐう}遇⁽¹⁰⁾セシモ重日ナラス青天ノ身トナリテ放免セラル時ニ明治六年ノ秋ナリ氏潜ニ以為ク我レ苟クモ眞ニ牧業ノ隆盛ヲ計ラント欲セハ必ス海外ニ渡行シテ彼レカ技術ノ蘊奧ヲ探リ且ツ其ノ撰擇純良ノ畜種ヲ携エ來ラスレハアラスト先ツ由利公ニ議ル公欣然之ヲ贊助セラル即チ明治七年五月終ニ汽船ニ搭シテ横浜ヲ解纜⁽¹¹⁾シ米國桑港ニ達シタルハ六月中旬ナリ蓋シ牧畜事業ノ為メ海外ニ航行シタルハ氏ノ之ノ行ヲ以テ第一便トナス是レヨリ「カリホルニヤ」「サクラメント」ノ如キ各地ヲ歴遊シテ或ハ学舎ニ就テ畜種撰擇肥養管理等ノ方ヲ聞キ或ハ実業家ニ就テ搾乳製酪及牧場ノ模様等ヲ叩キ為メニ大ニ得ル處アリ此年十一月純良種牛一百十五頭ヲ携エテ歸國ス之ヨリ氏ノ名聲漸ク高ク從テ畜種改良ノ志想ヲ渙發シタルハ實ニ氏ノ力ナリトイフ次テ十二月芝区新錢座町十六番地ヲ据シテ茲ニ転居シ良種牛ノ売買ヲ專業トス

明治九年ヨリ十年ニ亘リリンドルベストト稱スル牛病流行シ氏ノ飼^{とろ}フ處ノ乳牛又五十七頭ヲ斃ス同十年秋丹羽藩⁽¹²⁾ノ旧大參事平山敏ナルモノヨリ乳牛二十六頭ヲ買ヒ受ケ將ニ之ヲ引キ取ラントスルヤ其ノ處有主ノ平山ニアラサリシヨリ急チ一場ノ訴訟トナリ遂ニ嫌疑ヲ受ケテ又入獄ス然レトモ平ノ委托物届費ノ罪ヲ以テ論セニルヤ氏ハ無罪ヲ以テ放免セラルコノ先マタ貶^{へん}職^{しよく}⁽¹³⁾ニ逢ウテ家財ヲ蕩盡ス之ノ災害併ヒ至ル今日ニ處シ從容トシテ傍人ニ語テ曰ク天下何事カ不測ノ災害ナカラン若シ夫レ災害ヲ恐れ辛苦ニ堪ユル氣力ナクハ初メヨリ事業ニ就カサル勝レルニ如カサル也ト

明治十二年五月又其甥前田喜代松氏及米國人キ氏ヲシ

テ種牛買入ノ為メ米國ニ赴カシム蓋シ我國ノ牧畜將ニ隆盛ナラントスルニ際シ尚良種牛ノ不足アルカ為メナリ而メニ氏ハ數月ナラスシテ純良種牛三百余頭ヲ購^{あがな}ッテ歸國ス

明治十四年秋彼ノ東洋ノロビンソンヲ以テ一時世上ノ賞譽ヲ搏セル事業家田中鶴吉氏カ將ニ小笠原嶋ノ中ノ嫁嶋ヲ以テ牧場トナサントスルニ際シ氏ニ函テ其ノ補助ヲ求ム氏之ヲ憫テ洋種牛五頭ヲ貸与ス其ノ後チ田中氏カ小笠原嶋ヲ辭シテ再ヒ米國ニ航渡スルヤ歎シテ曰ク名譽ヲ好ムモノハ遂ニ大業ヲ遂ケサル乎ト

明治十八年十二月忽焉トシテ信女簀^{さく}ヲ易ス⁽¹⁴⁾初メ信女ノ同氏ニ入ルヤ共ニ糟粕ヲ嘗メ千年万苦ヲ經テ遂ニ今日ノ名譽ト財産ヲ致ス然ラハ即チ其ノ交情ノ膠蜜ナルヲ得テ間然スヘカラスト氏常ニ語テ曰ク天ハ素ト一夫一婦ヲ以テ人ニ命ス然ルニ其ノ資財ト位置ノ勢力ヲ藉テ濫リニ婦女ヲ恥カシム思ワサルノ甚タシト云フヘシ蓋シ氏ヲシテ之ノ語アラシメタルハ信女貞操ノ感セシムル處ナリト云フ然ラハ即チ之ノ喪ニ逢ラン悲惜ニ堪エス為メニ盛ニ葬儀ヲ整ヒ遂ニ高田馬場ノ亮朝院⁽¹⁵⁾ニ葬リ中道院妙成日実信女ト戒名ス信女性貞節慈善為メニ給助ヲ働クモノ少ナラス故ニ其ノ喪ニ逢フヤ知ルト知ラサルト追弔ノモノ踵ヲ接ス人其ノ生前ノ偉業ヲ賞シテ東洋ノ女丈夫トナス曾テ五男三女ヲ産ム皆學業ヲ修ム

明治十九年三月十三日芝区三田畜種場内ニ於テ東京乳牛共進會ヲ開設スルニ際シ氏撰ハレテ幹事長トナル次テ功勞賞ヲ賜ハル如左

東京府芝区新錢座町

前田留吉

夙ニ牛乳搾取ノ業ヲ興シ克ク艱苦ニ耐エ大ニ該業ノ擴張ヲ図ル其ノ功勞^{すく}尠ナカラス依テ其ノ賞トシテ金拾円ヲ附与ス

明治十九年三月十四日 東京府知事從四位勲三等

高野五六

明治十九年三月十四日光明樓成り開業ノ式ヲ行フ之レヨリ先キ府下池上村本門寺ノ境内ニ涌出セル⁽¹⁶⁾泉アリ百病ヲ治スルヲ以テ浴客常ニ絶エト虽モ浴室狹隘不潔ナルニヨリ有志相謀テ光明館ヲ設置スト雖モ未タ貴顕紳士ノ旅宿ニ適セス故ヲ以テ氏ハ更ニ之ニ接続シテ光明樓ヲ建築ス一周年ニシテ漸ク落成ス其ノ地優靈ニシテ其ノ結構壯麗ナルヲ以テ府下第一等ノ浴場ナリト稱ス

明治二十年七月又亞米利加ニ渡航シテ乳用種牛中ラブラン グラハム セルシー⁽¹⁷⁾等ノ純良種一百餘頭ヲ携エテ之ヲ各地ノ篤志者ニ売却ス同年十二月歐式ニ則リ広壯ノ牛舎ヲ建築ス

明治二十一年夏牧畜事業視察ノ為メ関西地方ヲ跋涉^{ぼっしょう}シ秋ノ候又奥州地方ニ漫遊セラル

注記

- (1) 腕力
- (2) きっぱりと言い切る語気を表す
- (3) すみやか
- (4) 売る
- (5) 弱い
- (6) ひとりじめ
- (7) 清貧状態がしばしば続く
- (8) くじける
- (9) 当時の官職は会計参与徴士三岡三郎であって、民部郷であったことはない。彼は明治2年末に会計官を辞し、11月に参与も辞して政府から離れている。由利公正への改名は年8月に行われた。
- (10) 思いがけなく出会う
- (11) 出帆
- (12) 幕末の二本松藩
- (13) 融資の悪化
- (14) 学徳修養ある人の死
- (15) 現住所は新宿区西早稲田3丁目56-24
- (16) 上質の金属
- (17) ブラウン ダルハム (ショートホーンの原種) ジャージー

豪氣
全傳
前日
留吉以傳

家範全傳

新田諸公は上野國長岡郡岡村の農家岩橋明の弟あり天保十一
 年不逞三月廿の卿まじり如く一と新儀亭に對面を指揮一
 て敵陣の遊戯をおう著て文學を事とせし長より及んで
 豪傑亦難く父母之訓御一難きを蒙り又を逸放して母
 び家よりを請ふてまじり友人を寄つて備大を蒙りて年
 十八は急を請ふて當然卿を請して江戸に來り老中柳田中
 猪太の邸に入り中田に在る之に在り甚年あて横濱にむか
 へ城屋當り街の初めは儒者初めは地蔵に至りや自ら執る可き
 の事ある又た身を托し可きの友あり乃ち庵人諸藩に託さる
 至に岩て田に在り豪傑を交遊し如く一と新儀を塔せしを

[illegible][illegible][illegible]

新市冬に修雪て能く慶應ニシテ、手港丹(湯)ナリキ
今、指カ所ニ有難境ニ公燈ニ著リ、遂ニ此中難護スル北町
ノ下ニ至ルヤ此所ニ復テ指レ行ク言フ。今際寧軌臺ニ立
ビト第ニ御方費セテ一ツ日勤メヨリ人ノ身ヲモテ事ヲ成リト
サズ重田御工也故ウニ之ヲミハシム誰カ豫メテ同ガリ
タルモノナラバ吾國難マニ益ニサカヌヤハカリサハルオト
為明徳に御軍ハ其方普達ニ誘フ人心回シ沈黙得ル士人
ナリカユ偏々幕臣廢此ノ門暗室ノニ至セ信甘(傳書)排他(ヲ)
爲事ヲ成ルン人ニアカラ宴ニ和ヲ揚極ノ榮ヲ取リシヤ
フカニ他如シコトアリ聞知レニ自來ノ爲ヒ家業ハ一日變

[illegible][illegible][illegible]

アノト先主の由り公に教へられ然れど暫くして即ち明使を
 出向給へ本姓一掃を豫備す解議を奉聞尋常と云ふ六月甲
 午に多姓高帝意物と曰外に任行して公の言行より一
 難はて見しやかあこやウリと云ふ如く在地の廢越と云
 然るに公の爲す高帝豫備を配當管理より爲す國々然
 言當公の如く掩蔽を爲すに端、豫備の如くある大御
 公を、此より十日然良候第一五十日御執事なる常備と云ふ
 公を暫く高、然く高帝の爲すに、
 御公を多に蒙らる、
 甲子高帝の如く、
 年、
 精辰、
 公

⑩

[illegible]

11

[illegible]

⑫

[illegible]

13

[illegible]

14

海客等之地ニ至ル者皆其地險を當りてあり。相其地勢ヲ以
 明瞭ノ計畫ニ多クテ、畫圖申ケテ務メテ造ルニ好ミテ、今一重ニ
 接続シテ、先頭橋ヲ建築ス。二周有ニテ、敵ノ舟ヲ渡ラズ其地價
 廉シカラズ、然レモ壯麗ニシテ、又石有テ、第一、堅固ナリト物ヲ
 明治十年七月ニ至ルナリ、海航ニテ、紅毛船中ニテ、
 一トモ、此處橋一面既成リ、地土亦クミカキ、又、高き為ニ、臺即入
 ル有テ、其式ニ則リ、空行ケルヲ建築ス。
 明治二十年、紅毛事務事理臺、由、南西地方ヲ號シ、日本外
 へ、後、南西地方ヲ號シ、之ヲ

15

調査報告

野菜地帯における酪農経営の推移と実態の事例

石川 秀 勇

はじめに

1960年代の大きな出来事という、昭和39（1964）年の東京オリンピックの開催が挙げられる。この時期、わが国の経済は急速な高度成長の時代に移行していた。農業とはいえば、農業基本法が昭和36年に公布され、酪農など畜産の振興をはじめとする農業生産の選択的拡大が、大きな政策目標に据えられた。それから半世紀を経た2010年代の現在、世相も＜成熟社会＞といわれる状況へと変わってきている。

このような1960年代から2010年代へと至る半世紀の間において、首都圏の都市化の進む地域内で、搾乳牛30頭前後の飼養規模の酪農に取り組んだ戸別経営が、所属する酪農業協同組合での活動をベースにして、どのような歩みを辿ったか。「深谷ネギ」で知られる埼玉県深谷市、川田央士・好枝夫妻より、資料の提供とともに聞き取りをした。

その深谷市において酪農経営にいかに関与したかの実態と、所属する酪農業協同組合の活動に関し把握し得た概要を詳らかにし、川田家の事例において期待したものとは何であったかなど考察をまとめた。

1. 従前の営農と周辺的情勢

川田家の所在地の大字成塚は、今は深谷市に合併しているが、その前は豊里村といった。その豊里村のうちの新会地区に位置している。（図1）

昭和25（1950）年前後まで遡った頃の営農を述べれば、父と母とで野菜づくりを主に養蚕もやっていた。自家の耕作面積は1ha位で畑だけ。すぐ裏のまとまった40アールのほかすべて自宅から近い。牛は、乳牛を1，2頭飼っていた。肥やしをとるのが目的で、子牛を入れて育て、タネつけをして妊娠させ、お産をする前にバクロウ（家畜商）さんに出していた。当時、こういう乳牛の飼い方はこの辺の農家にはよく見られた。「松村乳牛」が隣接の八基地区で搾乳業をしていて、妊娠牛はそこなどに行っていたのだと思う²⁾。（表1）

2. 酪農を始める

昭和36（1961）年、長男の央士が高校を卒業し、就農した。群馬県立新田農高といい、利根川を渡っての通学だった。就農して、ハウレンソウやネギなど薬物の野菜づくりと、その野菜を「上武市場」（中瀬地区に現在

も所在）など、近場の市場へ出荷する仕事をした。自転車に付けたリヤカーに積んでという荷運びだが、乳牛を飼うようになってからもこの仕事をしばらく続けた。

就農してからのこと、酪農をしたいと思い父に話すと、“するのは自分でだぞ”といい、“そうオマエが考えるなら”、と賛成してくれた。しかし、酪農についての知識や技術をもっているわけでもないの、翌37（1962）年の春から1年間、熊谷市の南の江南町にあった県の種畜場（現・畜

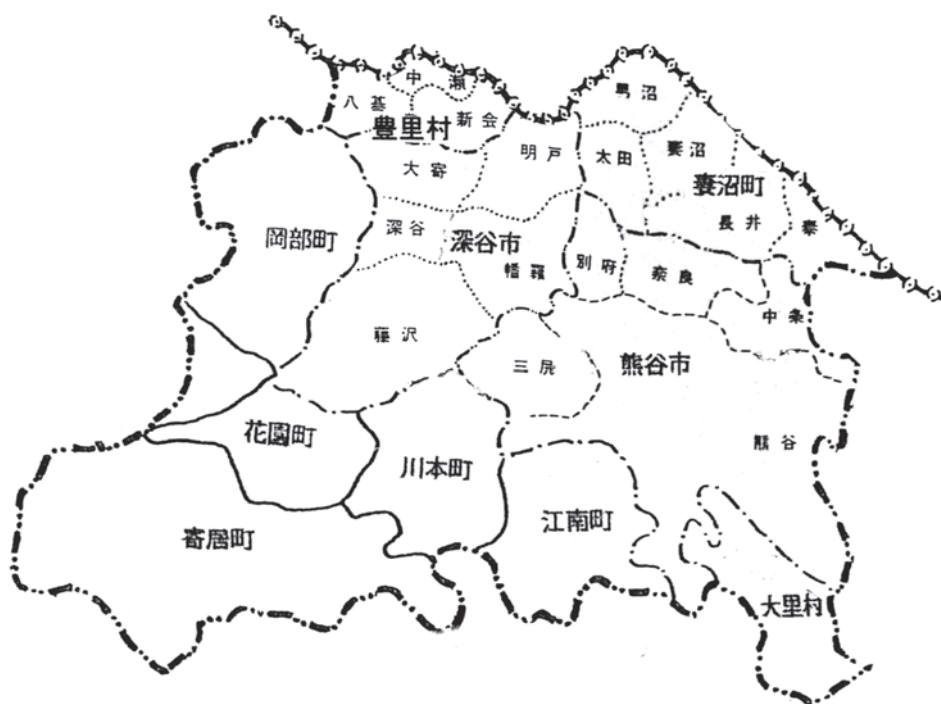


図1 大里地域の市町村区分図 — 1960年前後の時代 — ¹⁾

表1 行政区の編成と川田家における動き

年 代	行政区の編成	川田家における動き
昭和35 (1960) 年以前	昭和29 (1954) 年 八基村と新会村が合併し豊里村に。30年中瀬が合併。 30 (1955) 年 深谷町と幡羅・明戸・大寄・藤沢の4村が合併し深谷市に。	父と母とで野菜づくりを主に養蚕などの営農をしていた。
昭和36 (1961) ～ 45 (1945) 年頃		昭和36 (1961) 年 長男・央士が高校を卒業し就農、翌春より1年間酪農実習に通う。 38 (1963) 年 乳牛を入れ、酪農を始める。 41 (1966) 年 央士・好枝 結婚、新婦の好枝は群馬から。
昭和46 (1971) ～ 60 (1985) 年頃	48 (1973) 年 深谷市と豊里村が合併、新・深谷市に。	52 (1977) 年 新しい牛舎を建設、頭数を増やす。 60 (1985) 年 父 死去する。
昭和61 (1986) ～平成12 (2000) 年頃		63 (1988) 年 長女が農業大学校を卒業、結婚。新郎川田家で酪農に従事、3年ほどで他業種への勤務に。 平成4 (1992) 年 利根川の河川敷を利用し、仲間と牧草生産を始める。
平成13 (2001) ～ 21 (2009) 年		13 (2001) 年 河川敷での牧草生産を止めるとともに、粗飼料もいっさい購入に切り替える。後継牛の自家育成もやめる。 21 (2011) 年 酪農を廃業する。

(資料) 深谷市資料および聞き取りより作表。

産研究所)まで自転車で勉強に通った。この辺りからは自分だけだったが、仲間は12、3人いた。室内での授業を受けるとともに、各人1頭ずつ決まった牛の飼養を担当するというような仕方で実技を習得した。

種畜場での1年間の実習をおえ、利根川沿いで早くから酪農していた叔父さんのところから、1頭の乳牛を譲ってもらい、自分のところでの酪農を取り組み始めた。38 (1963) 年春のことである。その後の牛の増頭については、バクロウさんからの購買と、自分のところの産子を育成することによって行った。

搾乳については、1頭からはじめ5頭までは手搾りでし、その後はバケツ搾乳で行った。搾った牛乳は1斗缶の乳缶に移し、水槽で冷却、自転車の荷台に載せて「埼玉酪農協」の大里集乳所—川田家から500m位離れた、豊里村内の農協の敷地内にあった—まで運搬して行った。乳缶の3つまでは自転車で運べた。乳代は、牛乳の送付先の乳業会社から集乳所にまとめて送られてきて、皆で出て計算をした各自の分の金額を受け取っていた。

3. 本格的に酪農に取り組む

(1) 納屋を改造した小屋での乳牛飼養

昭和41 (1966) 年秋 結婚した。新郎の央士25才、新婦の好枝22才、群馬から嫁いだ。

この年1月、北武蔵酪農農業協同組合 (以下「酪農協」)が発足した。農協法に基づくが、県下で発足の最後となった酪農協だったようだ。発足時の組合員は124名。そ

の1組合員として加入した。とともに、牛乳の出荷先を当酪農協に切り替えた。送付先は明治乳業 (伊勢崎工場) で、深谷市東方の集乳所までの牛乳の運搬も明治乳業のほうでし、牛乳代金も各戸ごとの金額が最初から配分されてくるようになった。(表2)

飼養牛は改造して牛小屋とした建物などにつないでいた。自宅のすぐ東の小屋に10頭、その隣に6頭、南の小屋に何頭というような飼い方だった。なお、外に放し飼いするようなことはしなかった。利根川にすぐ近い農家ではけい牧などよくしていたが、自家からはやや距離があり、河川敷の草利用などもまったくしなかった。

牛への自給飼料については、上武市場で出る出荷野菜の副産物、つまり野菜残渣をもらってきて与えた。これだけでは足りないので、野菜を作っている農家まわりをし、クズのハウレンソウだとかネギ葉をもらった。運搬にオート三輪を使うようになっていて、冬場になると、群馬の大原—農高の所在地の新田町のすぐ北に位置し、ダイコンなどの畑作地帯として知られる—のほうまで行って、ダイコンの葉をもらってきた。こうしたものは、繊維分が少なく、牛のエサとしては合わないのは百も承知していたが、これをした。(写真1)

(2) 粗飼料確保についての模索

配合飼料や大麦・フスマ・乾燥ビートなどを酪農協を通し購入の一方、粗飼料の確保についていろいろと模索した。

【稲わらの買い入れ】 初期には、夏はトウモロコシを作り青刈りして与え、冬は野菜残渣を与えていた。また、

表2 北武蔵酪農協と川田家に係る関係の主要事項

(敬称 略)

年 次	北武蔵酪農協と川田家に係る関係の主要事項
昭和25 (1950)	幡羅 (はたら) 村 (村長・栗原元一) で青年たちの熱意に動かされ、北海道より乳牛26頭を購入・導入、申込者に配布。
27 (1952)	2月に幡羅酪農連合会結成。明治乳業の集乳所を国道沿いに建設着手。 4月に発起人を周辺町村に広げると共に、名称・武蔵酪農連合会を結成。会長は栗原幡羅村長、加入脱退は自由とされた。
32 (1957)	組合員数80名、日産乳量10万石 (1.9トン) に。
41 (1966)	1月農協法に基づく組織決定をし、「北武蔵酪農協同組合」を設立。組合員124名、乳牛頭数988頭/川田家、設立時に正組合員として加入。
49 (1974)	青年部を発足させる。
50 (1975)	酪農研究部を発足させる。組合事業としてバキューム車を購入。
51 (1976)	組合員全戸にバルククーラーの設置、集送乳の合理化を進める。
52 (1977)	全国酪農青年婦人部体験発表会において青年部長 (鈴木進) が優秀賞を受賞。テーマ：少数精鋭の道を歩む。
53 (1978)	県の乳質改善共励会において県経済連会長賞を受賞。
54 (1979)	生乳の需給調整 (計画生産) に突入。組合の組織として次の三つの委員会を設ける。生乳需給調整 (新設)、乳質向上対策 (従前・乳質)、購買対策 (従前・購買) /川田央士生乳需給調整の委員に委嘱される。
57 (1982)	/川田央士豊里支部長に (前任者・川田博義)
60 (1985)	酪農協創立20周年記念祝賀会を催す。
平成 2 (1990)	大里郡市ヘルパー組合設立される。
3 (1993)	/川田央士 組合理事に選任される。
6 (1994)	生乳生産削減特別推進事業が実施され、個人枠の流動化が図られる。
19 (2007)	8月組合員が9名と減少、全体会議を開き組合解散の合意が図られる。
20 (2008)	諸手続きが進められ、3月に組合を解散する。

(資料) 北武蔵酪農協同組合『創立20周年のあゆみ』、『創立30周年記念誌』、その他資料より作表。

写真1 新婚当時の川田央士、好枝の二人
トラックに積んでいるのはダイコン葉。

稲わらを年間通して給与していた。稲わらは秋の9月から冬の1月にかけて稲作農家から運んできて、牛舎の二階などをいっぱいにして使った。この運び込みの作業は大変だった。稲わらは、熊谷市北部の稲作農家から10a当たり7千円から1万円位の値段で買入れた。牛糞を後でやる等のことはしなかった。この稲わらの買い入

れを沢山したのは、昭和52 (1977) 年に新牛舎ができ牛を移すまでの旧牛舎で飼っていたときで、10年位の間だ。新牛舎に移してからは段々少なくて、秋から冬にかけての作業がうんと楽になった。

【トウモロコシのサイレージ作りを開始】 野菜作りは徐々に少なくなったものの市場への出荷には自分でしなければならない。それには時間をとるが、そのヒマもなくなってくる。それと、野菜は値段に変動があって、タダみたいなことがある。“これではしょうがないなあ。酪農のほうで儲かるのではないか” という思いがして頭数を増やすことに腹を固めた。そのための一つとして、トウモロコシのサイレージ作りを始めた。このトウモロコシは、青刈りしてきて長いまま立てておき、給与のときに細断する仕方で何年か前からやっていた。それを、鉄板製の円型サイロやスタック方式など、簡易サイロでサイレージにして給与することに変えた。栽培面積は、自分のところの1haの畑全部に借地の30aを加え、合計1.3ha位。

機械利用は、はじめ手刈りをしてきてカッターで細切り、詰める方法をとった。

【仲間との共同利用でカネコのスーパーカーを導入】

それでは作業が大変なので、バキュームカー利用でつくっていた豊里機械利用組合の仲間たちで、カネコ農機のスーパーカー（乗用型多目的作業車）を購入、順番で利用する方式に換えた。このスーパーカーは前部にフォーレージハーベスターを、後部に積載運搬車を装着し、使いやすい。しかし、共同利用では作業日の調整が難しく、何年かやって小型のものを単独で購入し使うように変えた。

(3) 新牛舎の建設と頭数規模の拡大

新しい牛舎は、昭和52（1977）年の春に建設にかかり、この年の11月頃に竣工、年内に牛を移した。設計は、何年か前に新築した仲間の牛舎をモデルにした。施工は、明戸地区の湯本さんという鉄工場をやっている業者にやってもらった。換気だとか、土間のコンクリートの勾配とか、こちらからの注文が多々で、厄介だと言われたりした。建築費は2,500万円位要し、うち1,000万円は自己資金により、残の1,500万円は総合資金を借りた。償還期間は10年だったが、利率がかなり高かったので頑張って8年で償還を済ませた。

新牛舎での飼養頭数は、成牛で30～40（搾乳牛で25～35）頭、育成牛を含む総頭数で40～55頭位へと増やし、記録を見ると、生産乳量を増している。（写真2）（図2）

4. 生乳生産の調整期への移行にも伴って

昭和54（1979）年に

生乳生産の調整期に入り、酪農協でも需給調整委員会を設けるなど、新たな対応の始まる一方、自家でも家族にいろいろ動きなどあった。

(1) 家族についての動き

昭和60（1985）年に父が死去した。その3年後の同63（1988）年に長女が埼玉県農業者大学校を卒業。同校で同級生だったS君と長女が、この年6月に結婚した。それから平成3（1991）年の夏頃までの約3年、営農に自分ら夫婦とS君との3名で酪農の作業に従事した。S君はその後、会社勤めになった。S君が会社勤めになった頃は、景気のいいバブルの雰囲気の濃い時代で、他



写真2 新牛舎と牛舎内の飼養牛
新牛舎は南北方向の建設で、上は西側からの撮影

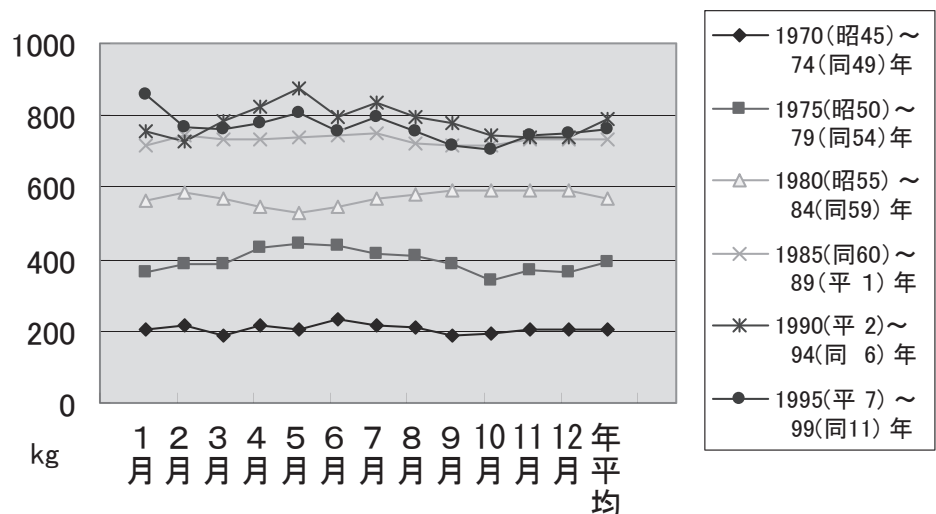


図2 川田家の生産乳量の推移 一月別の日乳量—
（資料）記録表より作図

所の者から“毎日3人も牛舎で働くことはないのではないの”と言われたりした。それと、“とにかく若いからしばらくは他の仕事をして社会勉強をするのもいいから”と央士からも言っていて、勤めに出させた。また、“その気持ちがあるならいつでも酪農の仕事に戻って来いよ”ということを伝えていたが、会社の仕事で5年目位だったかケガで足を骨折した。酪農の仕事には支障の懸念があり、復帰は考えずに勤めを続けることで現在に至っている。

(2) 利根川の河川敷での牧草生産

平成4(1992)年だけに、スーパーカーの利用で機械利用組合を組織していた仲間8名と、利根川の河川敷でライグラス主体の牧草の生産利用の取り組みを始めた。面積は10ha余。これへの機械導入は、スーパーカーでもそうだったが、融資を得て行った。トラクタは各自の既存のものを使い、購入したのはモアー・ヘイテッダー・集草機・コンパクトベラーなどで、初めはコンパクト・ベールで乾草生産をした。その後ロールベラーを購入し、ロールベール生産に代えた。融資を受けた額は700万円位だったかと思う。

(3) 粗飼料も購入(外国産)に切り替える

河川敷は利用料を納めて使ったが、その額は10万円位とそれほどの負担ではなかった。ただ、平成10年だったかには、折角生産したロールベールを50個も大雨で流失、という河川敷利用に特有の災難にもあった³⁾。そして、融資額の返済が済んだ頃から当初8名だった参加者が、バタバタと止めて3名となり、2名となり、最後は自分のところだけとなってしまった。とはいえ、ベール生産には3名の組作業で行うことが必要で、参加農家が2名となってしまった段階からは、続けていくことがこの関係からも困難となった。

こんなことで、開始してから10年間位でこの河川敷を使っただけの牧草の生産利用を止めた。平成13年が最後だったかと思う。これ以降、粗飼料についてもほとんどを購入とした。

(4) 後継牛の自家育成を止める

この頃から全頭を和牛の精液をつけ、F1牛を生ませて初生牛で売ってしまうようにした。哺育からの自家育成では手間が結構かかり、やってはいられなくなったからだ。後継牛はバクロウさんから生後1年位の子牛を買い、育成して当てた。それ位だと妊娠牛を買うより安いし、育てるのにそう手間もかからず経済的だし、搾乳牛舎に入れてもすぐなじんだ。

5. 酪農人生

——一日のパターン、一年のサイクル

(1) 一日のパターン、分娩牛等への対応

朝は5時頃に起床、お茶を飲み、パンと牛乳の軽い食事をする。そして牛舎に入って6時頃から1時間半位、エサやりをしつつ搾乳をする。8時頃集乳車が来る。ボロ出しなどして9時半頃ないし10時前に作業が一段落し、朝食と昼食を一緒にしたような食事をする。それから休憩で昼寝もよくした。起き出すのは午後3時から4時頃。作業はエサやりの支度で、翌朝のエサも前日に支度する。6時頃から朝と同じようにエサやりをしつつ搾乳作業にかかり8時頃に終える。そんな一日を繰り返していた。

分娩牛や病牛の発生などでの雑用が月に3回位はあって、そのときはそれに掛からねばならないので他の仕事は後回しとなる。分娩牛は夕方から夜にかけて多かった。

(2) 牛の排泄する糞尿の処理

牛の糞尿は日量で2〜3トンは出た。バーンクリーナーで排出し、ダンプトラックで毎日1台、生のまま畑にもって行って落とす。乾くのをまってトラクタで攪拌、すき込むというやり方をした。すき込んだ後、1年位は作物をつくらずそのままとし、臭いがするという苦情の出ないような畑を使った。そうしていると、野菜農家からもその家の畑に入れて欲しいという要望があって、自分の畑に7、他所の野菜農家の畑に3位の割合で処理した。

(3) 酪農ヘルパーの利用、研修旅行への参加

平成2(1990)年に「大里郡市ヘルパー組合」の設立をみたが、北武蔵酪農協の組合員で加入したのはウチだけだったようだ。酪農協の主催で研修旅行がよく催されたが、ヘルパーに頼んでウチを留守にし、研修旅行で遠いところに行ったという記憶は、自分(央士)にはない。好枝のほうについては、婦人部の研修旅行で近場だがちょこちょこ参加し、そんなときなどヘルパーをよく利用していた。

(4) 税務申告

最初は、酪農協での指導を多少受けたような気もするが、もう何年も単独で書類を整え、熊谷の税務署に持参し、青色申告してきた。申告には記載様式があり、収入のほうでは乳代の関係や子牛の個体販売など、経費のほうでは減価償却費など細かく計算して金額を出さねばならず、また領収書の添付が必要で、手数がかかる。税務署に持参すると、税務課の者が目を通した上ですんなり受けとってくれた。

表3 北武蔵酪農協の組合員数と乳牛頭数、日出荷乳量

() 内は戸当たり

年 月 日	組合員数	乳牛飼養頭数	うち搾乳牛頭数	日出荷乳量
1970 (昭45) 4.1	124名	1,128 (9.9) 頭	732 (5.9) 頭	11,582 (93) kg
1975 (昭50) 4.1	49	1,210 (24.7)	698 (14.2)	10,470 (214)
1980 (昭55) 4.1	44	1,363 (31.0)	829 (18.8)	13,600 (309)
1985 (昭60) 4.1	38	1,417 (37.3)	849 (22.3)	15,379 (405)
1990 (平 2) 2.1	30	1,102 (36.7)	716 (23.9)	15,367 (512)
1995 (平 7) 2.1	22	803 (36.5)	564 (25.6)	11,378 (517)
2002 (平12) 2.1	14	565 (40.4)	461 (32.9)	11,851 (847)
2007 (平19) 2.1	13	551 (42.4)	450 (34.6)	12,272 (944)

(資料) 表2に同じ

6. 酪農協の解散、自家の酪農の廃業

酪農協は、組合員数が10名を割るなどし、平成20(2008)年1月の臨時総会で解散を正式に決定、同年3月に解散。4月から組合の清算に入り、9月に一切が終了した。精算人は解散時の組合長ら5名で、央士もその一人であった。なお、事前の協議で、酪農継続の組合員はJ Aふかや幡羅支店に酪農部会を設け、生乳生産を続けていく方途がとられた。(表3)

酪農協が解散した3年目の23(2011)年6月に川田家でも酪農を止めた。これに先だち、平成22年度分の青色申告を同年3月にする当たり、6月に酪農を止める旨、税務署に酪農業の廃業届を提出した。

振り返って、年齢が 央士70才、好枝67才となっており、いろいろなことがあったが、大きなケガ、大きな病気もせずにやってこられ、それが何といっても幸いだった。自作地の1ha程の畑は、自家用程度の野菜作りに止めこととし、既に貸した畑もある。残りの畑も借地を希望してくる農家があれば、それには当面応じて行こうと思っている。

おわりに

農林水産省の統計で農業粗生産額の構成をみると、深谷市の平成17(2005)年の数字は、全体額216億円のうち野菜が60%と突出し、乳用牛は3%となっている。この構成比は、昭和40(1965)年にはその後合併した当時の深谷市と豊里村の計で、野菜が43%、乳用牛が11%であった。他方、耕地面積は昭和40(1965)年の4,700 haが平成17(2005)年に2,500 haへと、半減にも近い減り方をしている。つまりは、この間に著しい都市化の進展があったが、そうした中で労働集約的な野菜作はなお踏ん張りを見せている。

地域的なこうした変化の下での川田家の酪農経営につ

いて、特徴的なことがあるとすればそれは何か。耕地面積の制約から、粗飼料の自給をいかに図るかに努力を傾けざるを得なかったこと。もう一つは、牛の血統にこだわることなどせずに経営収支に重きをおいてきたこと、の二つを挙げることができよう。

まとめとして、地域農家間に酪農振興に寄せる相当な盛り上がりが戦後間もなく起こり、国の酪農政策の展開、乳業メーカーの活発に活動する中で、野菜地帯の環境であるに関わらず酪農経営を本格化させた。そして一定規模の頭数拡大を図るとともに、酪農協の組織活動においていくつかの役割を担うなど、積極的に参画した。ここには、「酪農経営の安定化」を求め、実践・実行してきた酪農家の「生きざま」が垣間見られる、と言えようかと思われる。

最後に、本稿をまとめるに当たりご協力をいただいた川田夫妻に対して、心からのお礼と感謝を申し上げます。

注

- 1) 齊藤功氏が報文〔「埼玉県北西部における酪農地域の形成と特色」『人文地理学研究』IV 45-43,1988〕で、大里郡を中心とした本県西北部地域における明治期から昭和50年代にかけての標題に係る動きなどについて論じている。
- 2) 豊里村は八基(やつもと)・中瀬・新会の三つの旧村の地区よりなるが、うち八基の血洗島というところが渋沢栄一翁の生地である。生家が公開され、また市立の記念館も設けられるなどしており、多くの参観者が見られる。
- 3) 取材に応じて長女の話している記事が、『デーリーマン』誌の平成11(1999)年2月号に掲載されており、その中でロールベールの流失のことについても触れている。

(山崎農業研究所 研究会会員)

資料

千葉県における酪農発展の経過

石井 利男、錦織 純雄

Progress of the Dairy Farming Development in Chiba Prefecture

ISHII Toshio, NISHIGORI Sumio

概要

六世紀から七世紀の仏教渡来とその興隆期に始まったわが国の乳文化は、12世紀末になると貴族社会の崩壊と武家社会の拡大により、一般社会に普及することなく消滅するが、江戸時代の享保13年（1728年）になって、第8代将軍徳川吉宗が嶺岡の牧に白牛3頭を放し、後にこの白牛の乳を搾って作った「白牛酪」という乳製品によって、わが国の乳文化が5世紀ぶりに蘇るとともに、新しい乳文化の始まりとなった。

ここで始まった白牛酪の製造や白牛の飼育技術等が、その後の日本酪農の発展につながっていることから、嶺岡牧は日本酪農の発祥の地として昭和38年5月4日千葉県文化財保護条例により史跡として指定されている。（図-1）今回、嶺岡牧を中心に興った安房の酪農について、その発展に情熱を捧げた牧士、畜産家、畜産組合等の活躍を中心に、その経過について古文献、酪農関連誌史、業界誌、講演会資料等により調査を行ったので報告する。

Abstract:

Dairy culture in our country began in the 6th and 7th centuries along with the introduction and flourishing of Buddhism, but it disappeared without spreading to the general public in the end of the 12th century when aristocratic society collapsed and samurai or warriors took over. During the Edo era the 8th shogun Yoshimune Tokugawa freed three white cows in Mineokamaki in 1728, and a dairy produce called “Hakugyuraku” (white cow milk) milked from the three cows marked the rebirth of dairy culture in Japan after five centuries and the beginning of whole new dairy culture.

Production of white cow milk and breeding of white cows which began in Mineokamaki have later led to the development of dairy farming in Japan, and for this reason it was designated on May 4, 1963 as a historical site of the cradle of dairy farming in Japan under Item 1, Article 31 of Cultural Asset Protection Ordinance of Chiba Prefecture. (Fig. 1)

It is reported here about dairy farming in Awa which started as Mineokamaki as its center, discussing mainly about remarkable activities of dairy farmers and dairy farming unions that devoted passion to its development.

The report is based on research made on old literature, dairy farming -related periodicals and journals, and lecture materials.

1. 始めに

わが国には古代から牛がいたことが『古事記』や『日本書紀』からも分かるが、それは役牛としての利用であり牛乳の利用はもっと後になってからで、欽明天皇（531～71年）の時代、大伴狭手彦が百済から連れてきた知聰という学者が朝廷に奉った典薬書等164巻の中に、牛乳の薬効や乳牛飼育方法についても記されており、これによって初めてわが国に牛乳の知識が伝わり、その息子善那（別名福常）が36代孝徳天皇（645～654年）に牛乳を搾って献上したのが、わが国での牛乳飲用の始まり

されている。この時、天皇は大変喜ばれ牛乳は人の身已やまとやくしのかみを丈夫にする薬であることから和薬使主ちちのおさのかみという氏姓と乳長だいにせんじょう上の職（後に乳師へ改称）を与え、大山上の位を授けられ、その子孫は代々乳長上の職を世襲し乳戸（官制の酪農家）を率い、搾乳を行い牛乳や乳製品（酪、蘇）を朝廷に献上した。^{1) 2)}

2. 調査対象・調査方法

(1) 調査対象

日本酪農の発祥地として歴史を有する安房地域の酪農発展経過等について調査を行った。



図1 日本酪農発祥の地の碑

昭和36年8月安房酪農百年史編さん委員会により旧嶺岡牧の中心であった現千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所庁舎前に建立された

(2) 調査方法

酪農関連誌史、業界誌、講演会資料等による文献調査を行った。

3. 調査内容

- (1) 嶺岡牧の起こり
- (2) 白牛と白牛酪の製造
- (3) 安房酪農の興り
- (4) 製乳事業の興り
- (5) 乳牛産地安房

4. 調査結果

(1) 嶺岡牧の起こり

安房酪農発祥の基礎となった嶺岡牧の創設年代は不明であるが、安房の牧畜は、『延喜式』(927年撰進)の中に嶺岡牧の前身をなす鈐師馬牧おのし(珠師ヶ谷馬牧後の柱木牧)や、白浜馬牧が載っていることから既に平安後期には存在したと考えられている。³⁾

嶺岡牧については、『房総叢書』第7巻簗岡山牧場に詳しく解説されており、そこには次のように記載されている。⁴⁾

「簗岡山、北は平塚村に起り南は貝渚に終わる。其の間凡そ五里余、東西或は二里、或は一里。西麓は平群・朝夷の二郡に接せり。此の牧地を東西に区画して東上牧、同下牧、西一の牧、西二の牧と云ふ。青草繁茂、處々清水を生じ、駒馬饑渴の患害をまぬがれ、極めて放牧の良地たり。古昔、當国白濱及珠師ヶ谷に牧地を開かれしことは延喜式に見ゆ。此簗岡は里見氏の時より駒をはなつて乗騎に充つと云う。其頃は牧士高梨半兵衛、池田久兵衛、加藤中兵衛とて三人あり、石井某と云う者に厩局の乗騎を総管せしめ、牧士十三人を置く。夫より良馬慈息して今は數百頭に及べり。(略)」

これによれば、安房の地に君臨していた国主里見氏が

軍馬育成の目的を持って創設したと思われ、その年代は、戦国時代の天文、天正(1532年～1592年)の頃で里見6代義堯、7代義弘の時代と推測されている。

里見氏が牧場創設地として嶺岡に着目したのは、前文中の「簗岡山は青草繁茂、処々清水を生じ」とあるように、安房の地において唯一馬の放牧に必要な草、水等の諸条件が備わっていたためと考えられている。

その後、安房を支配していた里見氏は、慶長19(1614年)徳川幕府による館山城の改易により領地を没収され、牧は徳川幕府の管理下に置かれるが、このころの牧は代官預かりに過ぎず、徳川幕府が牧の管理を積極的に始めたのは、徳川8代將軍の享保年間(1716～1736)からである。

そのため、徳川幕府の管理になってから享保年間までは馬の頭数が減少し馬の質もだいたい劣っていたようである。

『房総叢書』の嶺岡5牧鏡の中に宝永年中の馬数の調査結果が記されており、そこには、「駄三十疋余有之由」とあることから推察できる。⁵⁾

そこで、徳川幕府は享保7年になって牧管理の充実を図るために新たに七名の牧士を任命するとともに、初めて奥州地方から種牡馬を導入し馬の改良に着手する。

このことは、『房総叢書』の嶺岡牧沿革に、「享保七年吉宗將軍ノ時、嶺岡牧改正、側用人加納遠江守ヨリ齋藤三右衛門二命ジテ南部仙臺等ヨリ種馬買上ゲ放牧。(中略)享保九年二月父馬二疋買上ゲ西牧放ツ。南部大膳大夫ヨリ種馬七疋献上東牧へ放ツ。伊達陸奥守ヨリ種母馬八疋献上西牧へ放ツ。阿蘭陀ヨリ献上馬外二種馬拾壹疋ヲ買上放ツ(略)」等記載されていることから、他の地域から種馬を導入して馬の改良を画策していたことが判る。⁶⁾

享保12(1727)年には、それまで4牧であった嶺岡牧を柱木牧を新たに加え牧区画を5牧とし、牧の改革、馬の改良等をより積極的に行うようになる。

『房総叢書』の嶺岡五牧鏡の中に各牧の構成状況について、次のように詳しく記載されている。⁷⁾

西牧 差渡行程二里程、廻り六里程

東牧 東西行程二里程、南北行程一里程、廻り八里程



図2「嶺岡五牧位置図」

を以て牛酪を製す慶応3年迄まで続く同年より嶺岡にて玉洞丹、玉蓬水等を製薬す」とあることから、¹¹⁾ 嶺岡牧の白牛より白牛三葉（白牛酪、玉洞丹、玉蓬水）が造られたことが判る。

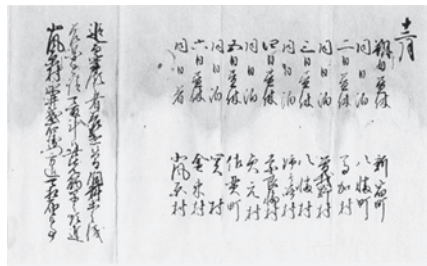
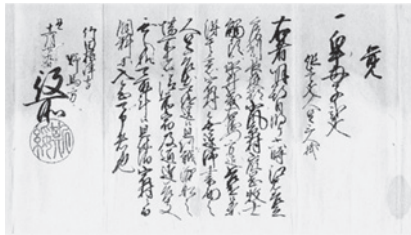


図4「白牛送り状」

白牛の江戸往来に際しては、各宿村へ白牛の到着を先触して牛の世話をさせるために出された指示書

白牛の江戸往来に際しては、各宿村へ白牛の到着を先触して牛の世話をさせるために指示書が出された。

嶺岡乳牛研究所に保管されている古文書の中に嶺岡から江戸に白牛を送る時に各宿村の間屋、名主宛に出された次のような覚書きがある。(図-4)

覚

一 白牛母子式正

但壺正人足二人掛

右者明朝日明ヶ六時江戸差立房州長狭郡北風原村嶺岡牧士触頭永井幾右衛門方迄差遣候条得其意宿村無遅滞書面之人足差出可継送候具川越渡船之場所者従前宿及通達差支無之様取計候具休泊村二而飼料等入念可申者也

武田撰津守

丑十一月廿九日 野馬方役所 印

従江戸房州長狭郡北風原村迄

宿村

間屋

名主

十二月

朔日昼休 新宿町 (現 東京都葛飾区新宿町)

同日 泊 八幡町 (同 市川市八幡町)

二日昼休 馬加村 (同 千葉市幕張町)

同日 泊 蘇我野村 (同 千葉市蘇我町)

三日昼休 八幡村 (同 市原市八幡)

同日 泊 姉ヶ崎村 (同 市原市姉ヶ崎)

四日昼休 奈良輪村 (同 袖ヶ浦市奈良輪)
同日 泊 貞元村 (同 君津市貞元)
五日昼休 佐貫町 (同 富津市佐貫)
同日 泊 関村 (同 富津市関)
六日昼休 金束村 (同 鴨川市金束)
同日 泊 北風原村 (同 鴨川市北風原)

追而宰領之者差遣候間飼料等之儀差図□請可取計候此先触早々順達北風原村永井幾右衛門方迄可相届候事

この古文書は、嘉永6(1853)年に、江戸から嶺岡まで白牛を運ぶ際の指示書で、行程を明示し大切に白牛を運んでいたことが判る。

白牛酪の具体的な製法については、嶺岡牧士触頭を代々勤めた永井家の子孫でかつて嶺岡畜産会社社長も勤めた永井要一郎氏の談話が「大日本畜産改良同盟会会報」(日本畜牛雑誌)第236号(大正12年発行)に次のように載っている。¹²⁾

「白牛の乳から白牛酪といふものを作ったが、これは白い牛の乳を、鍋に入れて砂糖を混ぜ、火にかけて丹念に掻きまぜながら、石鹼位の堅さになるまで煮つめたもので、亀甲形にしてあった。(中略)この白牛酪を作るのは唐銅の鍋に限ってゐたのも面白いことである。」

これによれば、白牛酪は乳に砂糖を加え煮詰め、乾燥したものであって、古代の酪や蘇と異なる製法によって作られた乳製品で、バター、チーズのような現在の乳製にもみられない独特のものであったと考えられる。

この白牛酪の効能については、前述の^{もいのみなものと}桃井源寅著『美年岡白牛酪考』に詳しく載っているが、当時の將軍家の医薬栄養食品として珍重され、特に労咳(結核)、婦人病、便秘、中風等に効果があるといわれ、將軍家齊は白牛酪の愛好者で、歴代將軍の中でも長寿の方で在職も長く、44人の側室を持ち55人の子供を産ませる精力家であったのは、毎日白牛酪を食べていたおかげともいわれている。

これら白牛3葉の販売は、数寄屋橋御門前に店を構え以前から野馬方役所へ出入りしていた由井村利兵衛を売弘所(問屋)とし全国に14カ所の取次所を設けて庶民にも売り出された。¹³⁾

『武江年表』寛政八(1796)年丙辰の項に「白牛酪売弘の事を命じ賜ふ」とあることから、白牛酪が実際に江戸市中で庶民に販売されていたと思われる。¹⁴⁾

なお、白牛酪のことは、『白井町史』の「野馬掛白牛酪御製法一件留一堅冊」(寛政九年)に詳記されている。

白牛酪は遅くとも寛政4(1792)年には製造され明治6年まで製造されていたが、同年12月、日本国内に蔓延した伝染病(牛疫)により嶺岡の白牛も全滅したことにより途絶えた。

明治4年11月牧を管理していた牧士制度は廃止になり、白牛の飼育や白牛酪製造経験のある牧士は次第に嶺岡を離れ、全国各地でその技術を伝え、今日の酪農の基礎を築いたと言われている。

(3) 安房酪農の興り

① 嶺岡牧の民営化

ア 嶺岡牧社

嶺岡牧は、明治維新以降も明治政府によって管理が引き続き行われていたが、明治10年頃から旧嶺岡牧野付の村内では牧畜産業を興したいという人達が現れ、政府に対し、牧借り受けの運動を展開し、明治11年5月17日にそれまで長年にわたり幕府の管理下に置かれ、その後も政府の管理がなされていた嶺岡牧は民間経営に委ねられることになった。

『安房郡史』には、「明治11年野付30ヶ村の結社にて平群村加藤玄章外七十一人創立委員となり本場を借用し株式会社を設立せり。当会社は字八丁（現鴨川市西の嶺岡山頂）と称するところに設け嶺岡牧社と称し（略）」とあり、¹⁵⁾ この時、政府から嶺岡牧の馬351頭、牛87頭を3,000円で払い下げを受けて事業を開始した。

嶺岡牧社時代の牛の改良は、『安房酪農百年史』によれば、明治11年7月に岩手県より南部産牝牛100頭、東京より洋種牛6頭を購入、12月には内務省勸農局より洋種牛牝牡4頭を借り受け、翌12年7月に再び岩手県より南部産牝牛50頭を購入、13年4月には東京より洋種牝牛3頭を購入するなど、牛の改良繁殖を積極的に行い、安房の畜産発達の基礎を築いたが、明治17年会社経営上のことについて株主から異論が起り解散することになる。

その理由を『安房郡史』には「土堤の修繕不備により野付村に牛馬の里出多く異論百出・・・（略）」とあり、解散の理由を牛馬の里出としている。

『安房酪農百年史』では、嶺岡牧社が最も苦しんだのは牧場の境界線である牧堤、牧柵の修理であり、その理由として、幕府管理の時代は代官の命令で野付村の農民が無償で従事したこと、官営になってからはそれなりの予算があったこと、しかし、民間では境界線の管理は相当大変であったと推察している。

イ 嶺岡畜産株式会社（図-5）

明治17年嶺岡牧社の解散によって、嶺岡牧は再び国へ返還され農商務省の所管となり、21年までの5カ年間管理されたが、明治22年4月嶺岡牧周辺の畜産家の中に畜産発展のため嶺岡牧の経営を志す人々が再び現れ、政府より牧場全域の借り受けと牛馬及び施設等一切の払い下げを受け、嶺岡畜産株式会社を発足し、明治44年4月に解散するまで安房における牛馬の改良、繁殖に尽力され、本県酪農の発展に貢献した。

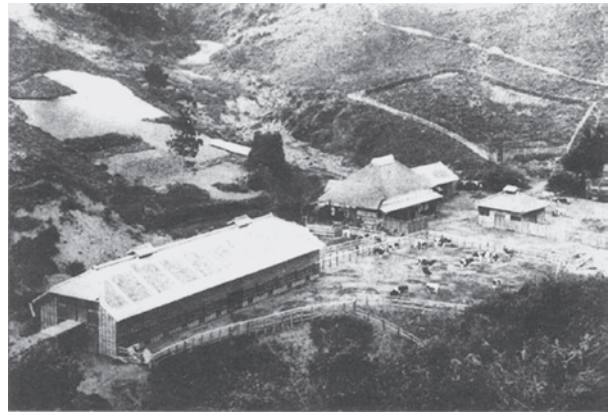


図5 嶺岡畜産株式会社（明治43年）
（現、千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所）

嶺岡畜産株式会社における牛の改良については、安房酪農百年史によると、会社発足と同時にアメリカより短角種50頭、ホルスタイン2頭を輸入する。この時輸入したホルスタインは、種雄牛として嶺雪号（図-6）、種雌牛としてウエラミナ号でこれが安房におけるホルスタイン種輸入の始めで、後の乳牛改良の先駆けとなった。

明治42年には、オランダよりホルスタイン種雄牛1頭（アデマ19世号）、ホルスタイン種雌牛2頭（アールチェ号、ウイーブルッフ3世号）、スコットランドよりエアシャー種雄1頭（ブレスルン号）、エアシャー種雌1頭（第6スワン2号）を輸入し、安房地域の乳牛改良に貢献した。特にアデマ19世号は、種付け成績が良く、生産される子牛も体型乳器等が優れていたため安房地域の畜産家は競って種付けをした。

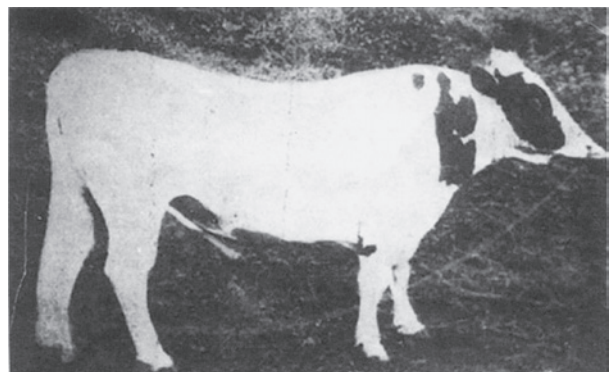


図6 嶺雪号（安房で最初のホルスタイン種輸入牛）
嶺岡畜産株式会社が明治22年アメリカより輸入

嶺岡畜産株式会社では、乳牛の改良繁殖については積極的に力を入れてきたが、従来の馬の生産については年々その数を減少していき明治43年には馬の生産を止めることになる。その理由として、『安房酪農百年史』では、安房の地が馬の生育よりも牛の生育に適していたこと、京浜地方における牛乳消費量の上昇により、一般で乳牛飼育を志す人が増え、そのために乳

牛の売れ行きが良くなったこと等をあげている。

安房地域の畜産発展に中心的な役割を担ってきた嶺岡畜産株式会社も会社経営が思わしくなく、家畜（牛6頭）土地（30町歩）、建物（10棟）一切を千葉県に寄付し明治44年解散することになる。

解散に際し、嶺岡畜産株式会社社長外株主一同は、県に対し、寄贈した施設一切を用いて県立種畜場を設置して牛の改良繁殖とその技術指導に当たられるよう要請した。県はその要請を受け入れて明治44年8月4日千葉県種畜場嶺岡分場（現千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所）を設置し、牛の種畜場として安房酪農発展の原動力となった。

② 牛種の変遷

ア 和牛から短角種へ

安房における最初の牛種は古来からの和種であってその用途は農耕、運搬用に飼われていたもので、明治10年代にこれら農耕用の和種を短角種によって乳用化する改良が安房で始まり、前述したように、明治11年に嶺岡牧社で短角種の導入をし、14年に大山村の畜産家が米国産の同種種雄牛を導入して交配を始めた。

明治18年（1885年）吉尾村大幡（現鴨川市大幡）で安房国牛馬共進会（千葉県で初めての共進会）が開催され、その時出品された牛馬は136頭で、牛82頭の内訳は短角種22頭、短角の1～3代雑種55頭で短角種系が77頭を占めていることから、安房地域に短角種種雄牛を導入して役牛の改良を志す畜産家が多くみられたと思われ、明治20年代の後半には、安房の牛の改良は一応短角種で統一された形となった。

イ 短角種からホルスタイン種へ

ホルスタイン種は、原産地がオランダで明治10年代に数多くアメリカに輸入され、アメリカで一層高乳量の牛に改良された品種で、乳牛の品種の中で最も乳量が多く、現在の日本の乳牛の99%以上を占めている。

ホルスタイン種が日本に最初に入ったのは明治20年前後で、東京、横浜、北海道等へ僅かな頭数が輸入された。安房では、前述した嶺岡畜産株式会社が明治22年に2頭を試験的に輸入したのが最初である。

畜産家の中に、ホルスタイン種の乳量が多いことに注目し、同種への切り替えを考えるものが現れ、明治29年に吉尾村（現鴨川市吉尾）で同種の種雄牛を導入したのを初めとして、安房の各地で導入が始まり、短角種からホルスタイン種へ徐々に移行した。

明治40年代に入ると安房郡では郡有、組合有の同種種雄牛を郡内に配置し、短角種やその他雑種牛に交配することでホルスタイン種による乳牛化を一層進めた。

さらに、明治42年安房郡産牛組合の技師として赴任した安仲就文は、乳牛の改良方策として郡内の乳牛全体をホルスタイン種に統一することを提唱し、明治45年頃には郡内の種雄牛70頭は殆どがホルスタイン種になった。このホルスタイン種への牛種統一により、ホルスタイン種の増殖、改良が急速に行われ、明治末期に約590頭であった乳牛頭数は、大正3年には1,880頭、5年4,250頭、7年5,113頭と飛躍的に増加して、安房は東京の市乳地帯に続いて、農村地帯では日本で最も早く一大乳牛地帯・酪農先進地となった。

③ 畜産組合の設立とその活動

明治18年に長狭郡大幡村（現鴨川市大幡）で開催された安房国牛馬共進会の会期中に、畜産集談会が開催され、牛馬の繁殖改良を図ること、畜産組合の設置、種畜設備の方法、牛馬市の開催等について、畜産発達への情熱あふれる論議がされた結果、組合結成に対し満場致の賛成を得、翌19年7月20日安房国種畜組合が設立され、直ちに種畜場を設置し農商務省より種雄牛を借り受け交配を開始。明治23年にアメリカから短角種50数頭を輸入し郡内に販売或いは預託をして乳牛の改良に効果を上げた。

安房の畜産、家畜の改良をより効果的に推進するため、明治39年12月5日安房郡産牛組合を設立し共進会の開催、種雄牛の配置、講習会の開催、能力検定の実施等の事業を行い安房の畜産、酪農の基礎を築いた。特に能力検定は、組合検定と呼ばれ、泌乳検定規程を設けて明治45年4月30日に吉尾村大幡（現鴨川市大幡）で日本最初の検定事業を始めた。

図7 『乳量質検査成績基帳』（明治45年4月30日）
わが国で最初の乳量検定簿

最初は1斗370（21.7リットル）であった最高乳量も、大4年には2斗（36.1リットル）、大10年には2斗570（46.4リットル）と次々に記録が更新され、この検定事業が安房郡におけるホルスタイン種の改良に果たした役割は大きく、この事業によって高能力牛や良い種雄牛が安房郡

内中に知られ、益々優良種雄牛との交配が行われ、優秀牛がたくさん生産され、安房郡が長い間乳牛の産地として隆盛を続ける基になった。

④ 種雄牛による乳牛改良

安房では、優秀種雄牛を揃えることに特に力を入れ群有及び組合有の増加を図り、また個人有の優秀種雄牛に対しては、補助金を交付して改良を進めた。

明治40年代から大正始めまでのホルスタイン種改良初期において活躍した種雄牛としては、明治42年に嶺岡畜産株式会社がオランダより直輸入したアダマ19世号、丸村大井（現丸山町大井）出身の婦人を妻とした関係で大井で牧場を営んでいたジョセブ・デネレーが輸入したプロム・ボンス号、八東村（現富浦町）の畜産家がアメリカへ渡り輸入したサー・ユーノ・ジョハナ号及び愛光舎のパラダイス号等を挙げることができる。いずれも当時最高の種雄牛で、高乳量の娘牛を数多く生産して乳量の向上に貢献した。

千葉県種畜場嶺岡分場（現千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所）には、改良初期の日本の名種雄牛といわれたアイデアル号（図-8）を始め3頭の優秀種雄牛が大正初期にオランダより輸入され、当時の優秀な雌牛に交配され、生産された娘牛の能力は大幅に向上し大正末期には2斗を越える検定牛も輩出し、また、大正6年及び9年の県共進会では出品、入賞頭数共に多数を占めた。

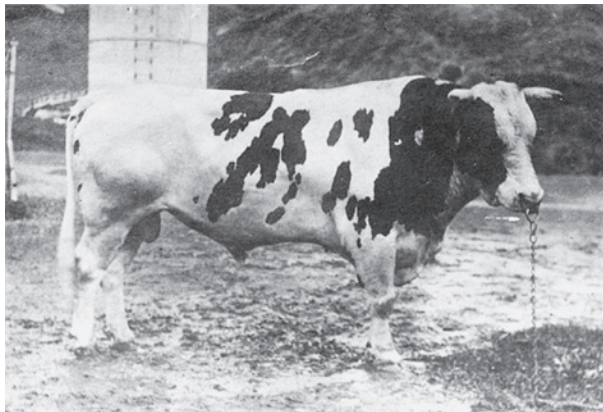


図8 アイデアル号（大正初期の名種牡牛）

大正2年3月嶺岡種畜場最初の輸入牛としてオランダより輸入される

大正8年にアメリカより輸入された通称「黒キング」はアメリカでも有数の高能力、好体型の血統の種雄牛で輸入後8年間供用されて生産牛は517頭に及び、その子牛の中より種雄牛として供用されたものも多く、この遺伝子は安房郡内に広く伝えられ、大正初期から改良されてきた乳牛がさらに一段と進歩した。

嶺岡種畜場には、その後大正13年に通称「白キング」、昭和2年に通称「第八インカ」と当時の日本での最高級

種雄牛が輸入され、これらによって大正末期から昭和初期の安房は日本で最も高いレベルの乳牛改良が進んだ時代となった。

⑤ 乳牛共進会

共進会は、出品された牛の体型上の長短を他の牛と比較しながら把握して今後の改良方向への示唆、出品者の交流や将来への意欲と刺激を与える場、優良乳牛を広く宣伝するための場等を目的に開催され、千葉県で最初に行われた共進会は、前述の「千葉県安房国牛馬共進会」で明治18年7月3日より6日まで4日間、長狭郡大幡村（現鴨川市大幡）で開催され、この時出品された牛馬総数は136頭で、内牛は82頭出品され、その内訳は内国種2頭、1回雑種27頭、2回雑種21頭、3回雑種7頭、洋種22頭、退却雑種1頭、参考牛2頭で、出品牛は洋種（ショートホーン種即ち短角種は当時洋種と呼ばれ現在は乳肉兼用種であるが、明治時代初期に東京・横浜では短角種が牛乳搾取業者の乳牛であった）及びその雑種（古来からの和牛に短角種が交配されたもの）が殆どを占めており、当時安房で飼養されていた短角種の大部分が出品されたものと思われる。

ついで、安房国種畜組合種畜場の開場記念として、明治20年5月25日古畑村（現鴨川市古畑）で牛馬比較会が開催され、出品目録によれば牛133頭、馬12頭合計145頭が出品された。牛の種別は洋種（短角種）が52頭、1回雑種25頭、2回雑種39頭、3回雑種11頭、4回雑種1頭、ゼルシー種2頭、デボン種1頭、和種2頭となっており、洋種の増加したことが注目されると共に、雑種の増加は洋種種雄牛による改良が2代、3代と一層進んだことを示している。

この頃より乳牛の改良意欲が一層盛んになり、その成果を競うために、郡内各地で小規模な共進会が開催されるようになった。

大正年間、千葉県畜牛共進会は4年、6年、9年、13年、15年に開催された。9年に開催された共進会には、5日間に3万5百人の入場者があり、他府県からの観覧者も多く、共進会を機会に他府県より購買者が相次ぎ、相当の価格で売却された乳牛も多くみられた。

乳牛共進会が盛んになった大正12年に発足した安房郡種牛協会で、初めての搾乳共進会（後に能力共進会の名で県共進会でも同時開催）を開催した。3日間共進会場で搾乳して乳量と乳脂率を競ったが、この時の最高乳量は2斗6合6勺（37.3リットル）であった。搾乳共進会は、その後、昭和11年まで4回も開催されたことは、当時の安房の酪農家の乳牛改良畜産振興への情熱の現れであり、安房のホルスタイン種は当時の日本乳牛界において最高の水準に達していたと思われる。

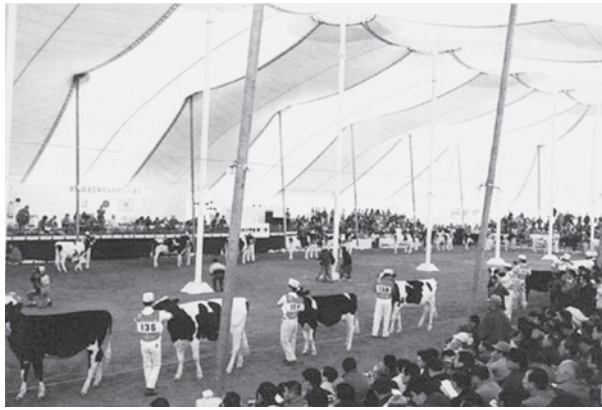


図9 第10回全国乳牛共進会
平成7年11月千葉県（千葉市ポートピア）開催

⑥ 乳牛販売

明治10年代から東京へ乳牛を供給してきた安房ではホルスタイン種への統一で、明治末期から乳牛頭数が急増し、明治45年には安房郡畜牛畜産組合によって家畜市場が勝山（現鋸南町勝山）常設市場ほか4市場が郡内に設置され、また大正初期から能力検定・登録・共進会等の改良事業が次第に盛んになって乳量、体型が向上し、乳牛産地として一層良い条件が整い全国に乳牛を販売するようになった。

大正4年の畜産組合報告の中に、東京、神奈川のほかに埼玉、茨城等の近県、及び長野、愛知、滋賀、大阪、山形等から種畜の購買者が来郡し盛況であったとあり、この頃から安房は日本全国への乳牛産地となった。

大正11年に北海道の酪農振興計画が決まり、牛馬100万頭計画が始まり、大正14年から昭和14年頃まで安房から毎年200頭位の乳牛が北海道へ送られ、北海道の十勝、北見地方の乳牛改良の基礎牛となったといわれている。

(4) 製乳事業の興り

① 貸し牛と預かり牛

明治15、6年頃より乳牛の飼育繁殖が盛んになるにつれ子牛育成に要した以外の牛乳の利用について策を講じる必要が生じていたが、当時の安房では牛乳加工施設や牛乳を飲用する者も無く、牛乳の用途に困っていた。

一方、東京、横浜などの都市部では牛乳や乳製品の需要が年々多くなり、明治20年前後には牛乳搾取販売業者が自分で所有している乳牛だけでは牛乳が不足したため、近郊農家の分娩牛を賃借りする事を考え出した。

嶺岡牧で白牛飼育の経験がある牧士の中に、東京で牛乳搾取販売業を開始した者もいた関係から、安房の乳牛は都市部の牛乳業者によく知られていたもので、競って賃借りされるようになり、今まで利用方法の無かった余剰乳から現金が得られるため、現金収入の少ない農家にとって副業としては畜産は極めて有利なものとなった。

この方法と共に行われたものに牛の預託制度があり、これは牛乳搾取に専念したい都市部の業者が乳離れした子牛を農家に委託し、育成させ妊娠牛として分娩期が近づくと農家に育成料を支払い牛を引き取る制度で、この方法は乳牛飼育に関心のない農家を啓蒙する役目や、自ら牛を求めることができない零細農家の中には預託によって得た育成料を基に子牛を買い入れる者もあり、これらの制度は、畜産農家数が増えた一因となった。この預託制度は昭和5、6年頃まで続いていた。

② 練乳事業

ア 練乳事業の興亡と先人の苦心

前述したように、余剰乳の用途に困っていた農家は、地元で牛乳を処理できる工場の設置を渴望していたが、相当な資金や、製造技術が必要とする製乳工場は容易には出来なかった。

明治27年東京海陸社という缶詰洋食料品店が大山村金束（現鴨川市金束）に根岸練乳所を設け練乳製造を始め、これが安房における練乳事業の創設であって、その後明治30年までに6社が設立され、30年以降も各地に小規模の練乳所が建てられたが、これらの練乳所は小資本で、しかも機械が不完全、技術も幼稚なために不良な製品を出して殆どが数年で失敗して廃業する状態であった。当時国内でも静岡、北海道等で練乳事業が創業したばかりで、練乳の製造法は外国でも極秘にしていたようで、明治時代は、練乳の製造技術や機械の改良のため、いずれも幾多の辛酸をなめた時代で、安房の練乳事業も他の地域と同様、その後大正初期まで、先駆者の苦難と興亡を繰り返した。

イ 練乳に加え製酪事業の奨励

明治42年に於いて、順調に事業を継続している練乳所は2カ所だけで、安房郡内のごく1部しか牛乳の処理ができないため、牛乳の処理方法の普及が急務であると考えた県及び郡は、製造の容易なバター製の製酪所を開設するため、県は講師を派遣しバターの製造技術を習得させ、郡は産牛組合にバター製造機械購入費の補助をさせ、これで各地に製酪所が興り、都市部への貸し牛はなくなり、練乳所も徐々に機械・技術が改善され各地に設けられ、大正5年には安房の農家はどの地域でも牛乳の生産出荷ができるようになった。

当時の練乳生産量を他の生産地と比較してみると、農商務省の調査では、大正2年は千葉、静岡の順であり、5年10月の安房の生産量は実に全国の41.4%を占めて第1位、2位は静岡で27.8%、3位は北海道の22.5%で、3位までの合計が91.7%となっており、安房は乳製品でも第1の先進地となった。

ウ 近代企業としての練乳事業

大正時代に入り乳牛頭数、乳量ともに急速に増加し、

また、第1次大戦により外国産練乳の高騰によって国産練乳の需要が増大し、一方では機械の急速な発展もあって、会社組織による練乳会社が設立されるようになり、大正5年の房総練乳、6年の房南練乳の設立、11年の極東練乳の進出等がこれで、安房の製乳界は最新の設備の工場となった。

特に、安房乳業界に大きな影響を及ぼした房総練乳株式会社は、安房製乳界の経営不振を改善すべく大正5年9月に設立された。最初は玉川練乳所、磯貝練乳所及び製酪所が中心で、同年滝田工場を建設し、さらに大正6年明治製糖の出資を得て（明治製糖が初めて乳業へ進出した）安房の多くの練乳所・製酪所を買収合併し、6年に勝山工場、翌7年に主基工場、8年に館山工場を建設して4大工場となり、近代設備と牛乳生産量の増加で一大発展を遂げた。大正9年には明治製糖の子会社である東京菓子株式会社と合併して同社の製乳部となり、東京菓子は13年に明治製菓株式会社と改称され、安房に確固たる地位を築いた。（明治製菓の製乳事業は安房から始まり、後に東京、東北、北海道へ発展して昭和15年に明治乳業株式会社になった）

また森永製菓株式会社は大正6年に吉尾村（現鴨川市吉尾）の愛国練乳を買収、同時に日本練乳を創立して安房で生産された牛乳を森永ミルクキャラメル为原料として練乳の自家製造に着手した。

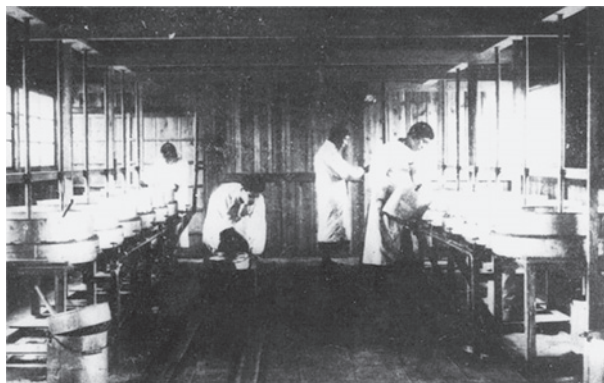


図10 磯貝練乳所工場内部（明治32年頃）
『安房酪農百年史』より

このように現在の大乳業会社の源流が、同じ6年にこの安房に生まれ、製菓原料として初めて国産牛乳である安房の牛乳を利用したことも、製乳業が最も早く発達した安房酪農の歴史を物語っている。

③ 東京への牛乳輸送

安房の牛乳生産量が増加するに従い、その処理を牛乳処理場で行ったことは前述した通りであるが、牛乳をそのまま東京へ送って、小売り牛乳として処理することを思い立った人物がいた。

明治28年東京で牛の病気が蔓延し牛乳が不足した際、

東京近郊より牛乳を買い付けて東京へ送ることを考えた高橋銀太郎（明治30年小規模な練乳所を興し、32年には蒸気煎蒸器を考案して練乳の品質向上を図り、事業の拡張を行い、後に房南練乳株式会社を創立した。）は、農家を廻り自ら搾乳して、館山港から汽船便で東京の牛乳商へ送ったのが安房からの生乳輸送の最初で、その後明治41年に勝山町（現鋸南町勝山）の須田豊治郎が、43年には同町石井米蔵が、勝山港から汽船便で東京への牛乳輸送を開始したが、いずれも短期間であった。

大正9年5月房総練乳株式会社は、内房線勝山駅から東京牛乳小売商組合へ送乳して、漸く本格的な生乳輸送が始まり、最初は客車便で送乳したが、同年9月より送乳専用貨車で輸送するようになってその量を増し、その後同社が東京菓子と合併するが、生乳輸送は継続され、大正13年明治製菓と改称、以後一層この事業に力を注ぎ、昭和2年には両国に大市乳工場を建設して市乳販売に威力を示し、需要期には20石（3,750kg）以上の牛乳が勝山駅から輸送された。

また、安房畜産株式会社も大正9年5月から勝山工場を設置して、牛乳の貨車輸送を開始し、その後11年12月から極東練乳株式会社が工場を引き継いで東京への生乳輸送に専念し、1日10数石から20数石の牛乳を冷蔵貨車で東京へ送った。

このように両社が開始した生乳輸送は、安房が乳製品から一歩進んで東京への市乳供給、即ち房州乳の市乳化に先鞭をつけたものであった。

一方、明治以来東京の牛乳販売は牛乳搾取販売業者が東京市内に牧場を持ち、搾った牛乳を販売（配達）していたもので、（その後一部で牧場での搾乳と小売店が分離した）房州からの牛乳輸送は東京以外から初めての導入であり、搾乳組合側は房乳移入阻止運動を行い、監視庁を動かして、農家の牛乳は不潔で東京市民の飲用には不適切とし、房州牛乳を販売するものは食紅を用いて「赤い牛乳」として販売せよと言うことになり、千葉県は市乳としての資格を得るように、農家へ共同搾乳所を奨励し、施設を整えて東京へ送乳する策を講じたことにより、大



図11 牛乳の貨車輸送（大正9年9月）
内房線勝山駅から送乳専用貨車による東京への生乳輸送

消費地東京の市乳供給基地として確固たる地位を築いた。

(5) 乳牛産地安房

昭和に入り躍進を続ける安房の酪農は昭和12年には、乳牛頭数12,000頭、日産乳量300石(56.25t)の最高を記録し、またこの間乳牛産地安房には全国各地から購買客が訪れ乳牛は国内ばかりでなく朝鮮、満州及び中国にまで販売された。しかし、戦争の激化につれて、終戦時には乳牛頭数1,000頭、日産乳量10石余に転落をするが、安房酪農の復興を目指す酪農家は、昭和20年11月早くも安房酪農会を結成し、これを母胎に23年には安房の酪農発展のため、安房郡畜産農業協同組合を設立し、30年頃には、日産乳量、乳牛頭数とも戦前の最高時まで回復し、57年には乳牛頭数28,000頭、年間乳量81,000トン記録する大発展を遂げると共に、乳牛産地安房には全国から購買客が急増し、最盛期には毎年数千頭の優良牛を全国各地に送り続けて、日本酪農の発展に貢献してきたが、全国の乳牛頭数が増加し、51年に生乳の計画生産が始まってから、安房から全国への乳牛移出は激減し、大正中期頃から長く続いた乳牛産地安房としての役割は終わってしまった。

5. おわりに

本県の酪農は、その発展過程で家財を注ぎ込んでまで練乳の製造と乳牛の改良に情熱を懸けた安房地域における人々の活躍がなければ今日はなかったと思われる。過去、平成10年まで生乳生産量は北海道に次いで第2位を堅持し、最近の調査でも乳牛飼養頭数(成牛)は40,900頭(平成16年2月1日調査)、生乳生産量は300,158トン(平成16年速報値)と、それぞれ全国第4位、第3位として酪農県としての地位を堅持し続けており、県内農業の中においても、重要な位置を占めている。

今回調査した嶺岡牧から興った本県酪農の発展経過に



図12 千葉県酪農のさと資料館

酪農や畜産について県民の理解を深めることを目的に平成7年11月に開設



図13 白牛(アメリカンブラーマン)

酪農のさとのシンボルとしてアメリカより輸入

については、千葉県酪農のさと酪農資料館(図-12、13)に詳しく紹介されているので是非ご覧頂きたい。最後に、古文書、文献等資料調査にご協力を頂いた千葉県農林水産部畜産課瓦井副主幹及び千葉県酪農のさと矢部孝恵さんまた、資料の写真撮影にご協力を頂いた千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所笹生所長並びに風間上席研究員に感謝申し上げます。

引用文献

- 1)『校訂新撰姓氏録の研究』(本文編)P285 佐伯有清 昭和37年7月1日発行 吉川弘文館
- 2)『新訂増補国史大系』「類聚三代格」巻五 P224 黒坂勝美・国史大系編集会編輯 昭和62年8月20日発行 吉川弘文館
- 3)『新訂増補国史大系』「延喜式」巻二八 兵部省 諸国馬牛牧 P709 黒坂勝美・国史大系編集会編輯 昭和62年8月20日発行 吉川弘文館
- 4)『房総叢書』「千葉県古事志」P481～2 簗岡山牧場 改訂房総叢書刊行会編 昭和34年発行
- 5)『房総叢書』「嶺岡五牧鏡」P170 改訂房総叢書刊行会編 昭和34年発行
- 6)『房総叢書』「嶺岡牧沿革」P172 改訂房総叢書刊行会編 昭和34年発行
- 7)『房総叢書』「嶺岡五牧鏡」P153 改訂房総叢書刊行会編 昭和34年発行
- 8)『安房酪農百年史』P8～13 昭和36年3月15日発行 安房郡畜産農業協同組合
- 9)『新訂増補国史大系』「徳川實紀」第8編「有徳院殿御実記」第廿巻 P370(享保10年4月～5月) 黒坂勝美 国史大系編集会 昭和51年7月1日発行 (株)吉川弘文館
- 10)『安房酪農百年史』P17 昭和36年3月15日発行 安房郡畜産農業協同組合
- 11)『安房酪農百年史』P18 昭和36年3月15日発行

安房郡畜産農業協同組合

- 12) 『日本畜牛雑誌』P24～25 大正13年6月15日発行
大日本畜牛改良同盟會
- 13) 『白井町史資料集』I P309～321「野馬掛白牛酪御
法1件留－堅冊（寛政9年）」昭和59年3月発行 白井
町史編纂委員會 白井町
- 14) 『増訂武江年表』2 P12～13 斉藤月岑著 1968
年発行 平凡社
- 15) 『千葉県安房郡誌』千葉県安房郡教育委員会編纂発
行 大正15年6月30日発行
- 16) 「安房の酪農について」錦織純雄 安房高校27会記
念文集『オアシス27』第6号 2001年2月24日 定例
年会時発行

参考文献

- 1) 『安房酪農百年史』安房郡畜産農業協同組合 昭和
36年3月15日発行
- 2) 『安房畜協10年の歩み』安房郡畜産農業協同組合
昭和63年9月発行
- 3) 『安房郡畜産史』秋山六三郎編輯 昭和3年11月25
日発行 安房郡畜牛畜産組合
- 4) 『千葉県畜産発達史』千葉県畜産発達史編さん会
平成元年3月発行
- 5) 『日本乳製品小史』野村泰三著 有隣堂出版 昭和
44年5月20日発行
- 7) 『史学雑誌47』(11)「徳川吉宗と西洋文化」P1575
齋藤阿具 昭和11年11月1日
- 6) 「千葉県乳牛共進会のあゆみ」錦織純雄『千葉県酪
農のさと企画展資料』平成12年2月29日
- 7) 「安房の乳牛改良に貢献した種雄牛」錦織純雄 未
発表原稿
- 8) 『牛乳と日本人』雪印乳牛広報室編 昭和63年4月
8日発行 新宿書房
- 9) 『乳の道標』矢沢好幸著 昭和63年8月31日発行
(株酪農事情社)
- 10) 『大日本牛乳史』牛乳新聞社編纂 昭和9年7月15
日発行 牛乳新聞社
- 11) 『丸山町史』丸山町史編集委員会 平成元年3月30
日発行 丸山田
- 12) 『鴨川市史』(通史編)鴨川市史編さん委員会 平成
8年1月発行 鴨川市

掲載論文は著者らに当研究会シンポジウムの講師を依頼した経緯がありましたが、体調を崩され実現できませんでした。その後著者らが嘗て発表した論文（平成16年度工業歴史資料報告書（第13号）を送付され、嶺岡牧場における貴重な研究論文であると評価されました。しかし当研究会の投稿規定に抵触するため、「資料」という型で著者及び千葉県現代産業科学館の同意を得て広く啓蒙するため掲載しました。

(編集委員会)

エッセイ

御料牧場つながり

鈴木 慎二郎

現在、宮内庁の御料牧場は栃木県高根沢町にある。牛、豚、羊などを飼い、牛乳・乳製品やハム・ソーセージなどを製造し、皇室に直送している。外に20種類ほどの野菜の生産も行なっている。皇室向けの野菜のうち、独活のような特殊のものの外は、殆んどここで作られているという話である。

以前は千葉県にあり、下総御料牧場と称されていた。更に遡ると江戸幕府が設置した佐倉牧の一つであった。千葉県から移転してきたのは、昭和44年、佐藤内閣が新東京国際空港を成田市三里塚地区と決めた3年後である。三里塚では、反対闘争が長期間に亘って繰り広げられ、開港したのは昭和53年である。御料牧場の方は政府の意向に沿う形で早々の移転になったのであろう。

これとは別に、第二次大戦前には北海道にも御料牧場があった。明治5年北海道開拓使長官黒田清隆により開設されたものである。帝室林野局新冠御料牧場と呼ばれ、総面積7万町歩の及んだこともある。

私が農林省に採用されて最初の勤務地であるが、こちらは昭和22年に農林省に移管され、新冠種畜牧場として乳牛の改良を行なう牧場へと役割が変わっている。昭和30年代中頃、日本にホルスタイン種のエクセレント級種牡牛は8頭いたが、そのうち4頭が飼養されて職員はそれを誇りにしていたものである。

ところで、昔は軍隊、今は総評といわれた頃、「新総評」という雑誌が出された事がある。

その特集記事によれば、明治政府は維新後、天皇家を京都から東京に移した際、皇居を初め各地の御料地などの財産創りを行なったが、新冠御料牧場もその一つであった、とされていたのを記憶している。

いま私が住んでいる那須野が原には、松方正義、山県有朋ら明治の元勳といわれる人たちの多くの農場があった。これらは大農場ではあったが、水のない台地にあり、疎水などで水が使えるようになるまでは、瑞穂の国の人々には顧みられない土地であった。下総御料牧場のあった三里塚周辺は、長塚節の「土」の舞台にもなった痩せた火山灰地であり、新冠御料牧場も寒さ厳しい北海道の山林が主体の土地であった。明治政府や元勳の力をもってしても、新しく広大な農場や牧場を造るのは、利害関係の少ない土地でなければ難しかったのであろう。

新冠御料牧場は、専ら皇室向けの馬の生産を行なっ

ていた。牧場内には、皇室の貴賓室として、明治年間に完成した龍雲閣という木造二層・御殿造りの立派な建物がある。ここで伊藤博文が明治42年8月、韓国の皇太子に競馬を見せたという話が残っている。伊藤がハルビンで暗殺されたのは、その2ヶ月後である。大広間には、狩野探幽の屏風や谷文晁の掛け軸があったが、労組の大会・職場集会や職員の送別会もここで行われていた。その外にも、皇室関係の物品が保管されていて、場長は農林技官のほか、総理府技官の肩書きも持っていた。2頭牽き4頭たての飾りのついた馬車も残されており、会計検査の折に検査官を牧場入口から庁舎まで乗せて、遇するようなこともやっていた。飼料課には、帳外といわれる隠し畑が5反歩ほどあり、そこでは小豆をつくり、毎年皇室に献上していた。お返しに恩賜の煙草と酒が送られてくるのだが、これを職員に配るのに課長は苦心していた。

私は群馬県家畜育成牧場連絡協議会の研修旅行という事で、高見沢の御料牧場を見学させて貰ったことがある。また平成18年に、私が関わっていた(財)神津牧場からジャージー種の初妊牛2頭を買い上げてもらう事になり再度訪れている。皇室に届ける牛乳は、乳脂肪率が4.0%以上とされており、ホルスタイン種だけでは無理なのでジャージー種が必要であるとのことであった。嘗ては、岩手種畜牧場から管理換を受けていたが、家畜改良センター岩手牧場ではジャージー種の飼養をやめたため、他から求めることになった訳である。

地元下仁田町の酪農家からは、只で献上したのかなどともいわれたが、他への売却と同じく初妊牛1頭38万円で買い上げてもらったのである。ただ御料牧場も予算がないので、運賃はそちら持ちで運んで貰いたいという事になった。その時の石原哲雄場長は新冠牧場の場長を経て、こちらに着任された方であり、家畜改良センターの頃からの知り合いでもあった。ざっくばらんに話が出来たので、2頭の牛をトラックに乗せ、牧場から総勢8人で出掛けたのは、御料牧場を皆に見てもらいたいと思ったからである。

そのとき成吉思汗鍋をご馳走になったが、羊肉はホゲットと言われる1〜2歳のもので、ラムやマトンは食べたことがあるが、これは初めてであった。皇室関係行事では、主に羊肉がメイン料理となるが、ホゲットしか使われないという話である。味はしっかりしているのに、

羊肉特有の臭みがなく、備長炭で焼かれた成吉思汗は北海道時代に食べたのも含めて最高の味であった。園遊会でもこの肉が出されているようである。

馬の名前の付け方が新冠種牧場と同じだったことにも驚きがあった。私が新冠に任いたのは昭和34年であるが、耕馬がまだ40頭ほど飼われていて、牧草・飼料作物の栽培・管理に活躍していた。その中に、例えば梅命、梅録や林星、林遠など、似たような名前の馬が何組かいたが、それは皇室歌会始めの御題から、生まれた年の一字をとって命名されているからという事であった。御料牧場には、今はさすがに耕馬はいないようであるが、乗馬用や輓馬用の馬が飼われている。そして馬の名前が御題から一字もらっていること知り、つながりを感じたものである。

現在の櫻井保場長も、前任地は新冠牧場である。平成18年9月に天皇・皇后両陛下をお迎えし龍雲閣の二階の外廊下から牧場の景色ご覧になられたこと、昭和天皇が皇太子時代の大正11年に牧場においでの際の写真をご

覧になり大変喜ばれたということ、などを新冠牧場の集まりの際に話された。

平成20年8月、天皇・皇后両陛下がお忍びで神津牧場にお見えになり、カーフハッチで仔牛に哺乳された事がある。昼食は牧場産のジャージー牛肉を使ったカレーライスを召しあがられた。異例のことのようであったが、御料牧場がジャージー種乳牛を神津牧場から買い上げて頂いたのがきっかけとなり、石原場長の紹介があったようだ。加えて昔から、神津バターを皇室関係で買い上げて頂くなど、長年の積み上げがあったからではないかという思いもある。

平成20年に日本酪農乳業史研究会が発足し私も会員となっている。そんなことで裏話であるが、畜産の歴史の一齣と言う事で書き留めさせていただいた。(農林水産技術同友会報第56号より転載)

(研究会評議員 元草地試験場々長
栃木県那須塩原市在住)

「酪農乳業史研究」投稿申込書

平成 年 月 日

著者名	(ローマ字)	
所属先 および 役職名	(論文、研究ノートの場合は、 <u>英語での表記</u> をお願いします)	
連絡先	(著者が複数の場合の連絡先氏名)	
	(住所) (論文、研究ノートの場合は、 <u>英語での表記</u> をお願いします)	
	(電話)	(メールアドレス)

題 名	(日本語)				
	<u>(英語)</u>				
区 分	(希望区分に○をつけてください。)				
	1. 論 文	2. 研究ノート	3. 調査報告	4. 総 説	
	5. 解 説	6. エッセイ	7. 書 評	8. その他 ()	
	原 稿 字 数	図 枚 数	表 枚 数	写 真 枚 数	刷上り推定 頁数 *
	字	枚	枚	枚	

* 編集委員会で記入いたします。

連絡先 〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866 日本大学生物資源科学部畜産経営学研究室内
 日本酪農乳業史研究会編集委員会 小林信一
 TEL, FAX 0466-84-3656
 E-mail kobayashi.shinichi@nihon-u.ac.jp

FAX、郵送またはE-mailでご連絡下さい。

日本酪農乳業史研究会入会届

平成 年 月 日

1. 氏 名	ふ り が な
	生年月日 年 月 日
2. 所属機関	〒 TEL - - FAX - - E-mail
3. 自 宅	〒 TEL - - FAX - - E-mail
4. 会報送付先	ア. 勤務先 イ. 自宅
5. E-mail での 連絡の可否	ア. 可 イ. 否
6. 研究会名簿 公表の可否	A. 勤務先名 ----- ア. 可 イ. 否 B. 所 在 地 ----- ア. 可 イ. 否 C. 自宅住所 ----- ア. 可 イ. 否
7. その他連絡事項	

4、5、6、については該当する項目の記号を○で囲んでください。

連絡先 〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866
日本大学生物資源科学部畜産マーケティング研究室内
日本酪農乳業史研究会事務局 小泉聖一
TEL, FAX 0466-84-3648 E-mail koizumi@brs.nihon-u.ac.jp

編集後記

本号は、発刊が大変遅れて会員及び執筆者に誠に申し訳なく、心から先ずお詫び申し上げます。

今日の酪農乳業の原型が明治期にあり、東京で活躍した和田牧場、興真舎の末裔が語る先人の牛乳に関する篤き想いにシンポジウムを通じ大変感動しました。牛乳を忌避した時代、そして酪農・乳業技術が幼稚で勃興期のころ、欧米に近づこうと努力した搾取家たちに敬意を表したい。

我が国の酪農乳業の開祖で、明治期を舞台に活躍した前田留吉には謎も多く書籍にも語られなかった事も沢山あるという。この事実を足立達先生らによって解明していただいた。前田一族と共に高田馬場の亮朝院で眠る前田留吉が、110年後の今日の酪農乳業を見てどのように語るのでしょうか。……公表されていない写真並びに資料を前田留吉の末裔から寄贈していただいた。研究会として大切に保存し後世に語り継ぎたい。

酪農乳業史に重要な「嶺岡の牧」の論文について資料という型で関係者の了解のもと紹介させて頂いた。実は著者がシンポジウムで講演をして下さる予定であったが体調を崩され遂に実現することが出来なかったからである。

時代は下って埼玉を舞台に展開した戦後の野菜地帯の酪農経営の実態について調査研究をしていただいた。時代に翻弄されながら酪農を守ってきた近郊酪農家の物語である。

会員の中から酪農乳業史の逸聞（いつぶん）を語ることのできる写真を提供していただいている。この写真の背景には貴重な出来事が埋もれているのであろう。資料として紹介したいので、これからは是非会員の皆様のご提供をお待ちしています。

酪農乳業史研究会は6年目を迎え、シンポジウムの開催および研究誌の発行を中心に活動をしてきた。シニアグループとも言われながら、酪農乳業史を談論風発で語り継いでいる。今年こそ会員100名超を確保して次の段階に飛翔したい。

最近、牛乳の警察衛生行政とは？…疑問を持つ東北の女子大生が入会してくれた。また関西の女子大生から明治大正期の牛乳・乳製品をテーマで卒論を書きたい。インターネットで関連資料を検索していたところ当研究会に辿りついたという。早速研究誌を送り指導教授の了解があれば研究誌に投稿するようエールを送った。このように若い人々が関心持ってくれる事が実に頼もしい。ホームページの充実は勿論、研究会体制を強化することが喫緊の課題である。

会員の皆様のさらなるご指導とご支援をお願いいたします。 (乳大郎)

編集委員（五十音順）

小泉聖一 小林信一* 稗貫 峻 細野明義
前田朋宏 増田哲也 森地敏樹 矢澤好幸（*委員長）

酪農乳業史研究（9号）

平成26（2014）年9月10日

編集・発行

日本酪農乳業史研究会

252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部畜産マーケティング研究室内

TEL & FAX 0466-84-3648

郵便振替口座 00270-8-66525

印刷 佐藤印刷株式会社

150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-10-2

TEL 03-3404-2561 FAX 03-3403-3409

資料 1 (目で見る酪農乳業史)



植木職人(絵名) 明治後期(1898～1912)に撮影
後方は明治後期の牛乳店(東京下町付近推定)であるが
ガラス戸に貼られた白紙は貸家とあり牛乳店舗(ミルク)
を廃業して貸家に出されたものらしい(推定)



運送……Oxes Car 明治後期撮影
坂道を登る牛車(場所不明)

モース・コレクション「明治の心……モースが見えた庶民の暮らし」展(チラシ)より
情報提供者 埼玉在住 竹村勝也さん



ホルスタイン種乳牛(牡)



ホルスタイン種乳牛(牝)

ツルタイプ制作(牛のGozo・1923(大正12)年)……河村吾蔵記念館所蔵(佐久市)
アメリカで最初にツルタイプ(標準型)を制作した日本人彫刻家河村吾蔵

情報提供者 小諸市在住 細野明義さん



湧水の水槽で生乳を冷却する酪農家の主婦



牛乳輸送缶を背負って集乳所に運ぶ酪農家

1959(昭和34)年……当時酪農家は1～2頭の飼育だったという。

神奈川県津久井地方 写真提供者 加藤正彦さん

資料 2 (目で見る酪農乳業史)



「農協牛乳発祥の地」モニュメント
平成15年・旧津久井農協跡地建立

石碑には一世を風靡した成分無調整・自然はおいしい・農協牛乳と刻まれている。

「を農民の手で」の理想を掲げ、昭和三十七年四月、酪農民一万円の拠出を基に協同乳業の委託工場として発足した津久井郡農協・牛乳工場は幾多の難関の後、昭和四十八年二月全国農協直販体の設立と同時に画期的な成分無調整・自然はおいしい・農協牛乳生産委託工場として新生した。郡内酪農家へ繁栄をもたらした新鮮で高品質な牛乳を供給した偉業は、時代の変遷を越え、この地を故郷とし、

昭和47年全国農協直販体の受託・最初に日量33トン最大102トン農協牛乳を生産した津久井郡農協牛乳工場
神奈川県相模原市津久井城山町 写真提供者 加藤正彦さん



◀ 勇敢に戦う古代クメール兵士
(戦車を引く犂牛)
回廊壁画の一部

聖牛ナンディンが鎮座 ▶
(879年ロリュオス遺跡)
後方の祠堂は現在解体補修中

神々が棲まう王城楽土アンコールワットの旅より

写真提供者
東京在住 小川武三郎さん



Journal of Dairy History

The Ninth Issue

(September 2014)

CONTENTS

Preface	NAKASE Shinzo	1
【The Sixth Symposium】 The MILK Men who established Fluid Milk Market in Meiji Period		3
Keynote Speech: Wada Ranch in Meiji, Taisho and Showa Periods	KUROKAWA Atsunobu	5
Panel Discussion: WANI Hiroaki, KUROKAWA Atsunobu, FURUYA Tuneo and MORITA Kunio		7
【Article】 On the Publication of an another Biography of Tomekiti Maeda in the Field of Dairy Farming in Japan During from the Closing Days (1860-1867) of the Tokugawa Regime to the Middle Stages (1868-1887) of Meiji Period.		
I A Biography of Tomekiti Maeda written already by Kouhei Kaneda and Historical Background of the Publication	ADACHI Susumu and YAZAWA Yosiyuki	11
II Distinguishing Features of the Manuscript for Biographical Writing on Great Dairy Merchant Tomekiti Maeda	ADACHI Susumu and YAZAWA Yosiyuki	28
【Explanatory】 A Biography of Merchant Prince Tomekiti Maeda in the Field of Dairy Farming in Japan During the Meiji Period (interpretation of the original)	ADACHI Susumu and HOSONO Akiyoshi	39
A Biography of Merchant Prince Tomekiti Maeda in the Field of Dairy Farming in Japan During from the Meiji Period (the original).....		42
【Research Report】 Transition and Reality of One Dairy Management in Vegetable District	ISHIKAWA Hideo	44
【References】 Progress of the Dairy Farming Development in Chiba Prefecture	ISHII Toshio and NISHIGORI Sumio	50
【Essay】 The Relation with Royal Gryo Ranch	SUZUKI Shinjiro	61
Application Form for Submitting to the Journal of Dairy History		63
Application Form for Membership of the Japanese Society of Dairy History		64
Editor's Notes		65

EDITED AND PUBLISHED BY

JAPANESE SOCIETY OF DAIRY HISTORY

1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan
Lab. Marketing of Animal Industry
Department of Animal Science and Resources
College of Bioresource Sciences, Nihon University